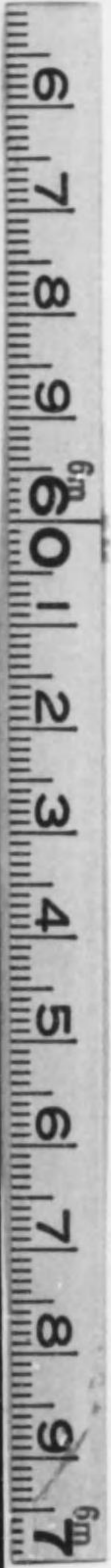


343-1
1200501401036



始



社團
法人 忠勇顯彰會編纂



忠勇列傳

陸軍之部 第一卷



明治天皇 御製
世と共に流るる片も人の國は古少
い力を捨てし人扶いさを

扶在仙府東馬平八申清書



忠勇

守正王



元本會副總裁 侯爵 東郷平八郎閣下題字

忠誠

萬有

平八郎題

陸軍大臣 板垣征四郎閣下題字

流

芳

子

古

板垣征四郎

海軍大臣 米内光政閣下題字

忠

烈

光

政

五



序

世界列國ノ生存競争ハ前世紀以來頗ル激甚トナリ、優勝劣敗弱肉強食ノ勢ヲ馴致シ文化上、軍備上優越ナル歐米ノ壓力ハ滔々トシテ抵抗力ノ薄弱ナル亞細亞方面ニ侵襲シ來リ、支那大陸ノ如キモ其ノ北邊西境南域ハ既ニ久シキ以前ヨリ白人ノ蠶食スル所トナリ滿洲、朝鮮亦幾度カ危機ニ瀕ス。幸ニ之ヲ阻止シ現今ノ状態ニ安定シ得タルハ、實ニ我が帝國ガ毅然トシテ其ノ肇國ノ大精神タル天業恢弘、皇道光被、八紘一字ノ實現ニ基キ、國ヲ擧ゲテ東亞保全ノ支柱トナリ、東洋永遠ノ平和ノ爲メ幾度カ國運ヲ賭シテ聖戰ニ從事シタル結果ニ外ナラヌノデアル。

二
惟フニ今ヤ東亞ノ諸邦中其ノ主ナルモノハ日、滿、支三國デア
ル。而モ東亞ノ保全、東洋平和ノ維持ハ懸ツテ此等三國ノ緊密鞏
固ナル團結ニ俟タサルヲ得ナイ。顧ミテ此ノ團結ノ中心タリ指導
者タル可キ國家的實力ト文化トヲ有スルモノハ實ニ我ガ帝國アル
ノミ、況ンヤ此ノ三國ハ同種同文、地理的、歴史的、經濟的關係
ニ於テ自然相互依存以テ大同團結ヲ成ス可キ運命ニアルニ於テオ
ヤ。

然ルニ最近支那ノ支配者タル蔣介石政權ハ頑迷不靈ニシテ事理
ニ暗ク徒ラニ自國領土ノ龐大ト人口ノ多衆トヲ恃ミ、以夷制夷ノ
傳統的術策ヲ用ヒ、自己政權ノ維持ニ没頭シ、陰ニ赤魔ノ蘇聯ト
欸ヲ通ジ其ノ支持ヲ得、之カ代償トシテ險惡無道ナル思想ノ侵入

ニ便スル爲メ自國ヲ割イテ赤化ノルートヲ設定シ、又利ニ敏キ英
米諸國ヲ誘ツテ東洋平和ノ礎石タル日本ノ高遠ナル理想ノ實現ヲ
凡ユル手段ヲ以テ妨碍セント試ミルニ至ル、此等ノ結果ハ近年ニ
至ツテ排日抗日ノ暴舉トナリ日支關係ハ刻々惡化シ遂ニ昨年七月
七日北支蘆溝橋ニ於テ我ガ駐屯部隊ニ對シ不法發砲ヲ敢テシ、日
支兩軍ノ間ニ戰端ヲ惹起シ、次デ八月九日上海西郊ニ於テ我ガ帝
國海軍將校ノ殺害事件ヲ發生スルニ至レリ、事茲ニ及ンデハ多年
隱忍自重只管東洋平和ノ維持ニ專念シタル我ガ帝國モ蹶然起ツテ
頑迷ナル蔣政權並ニ其ノ容共抗日ノ兇逆分子ヲ徹底的ニ撲滅セザ
ルヲ得ザルニ至リ、茲ニ暴支膺懲ノ一大聖戰ヲ起スノ已ムナキ立
場ニナツタノデアアル。

本聖戰ノ對象ハ固ヨリ支那一般民衆デハナイ、詭驕憎ム可キ共產主義ニ迎合シテ國民ニ誤マレル排日教育ヲ施シ之ヲ示唆シ煽動シテ飽クマデ親日ヲ阻マントスル蔣介石政權ヲ倒滅シ、之ニ阿附夤緣スル軍閥政客ヲ掃蕩シテ民生ヲ塗炭ヨリ救ヒ國際正義ニ立脚スル更正支那ヲ現出セントスルニアリ、惡政ニ喘ク四億ノ同種民族ニ對シテハ其ノ境地ヲ憐ミ扶掖ノ道ヲ竭ス可キハ事變當初ニ畏クモ降シ給ヘル御聖勅ニ昭々トシテ明カデアル。

開戰以來既ニ一年有餘、時恰モ炎熱燒クガ如キ夏季ヨリ祁寒骨ヲ刺スノ冬季ヲ通ジテ、我が陸軍ニ於テハ或ハ峻嶺堅岩攀登容易ナラザル山嶽戰ニ、或ハ泥濘膝ヲ沒シ障礙縱橫進攻困難ナル局地戰ニ、或ハ荒天密雲ヲ衝ヒテノ空襲ニ、千辛萬苦ヲ意トセズ常ニ

寡ヲ以テ衆ヲ破リ、其ノ勇戰奮闘ハ眞ニ鬼神ヲ泣カシムルモノガアリ、又海軍ニ於テハ陸戰隊ノ上海クリーク戰、支那沿岸ノ封鎖ヲ始メトシ或ハ渡洋爆擊制空權ノ獲得ニ、或ハ陸兵ノ上陸援護ニ或ハ長江作戰、粵漢線其ノ他ノ要地爆擊ニ常ニ萬難ヲ排シテ赫々タル偉勳ヲ奏シ、實ニ皇軍ノ威武ヲ中外ニ發揚シタモノデアル。吾人銃後ノ國民ハ出征將帥ノ卓越ナル作戰指導ト戰線將士ノ熱烈ナル殉職精神ト其ノ勳功トニ對シ感激深謝ニ堪ヘナイ所デアツテ、特ニ其ノ殉難犠牲者ニ對シテハ深甚ノ同情ト哀悼ヲ禁ズル能ハザルモノデアル。

今ヤ北支一帶ニハ日章旗高ク翻リ、上海ノ堅壘、首都南京ノ金城湯池モ我が占有ニ歸シ、武漢三鎮ノ陷落亦タ目睫ノ間ニ迫ル、

然レドモ彼等ハ暗愚ニシテ未ダ覺メズ、二三野心國ノ頼ミ難キ後援ヲ夢ミ執拗ニモ長期抵抗ヲ繼續シツ、アリ、カクテ本聖戰ノ終局ハ果シテ何レノ日ナルカ未ダ逆睹シ難イモノガアル。唯大勢ハ既ニ定リ邪ハ遂ニ正ニ勝ツ可キデナイ、吾人ハ固ク必勝ノ信念ヲ以テ我カ 皇上ノ御稜威ノ下ニ外ハ出征將士ノ忠勇義烈ト内ハ銃後國民ノ忠誠奉公トガ終始一貫シテ速ニ蔣政權ノ壞滅ト親日防共ノ新支那政權建設ノ大目的ヲ達成シ、以テ東洋平和ノ永遠ノ安定ヲ見ルニ至ランコトヲ祈願シテ已マナイモノデアアル。

我が忠勇顯彰會ハ日露戰役以來累次ノ國難ニ殉ジタル勇將猛兵ノ忠勇列傳ヲ各戰役毎ニ編纂刊行シ、一ハ以テ此等殉難諸勇士ノ英靈ヲ長ヘニ弔スルト共ニ、一ハ其ノ忠勇義烈鬼神ヲ泣カシムル

偉績ヲ顯彰シテ其ノ芳名ヲ千載ニ傳ヘ以テ後昆修養ノ龜鑑タラシメント期スルモノデアアルガ、今次ノ支那事變ハ其戰域ノ廣大ナルト兵力ノ多衆トハ未曾有ト謂フ可ク、隨ツテ戰鬪ハ激甚ヲ極メ且ツ長期ニ亘ル關係上之ガ犠牲者ノ數モ頗ル多ク、現ニ開戰以來一年間ニ於ケル我が陸海將兵ノ戰死者ハ既ニ四萬ニ垂ントシ今後戰局ノ終結マデニハ果シテ幾何ニ達ス可キカ、固ヨリ豫想シ難ク隨ツテ之ガ列傳ノ編纂事業ノ前途ハ頗ル遼遠ナルヲ想ハシムルモノアルモ、元來此ノ種ノ精神的事業ニ從事シツ、アル、我等同人トシテハ事ノ難易ヲ超越シ一意全能力ヲ發揮シ萬難ヲ排シテ必ズヤ所期ノ目的ヲ完全ニ達成センコトヲ期シ且ツ誓フモノデアアル。

幸ニ吾人ノ精神的努力ノ結晶タル本忠勇列傳ガ幾萬戰死者遺族

ノ慰問ノ一助トナリ神棚ニ記念的家寶トシテ長ヘニ光彩ヲ添ヘ以テ後昆子弟ノ感奮興起ノ資料タルヲ得バ本懐ノ至リデアアル。

昭和十三年十月

忠勇顯彰會々頭

陸軍大將 町田經宇

凡 例

- 一、本書ニハ昭和十三年四月二十三日行賞ヲ發表セラレタル陸軍戦歿殊勳者中ノ四〇〇名ヲ登載セリ。
- 一、昭和十二年七月七日以降滿洲國ニ於テ匪賊討伐等ノ爲忠死シタル者ハ支那事變忠死者トシテ取扱ハレアルヲ以テ本書ニ掲載セリ。
- 一、本書傳記掲載順序ハ概ネ戦歿者行賞發表順ニ依リ又一卷中ノ掲載順序ハ階級順ニ依レリ。
- 一、傳記ニ多少精粗繁簡ノ別アルハ資料ノ多少ニ依ルモノニシテ資料蒐集ニハ大ニ努力シタル所ナルモ遺憾ナカラ完キヲ得サルモノアルハ洵ニ已ムヲ得サル所ナリ。

一、部隊番號其他港灣出發地、上陸日次、地點、等軍ノ機秘密保持ニ關係アル事項ハ之ヲ省略シ又部隊番號ハ當時ノ部隊長姓ヲ冠シテ表示セリ。

二、本書ハ非賣品ニシテ本書掲載ノ戰歿者全遺族各位ニ寄贈ノモノハ國民ノ熱誠ニ依ル陸海軍恤兵金ヲ以テ支辨セラレタルモノナリ茲ニ特記シ感謝ノ意ヲ表ス。

陸軍少將從四位勳三等功三級 大生 壇城

將校准士官之部

忠勇顯彰會編纂

支那事變 忠勇列傳 陸軍之部 第壹卷



陸軍少將從四位勳三等功三級 大生 壇城

將校准士官之部

忠勇顯彰會編纂

氏は東京市小石川区久堅町の人にして明治二十一年一月十三日生である。父は安田光敏母はりめであるが故ありて大生家を繼ぎ養母志津に仕へ妻フミとの間に一子定を擧げた。資性剛勇磊落にして率直頗る温情に富み部下の信望も厚く一面頭腦明晰にして砲兵射擊學校其他の學業成績亦優秀殊に砲兵服法に就ては斯界の權威者にて我陸軍の至寶的存在と稱せられた。氏は又意思鞏固の人で嘗ては有名な酒豪家であつたが中年頃醫師の勧めに依り斷然禁酒し其の後絶對に杯を手になかつた。其出征の命令を受領するや人に語つて曰く「何處へ行くか不明だが兎に角思ふ存分働きたいよ」と緊き決心の程も偲ばれて床しき極みである。明治三十三年三月東京市富士見小學校を卒業して麴町區城北中學校に進み同三十五年九月東京地方幼年學校に入校陸軍中央幼年學校を経て明治四十年士官候補生を命ぜられ野砲兵第八聯隊に配賦次で陸軍士官學校を卒業し明治四十一年十二月陸軍砲兵少尉に任ぜられた。後陸軍砲工學校野戰砲兵射擊學校騎兵實施學校の課程を修

將校准士官之部

了して昭和八年砲兵大尉に任じ野砲兵第八聯隊中隊長に補せられ其後野砲兵射擊學校甲種學生として入校優等の成績を以て同校の課程を修了し同校教官同校研究部主事野戰重砲兵第一聯隊附第十九師團兵器部長等の要職を経て昭和十一年累進して陸軍砲兵大佐に至つた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや〇〇兵團兵器部長として兵器行政の一部を擔任し兵器彈藥器材の整備發送等に關する事務を處理し關係各部隊の出征に支障なからしめた。同年八月野



砲兵部隊長に榮轉して征途に上り先づ天津附近の警備に當り屢々第一線を巡視して部下を督勵し以て諸部隊の集中を掩護し克く其任務を完うした。次で察北方面に轉進し八月二十日二十一日の兩日外長城附近の戰鬪に際しては野砲兵部隊長として本多兵團長の指揮に屬し二十日午後四時より砲撃を開始した。敵は半永久的の堅固なる設堡陣地に據り頑強に抵抗したが氏は常に陣頭に立ちて適時適切なる命令を下し且つ屢々砲兵運用上の意見を具申して左翼隊の戰鬪に有力なる協力をなし長城線占領を容易ならしめ又追撃戰鬪に方りては其退却掩護の部隊を猛射し之に多大なる損害を與へ以て友軍の戰鬪を有利ならしめた。次で八月下旬萬全附近の戰鬪に於ても砲兵部隊長として之に参加し部下各隊の指揮宜しきを得て多大の功績を樹てた。即ち二十二日夜半我軍が月明を浴びて水魁附近の隘路口に向ひ夜襲を決行せる時敵は多數の機關銃及び迫撃砲を配置して猛射を加へ我死傷續出せしも二十三日拂曉遂に隘路口の要地を占領した。然かし同日正午頃より優勢なる敵は我兩翼を包圍して來た。當時氏は第一線に近く

位置して適切なる指揮を以て砲火を要所に集中して第一線歩兵部隊の攻撃を容易にし遂に敵を擊退し二十四日午後二時頃主力を以て平綏線を分斷し揚家庄に前進するを得た。又八月二十五、二十六兩日浪家口附近の戰鬪に際しては依然本多兵團に屬し八角臺及石頭屯の敵を攻撃せしに敵は優勢なる兵力を以て我を反撃し兵團は却て敵軍の包圍を受け其の運命樂觀を許さざる苦境に陥り行李監視兵自動車運轉手に至るまで戰線に加はり砲兵隊も零分畫を以て至近距離の射撃を行ひ砲手も小銃を執りて我に近接し來る敵を猛射する如き激戰なりしが氏は兵團司令部と共に揚家庄北側高地上に在り敵彈雨飛の下泰然として部下諸隊を指揮し正確有効なる射撃を以て歩兵部隊の戰鬪に遺憾なき協力を與へ遂に敵を擊退することを得しめた。斯くて本多兵團は外長城附近の戰鬪より張家口會戰に至る迄堅忍持久疾風迅雷的の勢を以て優勢なる敵を擊破したるの功に依り軍司令官より感狀を授與された。

同年九月上旬天鎮附近の戰鬪に際しては依然本多兵團に屬して左翼隊に協力したが當時敵は天鎮東方大橋上附近より其南方高地に亘り半永久陣地を構築し砲約二十門守兵少くも三千であつたが氏は部下各隊を部署して先づ左翼隊の山地攻撃に協力適切なる射撃を以て敵砲兵を制壓し以て峻峻なる高地の占領を容易ならしめた。續いて陽高附近の戰鬪に於ては部下砲兵隊の部署宜しきを得て陽高城壁の一部を破壊し第一線歩兵部隊の突撃路を開設し遂に同城を占領せしめた。

續いて九月十一日には聚樂堡附近を堅固に占領せる敵をば攻撃せんがため本多兵團に屬して九日陽高出發十日十五里堡附近に進出し同日午後更に常家庄に轉進し十一日午前九時より篠原兵團の左に在りて我軍に向て邀撃を企圖せる優勢なる敵に對し攻撃を開始し午後一時第一線陣地を攻略しその後逐次敵陣地を奪取して午後三時二十分自兵戰の後聚樂堡東南高地附近一帶の敵陣地を攻略した。氏は其間部下砲兵の主力を以て午前十一時常家庄南側高地に放列を布かしめ敵陣地の要點を射撃して友軍右翼隊の歩兵に協力し次で歩兵部隊の前進に伴ひ殊に敵が反對斜面の陣地を占領しあるを顧慮して第一

練歩兵と密に協力するため敵彈雨飛の間を物ともせず疾驅して前方に進出し砲兵第一大隊の陣地に到り詳細に敵情を視察し部下隊長に所要の指示を與へその有力なる協同に依りて歩兵部隊は敵陣地の一角を奪取し爾後有利なる戦況進展の曙光を認めた。惜い哉此時飛來せる敵山砲彈は氏の傍に落下炸裂しその破片は氏の左眼を貫いたが氏は重傷に堪へつゝ後事を大隊長に託し看護せる部下に見苦しき服裝をさせて呉れるなど武人の嗜を示し次で意識漸次に明瞭を缺き間もなく絶命した。以上本戦闘に於ける氏の行動は最も勇敢にして指揮適切運用機宜に適し然も渾身の精力を傾けて任務の達成に努め爲めに敵の企圖を破推し我第一線歩兵部隊の攻撃を有利に進展せしめた。惟ふに氏は外長城線攻略戦以來全部の戦闘を通じて常に危険を冒して奮戦し兵團の戦勝に寄與するところ甚大であつた。九月九日所屬軍司令官より授與せられたる感狀の全文左の通りである。

感 狀

大 生 砲 兵 部 隊

本多兵團及堤支隊ハ八月上旬ヨリ逐次張北附近ニ集中シ八月十五日以降本多少將ノ指揮下ニ在リテ張家口ニ向ヒ攻勢ヲ準備ス軍ハ當面ノ敵情及八達嶺方面ノ戦況ニ鑑ミ速ニ張家口ニ向ヒ攻勢ヲ取り〇〇師團ノ作戰ニ協力スルニ決シ本多少將ニ命スルニ全力ノ集中ヲ待ツコトナク攻撃ヲ開始シ速ニ張家口西南方高地ヲ占領確保シテ平綏鐵道ヲ分斷スヘキヲテ本多少將ノ指揮スル兵團ハ二十日午後長城線附近ノ敵ニ向ヒ攻撃ヲ開始シ堅固ナル既設半永久陣地ニ據リ頑強ニ抵抗スル敵ニ對シ奮戦之ヲ突破シテ直チニ南下シ次テ萬全附近ノ天嶺ニ據ル敵ヲ強襲シテ之ヲ擊破シ堤支隊ヲ以テ八月二十三日夕孔家庄ニ其他ノ主力ヲ以テ八月二十四日夕張家口西南方石頭屯附近ノ高地ニ進出シテ平綏鐵道ヲ分斷セリ此ヲ以テ敵ハ退路ノ障礙ヲ打開セントシテ大舉反擊シ來リ八月二十五日午後ヨリ翌二十六日朝ニ亙リ兵團ハ優勢ナル敵ノ四

周ヨリスル包圍攻撃ヲ受ケ激戦敵ニ致命的打撃ヲ與ヘテ之ヲ退走セシメ二十七日午後以來張家口附近ニ敵影ヲ見ザルニ至リ茲ニ兵團ノ任務ヲ完遂シ引渡キ一舉其主力ヲ宣化沙城子方面ニ進メテ〇〇師團ト連絡セリ兵團攻撃開始以來約十日間堅忍持久疾風迅雷當面ノ敵ヲ擊破シタルノミナラス察哈爾省内ニ在リシ優勢ナル敵ヲシテ鐵道ニ依ルコト能ハスシテ潰亂疾走遠ク南方蔚縣方面ノ山中ニ遁竄スルノ已ムナキニ至ラシメ以テ支那駐屯軍ノ作戰ヲ容易ニシ關東軍作戰ノ目的ヲ遺憾ナク達成シ得シメ其武功特ニ拔群ナリ仍テ茲ニ感狀ヲ授與ス

昭和十二年九月九日

〇〇軍司令官署名

氏や剛勇率直而かも坐臥進退謙嚴を失はず部下を視る事我子の如く部下將兵仰いで師父の如く仕へ森嚴なる軍紀の下一隊の團結鐵石の如く堅かつた。氏の卓越せる戰術射撃の調和並に部隊の機動能力はよく戰機に投じて偉大なる砲兵火力を發揚し協力歩兵諸部隊の爲光輝ある戰勝の途を開拓した。定に是れ皇軍砲兵部隊長の白眉であり又一般軍人の龜鑑であつた。今や風發叱咤の英姿に接する能はずと雖其英靈は萬世に生きて 皇運を扶翼し奉り芳名は永く皇軍戰史に異彩を放ち其勳功は櫻花と共に讚美せらるゝであらう。

氏は即日陸軍少將に進級し次で從四位勳三等に叙し旭日中綬章並に功三級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大佐正五位勳三等功四級 堀 田 万 義

氏は熊本縣天草郡御領村の人にして、父を悦三母をサキと云ひ明治二十五年一月二十三日を以て生れ兩親は既に歿し家庭には夫人泉との間に一男三女がある。人となり温容頗る衆に親しまれるが然れ共一たび起つや剛直貫かずんば已まぬと

いふ概もあつた。明治四十四年三月熊本縣立中學濟々賞を卒業し翌年十二月士官學校に入學大正三年五月同校卒業同十二年歩兵少尉に任官爾後累進昭和十二年八月歩兵中佐に任ぜられ此間諸種の勤務に服し兼に大正四年三月滿洲駐劄として在滿二年有餘後昭和七年滿洲事變の爲再び滿洲に派遣せられ警備に任ずること約一年其の功により勳四等旭日小綬章を賜はり後又津山中學校に於て軍事教練の指導に任じたことがある。



昭和十二年八月支那事變の爲め赤柴部隊に屬し北支方面の征途に就き八月二十日以來天津西沽良王莊間の津浦沿線に於ける掃蕩に任じてゐたが靜海附近の敵陣地攻撃のため八月二十二日正午良王莊に追及赤柴部隊長の指揮下に復歸し茲に第一線左大隊長として部下大隊（二中隊缺）を率ひ同日没より翌二十三日午前に互り西邊庄の敵を攻撃した。此地方一帯は高粱繁茂し加ふるに平坦地のことゝて連日の豪雨は泥濘膝を没する有様で戦闘頗る困難であつたが全般の状況を洞察し戦闘の指導も亦適切にして午前九時西邊庄一帯の陣地を占領し續いて敗退する敵を急追し以て東寨を確保し數回に互る敵の大規模の逆襲を撃退した。翌二十四日には未明より右大隊に連繫し東寨東側に展開して靜海驛東北側陣地を攻撃午前八時之を占領し遂に部隊の靜海縣城奪取の因を作つた。續いて唐官屯附近の戦闘に於ては田島支隊右翼隊の右第一線大隊長として参加八月二十九日午前六時行動を開始し先づ陳官屯附近を攻撃するに際し右側衛となり運河左岸地區を前進し南運河以西の敵情を搜索して大超家窪附近に進出し九月三日唐官屯附近敵陣地攻撃のため右第一線として中央第一線大隊と連

繫し南運河左岸地區を同日午後六時敵前五百米に展開し日没を俟つて敵前三百米の線に進出した。同夜降雨殊に甚しかりしも士氣旺盛該線に散兵壕を構築翌四日早朝該方面に於ける協力砲兵の火力が比較的僅少なりしも運河右岸地區主力の攻撃に呼應し午前九時四十分張家園を占領敵は唐官屯部落内より同大隊を側射し又數回大逆襲し來たが多大の損害を與へて之を破摧した。次で運河左岸に點在せる各部落を利用せる縦深の陣地を占據し頑強なる抵抗を持續する敵に對し逐次其右側を包圍攻撃する如く指導し遂に午後三時馬集を占領更に敗退する敵を急追し翌五日午前八時二十分陳庄を同日午後五時二十分には砲兵の協力により後屯を占領した。此間大隊長は常に勇敢第一線に立ち優秀なる戰術眼を以て敵の弱點を看破し迅速果敢に運河左岸地區に於ける堅固の數線陣地を攻略し以て右岸地區に於ける部隊主力の進出を容易ならしめた。

九月七日より同十二日に互る馬廠河附近の戦闘に於ては田島支隊第一線赤柴部隊長の指揮に屬し馬廠河強行渡河部隊長として馬廠河右岸の敵陣地攻撃に任じた。古來馬廠は天津濟南間の軍事上極要なる天險にして南より天津を攻むるものは馬廠を陥れば其目的を達し又北より濟南に迫るものも馬廠を有に歸せば勝敗既に決すと謂はれし要衝である。斯る天險の尤と相俟つて第二十九軍は其精銳を之に配して以て其衝成地たる此の馬廠を守らんとし且又長時日を費し至る處堅固に陣地を構築して殆んど飛行機の爆弾にも對抗し得る強度のものとなつてゐた。斯る態勢にある馬廠の攻撃殊に如何にして渡河すべきかは田島部隊長の最も苦心したる所で深思熟考之を久しうしたる後一の斷案を得茲に此至難なる任務を命ずるに堀田大隊長を簡拔した。是に於て堀田大隊長は其責任の重大なるを痛感し周到なる準備の下に關係砲工兵隊長と緊密なる連絡を保持し九月九日午後十一時漸く攻撃計畫を作製し赤柴部隊長に提出した。同部隊長は之を點檢補修の後十日早朝關係各部隊に交付する事となり堀田大隊長は該計畫に基き更に自ら馬廠河左岸地區に前進し詳細敵陣地の狀況地形河岸の狀

態を偵察し既往に於ける偵察に検討を加へたる後着々薄暮に於ける渡河のため諸準備を整へた。然るに右翼隊前面の敵後方部隊は動搖の微ありとの情報により午後一時赤柴部隊長より全隊の關係上午後三時五十分渡河を強行敵陣地に突入すべき命を受け大隊長は時間の繰上げ殊に晝間強行渡河に急變せるに拘らず沈着機敏且つ適切に部署を定め自ら副官及書記二傳令一を従へ最先頭の裝甲艇に乗り小發動艇四艘に分乗せる第六中隊の第一回渡河部隊を率ひ午後三時陳庄を出發遶航し上陸點に進行した。午後三時四十七分砲兵の第二回集中射撃は敵を制壓沈黙せしめたが午後三時五十分裝甲艇が前屯東南側附近に達した時敵は再び一齊に猛射撃を開始し其の銃火は渡河舟艇に集中殊に迫撃砲弾は盛に艇の前後に落下したるも大隊長は最先頭にありて一路陸官屯北側地區に向ひ發動艇を誘導右岸に乗上げ直に上陸を開始し午後四時上陸を完了し敵陣の一部を占據した。續て第二回突撃隊（第七中隊）亦前屯より小發動艇に分乗第六中隊の左に午後四時十五分上陸を開始した。此間敵火は毫も衰へず十字火は急霰の如きも大隊長は泰然として第七中隊の上陸を指揮しありしが此時左方向より射撃せし敵機關銃弾のため右胸部に三弾を受け午後四時二十分壯烈なる戦死を遂げた。

前記の如き非常に困難なる情況に於て大隊長の周難なる準備と果敢機宜に適する指揮により強行渡河を成功し唯一渡河點より敵主陣地の一角に楔入したる結果は遂に馬廠陥落の端緒となり其功績は正に拔群にして皇軍戦史に赫々たる光彩を放ち皇軍の根幹武人の鑑として仰がるべからう。

氏は戦死の日陸軍歩兵大佐に進められ次いで勳三等に叙し旭日中綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵大佐正五位勳四等功四級 丸山力男

氏は長野縣東筑摩郡中山村上和泉の人にして亡父を傳重母をげん夫人をけさと云ふ。氏は明治二十二年六月二十二日の出生にして資性明敏識見あり質實剛健兼ねて仁慈に富み隊に在ては部下を愛すること深く教職に在ては學生の訓育指導最も宜しきを得常に厚く上下より愛敬されて居た。戦死一周年忌に際し嘗て部下たりし將兵約二十名親しく戦死の蹟を弔ひ且相共に贖金して碑を天津驛構内に建てて以て舊恩に報ひたるが如き或は又京城に於て舊子弟帝國大學豫科生が特に追悼會を催し切々恩師を憶ふの至情を披瀝し聞く者をして感涙滂沱たらしめたるが如き皆其人となりを物語つて餘りあるものである。氏は



幼時郷里松本市に於て小學校教育を受け次で松本中學を卒へ明治四十二年陸軍士官學校に入り同校卒業後同四十四年十二月輜重兵少尉に任ぜられ果進して少佐となり昭和九年三月久留米より龍山の部隊に轉じ配屬將校として京城帝國大學豫科に勤務同年十二月中佐に進級引續き學生の指導訓育に従事支那事變勃發し直に征途に上ることとなつた。當時北支に於ては我軍は南苑の敵を攻撃するため天津に於ける我が兵力は微弱となつたが之に乗じ同地公安隊及附近の

支那正規兵等は七月二十八日夜半を以て突如蜂起し天津日本租界を包圍すると共に其一部は天津車站に殺到して來た。此日氏は曩に京城に於て徵發した補給機關用自動車車を率領して天津に到着した所で直に臨時自動車輜重隊の搭載並に輸送を命ぜられ夕刻天津車站に到り専ら同所及黃村間の輸送任務に當ることとなつた。かくて一晝夜、輸送の進捗意にまかせず氏が馳驅奔走の努力は容易ならざるものがあつた。折しも其夜半即ち二十九日午前二時突如四周より急劇なる銃聲起

り該驛の四圍は全く敵の占據する所となり當時恰も工兵隊が山海關方面より進出し來つたので丸山大佐は之と連絡を取りつゝ輜重隊の配備をなし工兵隊は奮然逆襲して驛舎を占領家屋によつて防戦に努め自動車輜重隊は驛南方ブリツチ方面にあつて敵軍の拒止に當つた。大佐は尙も工兵隊との連絡に努めつゝ自己輜重隊の戦闘を指揮して防戦是れ努め午前二時三十分頃自ら工兵隊方面に到り敵情偵察を終り北方ブリツチ下に達せんとした時不幸敵迫撃砲弾は腹部に命中し茲に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。本戦闘は二十九日終日繼續し翌日午前中に到り漸く敵を撃退せし程の長時間激戦であつたが當初に於ける大佐の部署適切に行はれしと驛構内雜然たる裡に克く諸隊を掌握指揮した事は我損害を僅少ならしめ而も多數の貨車及積載諸品の安全をも確保し得た主因であつてその功績は實に拔群と謂ふべきである。

氏や性格玲瓏玉の如く謹嚴身を處し常に部下を愛導し義の爲に斃るゝは武人の本懐たるを屢説す。果せるかな寡兵敵の重圍に陥り沈着果敢態勢の不利を轉じて勝機を齎らし遂に奉公の大義を全うす誠に武人の龜鑑と謂ふべきである。

抑々輜重の事たる用兵上缺くべからざる要素の一にして戰場輸送の遲速は直に士氣に至大の影響あること多言を要せず。大佐は一死克く此の重大の任務を遂行せしのみならず事變勃發の初期に在りて頑敵を辟易せしめ皇軍武威の斷じて侮るべからざるを端倪せしむ蓋し大佐の一死は此點特に一段の意義を副へ燦然として光輝あるを覺ゆる次第である。

噫、大佐の英姿や再び之に接する能はざるも其の英靈は永へに皇國を守護し更に其の忠魂義膽は幾多の部下後人に對し無限の活力を賦與し盡忠報國の熱意を煽るであらう。

氏は即日輜重兵大佐に進級正五位に叙せられ、次で勳四等に叙し旭日小綬章並に功四級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵中佐從五位勳三等功四級 岡田 茂

氏は奈良縣生駒郡山町の人にして明治二十五年十二月六日生である。亡父を兎美三郎亡母をナカと云ひ妻かつ子との間に四人の愛子がある。資性淡泊典型的武人であつた。曾て滿洲駐劄中外套の毛皮を購ふ爲五拾圓を懐中にして家を出たが其夜遅く歸宅し上機嫌にて今日は珍らしい舊友が來訪したので一杯やつて來たよと物語つたが氏は毛皮代にて舊友を接待し遂に毛皮なしに零下卅度の酷寒の冬を越年した。明治三十八年三月郡山小學校を卒業明治四十一年四月縣立郡山中學校を修業後同年四月大阪陸軍地方幼年學校へ入校し爾後陸軍士官學校を経て歩兵少尉に任官し歩兵第五十五聯隊附となり累進して昭和八年八月歩兵少佐に任ぜられた。其間陸軍戸山學校を卒業し大正八年九月より約一ヶ年青島守備歩兵隊に勤務し又昭和七年八月より昭和十年十一月迄滿洲事變に出動し功を以て勳四等旭日小綬章及從軍記章建國功勞章を賜はつた。

其後も引續き滿洲に在動し昭和十二年七月北支の風雲急を告ぐるに方り奉天省内に匪賊横行し滿洲國の治安を擾亂せんとする不逞の企圖あるを知りたる氏の所屬部隊は岡田討伐隊を編成し奉天省清原縣の匪團を徹底的に覆滅する爲本部を清原城に置き討伐する事になつた。そこで七月十七日氏は灣甸子部隊討伐指導の爲興京縣灣甸子に赴き翌十八日同地よりの歸途午前十時三十分七道河子附近に於て匪首王師長の率ゆる共產匪及保國軍との合流匪百餘名の匪團と遭遇した。氏は乗用せる自動車各底に駐止するを不利となし一舉全速力を以て急進突破せんと欲し前進を命じたるに匪賊は自動火器及小銃を以て亂射亂舞し忽ち運轉手は胸部に貫通銃創を受け遂に自動車の運轉不能となつた。氏は此時敢然匪賊を攻撃するに決し部下十二名に下車攻撃を命じた。即ち齋藤軍曹以下を左翼に廻らし自ら坂本大尉等を隨ひ奮然として攻撃に前進した。然るに匪賊は高地稜線を利用して頑強に抵抗し猛烈なる十字火を集中し來たるに反し我は最も不利なる地點に位置し

且極めて僅少なる兵力に過ぎざるを以て刻一刻苦境に陥り部下相次で斃るゝに至つた。覺悟を決した氏は「誰か本隊へ報告せよ」と命令した。其聲を聞き立上りしは下顎と足に一發宛の銃創を受けて血塗膚となつた熊谷二等兵でハイと答へて重傷に堪へ約十吉米の道を僅に一時間にて本隊へ辿り着き報告終りて昏倒した。氏は熊谷傳令の密林の中に消え行く姿を見送るや傳家の寶刀一閃群る敵の眞只中に斬込んで壯烈なる奮戦を續けたが雨と降り注ぐ敵弾に傷き遂に 天皇陛下萬歳を叫びつゝ、護國の魂と化した。匪賊等は此悲壯なる勇姿に恐をなし東南方へ遁走した。氏の同期生田村少佐は暗然として語る「氏は圓滿なる人格者であつた。謡曲、繪畫にも堪能で武人に珍らしい風流者であつた。頭腦明晰人情に厚く部下思ひで上下の信望厚かつたが今回の不幸は誠に残念である」と。



氏や最後の奮戦は場面は滿洲、敵は匪賊であつた、而かも少數の部下を以て十倍の敵に對し氏本來の雄腕を十二分に發揮し得ざりしは定めし千秋の遺恨たりしに相違ない。然れども更に大局より觀察せんか海往かば水つく屍山往かば草むす屍大君の御詔のまゝに身命を捧げまつるは是れ皇軍將兵の本領である。氏の尊き犠牲は齊しく是れ皇猷翼賛東洋永遠の平和に不朽の礎石を投じたものであつた。而かも其最後の場面たるや武人の面目躍如たるものありて天晴皇軍將校の龜鑑と謂ふべきである。其功績は滿洲守備隊戦史に異彩を放つべく其名は萬世に傳へて大和櫻と咲き匂ひ其英靈は不滅に生き皇運を扶翼し奉ると共に一家の守護神ともなり遺族の繁榮を加護し殊には四人の愛子の胸に深くも盡忠報國の魂を傳へ清き光と強き力とを投げ與へるであらう。

氏は即日歩兵中佐に進級し次で從五位勳三等に叙し旭日中綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵中佐從五位勳三等功四級 松本春彦

氏は鳥取市東町の人にして明治二十八年二月八日の生れである。父は時太郎母はてると稱し妻萬龜との間に長男一彦以下四人の愛子がある。氏は剛膽而も思慮周密大事に臨んで動ぜず宛然古武士の風格を具へた人格者であつた。明治四十二年九月志を立て、大阪陸軍地方幼年學校に入り逐次進んで大正五年五月陸軍士官學校を卒業し見習士官を命ぜられ同年十二月砲兵少尉に任官野砲兵第三十三聯隊附に補せられ同八年久留米獨立山砲兵第三聯隊に轉補し同九年四月砲兵中尉に進級第十二師團兵器部部員、第十二師團副官等に歷任同十四年十二月砲兵大尉に進み更に昭和七年四月姫路野砲兵第十聯隊附に轉じ同八年八月滿洲駐劄守備に派遣せられ同九年八月砲兵少佐に進級滿洲より歸還後功により勳四等に叙し旭日小綬章を賜はり後昭和十一年北支駐屯軍砲兵大隊長に補せられ天津に在勤して居た。

昭和十二年七月支那事變の勃發するやかの通州戦闘に於て同月二十七日支那駐屯歩兵隊が東通州の敵第二十九軍の一個大隊約七百名に對し攻撃を開始せし際山砲大隊長として之に協力参加し彈丸雨飛死傷續出の裡氏は率先身を挺して敵前二百米の城壁上に山砲陣地を進め徹底的破壊を加へ克く困難なる市街戦に於ける戦捷の基を拓いた。斯くて午後七時該歩兵部隊は通州を出發し南苑攻撃に向ひ困難なる夜行軍の後翌二十八日朝小紅門西南側に到達せしに盧甸(魯本)附近に在りし敵部隊の前進陣地より猛射を加へ來りしかば之を見たる氏は驟然歩兵部隊の前方に挺進小紅門西南地區に放列を布き歩兵

部隊前進の機会を作り斯くて交戦時餘敵兵敗走と見るや退路遮断の目的を以て馬村附近に急進石溜莊附近に於て高粱繁茂の地區に零距離射撃を以て交戦四時間に亘り遂に敗殘兵を殲滅したつた。越えて七月廿九日には先づ五里店附近に主として八寶山衛門口方面を又情況に應じては蘆溝橋長辛店方面をも砲撃し得る如く陣地を占領し午後五時五十分山砲獨立中隊を併せ指揮して更に大瓦密附近に陣地を進め蘆溝橋以西の敵砲兵を制壓し以て歩兵の突撃及戰果獲得を容易ならしめた。



七月三十日天津掃蕩に方りては鐘紡南方地區に壘集せる約二千の敵を砲撃し該地區掃蕩隊の戰鬪を容易ならしめ爾後天津の警備に任じ八月十五日岳家開附近の戰鬪に方りては有効なる射撃を以て該地附近の敗殘兵及土匪群を四散せしめ以て津浦線の確保に一大寄與をなし八月十六日以降南口西方山岳地帯の敵攻撃に方りては復た之に参加を命ぜられ歩兵部隊が亂泉、和子瀆附近の重疊せる敵陣地の攻撃に従事申氏は八月二十日以降獨立山砲兵部隊の一中隊を併せ指揮して歩兵部隊長の指揮下に入り終始部隊長及第一線歩兵大隊長と緊密なる連絡を保ち危険を冒して敵前至近の距離に進出逐次火砲を推進して有効に射撃を導き第一線をして一〇五〇高地附近の占領を容易ならしめ以て敵全線敗退の動機を作り八月二十四日には敵の最後抵抗線たる長城線附近の攻撃に當り特に歩兵と緊密なる連絡の下に全砲兵を以て有効なる射撃を加へ遂に友軍の長城線突破となりさしもの頑敵をして高地線を放棄し懷來に退却するの已むなきに至らしめた。更に又九月十日馬廠附近敵陣地の攻撃に於ては所屬歩兵部隊は右翼隊として主攻撃に任じ先づ流河鎮並丁莊附近の陣地に向ひ氏の大隊は之に

協力することとなり九月七日北平を出發し鐵道輸送により翌八日陳官屯着右翼歩兵部隊長の許に至り流河鎮攻撃に關する計畫意圖を詳知し山砲兵使用に關する意見具中をなして關係各部隊長と周密なる協定を遂げ九日偵察其他諸準備を整へ翌十日午前三時三十分山砲大隊を率ゐて周庄子を経て彈雨を冒し泥濘の地帯を躡進敵前千二三百米の地點に放列を布置し同五時五十分射撃を開始し午前六時頃我が第一線が豫定の小王莊に對する夜襲の未だ成功しあらざるに鑑み現地に即して一層密接に協力すべき必要を感じ氏自ら歩兵部隊長の許に至り更に協定を遂げんとして彈丸雨飛の中を前進し觀測所の前方約二百米の地點に於て歩兵部隊長、砲兵中隊長と會し敵情を聽取し尙之が偵察に努めつゝありし際敵の小銃彈の爲遺憾にも左前頸及背部に貫銃創を受け直ちに後送天津軍病院に於て手厚き治療を施されたが脊椎を損傷せし爲終に同月十七日同病院に於て櫻花の散るが如くに逝きたるは誠に遺憾なる次第であつた。

噫、氏眞には滿洲駐劄守備の任に就き功に依つて勳四等に叙せられ又今次事變に際しては其の勃發と同時に出勤し毎戦堅忍不動の精神と卓逸せる指揮統帥とを以て遺憾なく山砲兵の特性威力を發揚し皇軍をして其緒戦に暴虐なる支那軍の鼻梁を碎き惡鬼第二十九軍を覆滅し迅速果敢に北支平野を席捲するに至らしむ君既に北支の花と散り失せしも其赫々たる偉勳は聖戰史上永へに芳薫を放つであらう。

山下旅團長氏の英靈に弔詞を捧げて曰はく「本事變は破邪顯正の神命にして皇道宣布の聖戰なり君千載一遇の期に會し克く皇軍の威武を中外に宣揚し幾多の偉勳を樹て皇道宣布の華と散る其の功績は千載不朽にして其の忠誠は汗青を照す君以て瞑すべきなり今や戰局益々發展し戰雲全支を覆ひ皇軍の進撃日と共に旺にして邪惡の窄縮時と共に大なり吾等亦能く範を君に仰ぎ其の本分に邁進し切々匪躬の節を效し聖戰に殉し誓て天業の完成を期せん。冀くは忠靈護國の神となり永く北支の地に留まりて無窮の皇運を扶翼し奉らんことを云々。」と氏が武人としての姿態立構の概ありしを窺知するに足

る。

即日氏は砲兵中佐に進級従五位に叙し次で勳三等旭日中綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵少佐従六位勳四等功五級 飯富仙之助

氏は福岡縣久留米市西町の人明治二十七年一月十六日生れである。父は丹次郎と稱し既に歿し母をタネと云ひ妻ミツエとの間に長男俊信を頭に三男一女の愛子がある。性純潔寡言勤勞主義の士にして家庭に在りては父性愛濃やかに兵に接して亦温情到らざるなく爲に敬愛欽慕の中心となつて居た。

明治四十二年三月普通寺小學校高等科卒業後は家庭に在つて家事を手傳ひ大正三年十二月徵兵として山砲兵第三大隊へ入營した。爾來刻苦精勵下士官を志願し大正五年十二月砲兵伍長に任ぜられた。氏の手腕と格闘は中隊附に將た聯隊本部附に抜群の成績を擧げ遂に下士勳功章を授與せられた。大正十三年十月特務曹長に任ぜられ翌十四年には滿洲に派遣せられ中隊段列長として翌十五年一月迄鐵嶺及奉天の守備に任じ功を以て勳八等に叙し瑞寶章を賜つた。昭和二年十二月少尉候補者として陸軍士官學校に入校翌三年十一月卒業昭和四年三月陸軍砲兵少尉に任じ獨立山砲兵第三聯隊附に補せられた。其後取法學生として約十ヶ月野戰砲兵學校へ分遣せられ氏の才幹は益々向上せられた。其後滿洲事變起るや昭和七年二月上海派遣獨立山砲隊要員に選拔せられ勇躍吳淞に上陸し同地附近の戰闘に参加し爾後廟巷鎮攻略に参加して偉功を奏し程なく中尉に累進した。續て南翔を攻略し三月下旬原隊に凱旋し功を以て勳五等に叙し單光旭日章を賜はつた。超えて昭

和十年六月天津駐屯山砲隊に配屬せられ翌十一年八月大尉に進級し天津東機局に駐屯警備に任じた。

日支事變勃發するや七月二十六七日の通州攻撃に参加し大隊觀測班長兼大隊副官として活躍奮闘した。即ち二十七日午前五時戰闘加入を命ぜらるゝや敵前至近の觀測所に先行して敵情搜索に任じ敵の銃砲彈下に克く沈着勇敢に任務を遂行し又午前九時半頃に於ける大隊の陣地變換時には敵敵の狙撃を意とせず速に通州停車場に躍進し敵情偵察に任ずる等豪膽不敵の行動を以て戰機捕提に努め所屬隊長の戰闘指揮を容易ならしめた。



七月二十八日資島部隊が南苑東北角に對する攻撃準備に着手するや氏の所屬隊は之に協力の目的を以て午前九時小紅門附近に陣地を占領した。氏は高粱の繁茂せる中を苦心して敵情搜索に任じ大隊火力の運用を適切に立案し午前十時半廬甸北側を前進中なる敵を發見し所屬隊長をして機宜に適する戰闘指揮を執らしめた。次で南苑より北走する敵の退路を遮断せんが爲資島部隊に跟随し馬村に向ひ前進を開始するや氏は機敏に前進路の敵情を搜索又午後四時半石榴莊附近に於て資島部隊の推進掩護に方りては敵敵隨所に蠢動せるを意とせず勇敢に挺進して適切なる陣地を偵察し所屬隊の任務達成を容易ならしめた。午後十一年敵兵我が豊台の露營地を襲撃し來るや大隊長と共に第一線歩兵大隊と協定を遂げ第一中隊と連繫し自ら本部重機分隊を指揮し之を撃退した。

七月二十九日蘆溝橋の戰闘に参加し同日午前八時三十分大隊長と共に在西五里站一本歩兵部隊長の許に到り諸般の協定

を行ひ八寶山、衛門口方面に對する五里站附近の大隊展開運用に關し適切に大隊長を輔佐し又午前十一時半蘆溝橋攻撃の命令に接するや砲兵使用計畫に基き大隊火力の運用其他に關し周到なる着意を以て大隊長の諸準備を適切ならしめ午後六時十五分射撃を開始するや敵情搜索に射撃效果の觀察に或は突撃部隊の行動觀察に精細且機宜に適する諸情報を大隊長に提供して適切有效なる戰闘を爲さしめ蘆溝橋攻略に甚大なる貢獻を與へた。

七月三十一日天津總站附近に於ては鐘紡南方部落に據る二三千の敵に對する我歩兵部隊の攻撃に協力し敵を四散殲滅せしめ歩兵部隊をして北寧線の確保に寄與する所大であつたが其間氏の慧敏適確なる戰果觀察が所屬大隊の戰闘力發揚上重大なる素因となつた。

八月十三日獨流鎮の攻撃同十五日良王莊の攻撃八月十八日乃至二十七日の南口西方山岳地帯の攻撃に参加したが常に積極的に任務を遂行し以て光輝ある砲兵威力を發揚せしめた。就中二十日七一〇高地の戰闘に於ては特に地形の特性を看破し一部を以て夜間側射し得る陣地に進出せしむべく意見を具申したが果然歩砲協同の極致を發揮し敵陣地の要點たりし一〇五〇高地を奪取し得て爾後の戰闘を著しく容易ならしめた。翌二十一日前記高地の一角に突入するや敵彈雨を意とせず機を失せず觀測機關を推進し敵情搜索射撃指導に任じ又同夜暗を利用し第二第三中隊の該高地附近に陣地變換を行ふや自ら暗夜峻峻なる懸崖を東奔西走し疲勞困憊せる兵員を督勵して之が誘導に努めた。之が爲未曾有の峻難なる山岳地帯に機宜に適する陣地占領戰機に投合する射撃準備を完了せしめ翌二十二日拂曉攻撃成功の素因を與へ第一線歩兵部隊長をして歩砲協同の極致と迄讃嘆せしめた。八月二十五日八五〇高地の戰闘に於ては敵彈雨飛の中を本部機關並各中隊の觀測小隊を指揮して該高地西方第一線の稜線に觀測所を推進し最も重要な敵情を偵知し大隊長の來着と共に有效適切なる支援射撃を實施せしめ以て長城線突破の重要な動機を作為した。其豪放勇敢にして戰機に投合せる活躍振は眞に拔群の武動

と云はねばならぬ。

斯くて九月七日乃至十二日には馬廠附近迄の戰闘に参加し所屬大隊長の負傷後は丁莊に向ふ大隊の陣地變換大隊火力の運用青縣に向ふ追撃等目ま苦しき戰況に熱誠勇敢克く大隊長を輔佐し主攻正面に協力する唯一の砲兵部隊として有效適切なる砲兵火力を發揚し以て戰捷獲得に偉大なる武動を奏した。

九月二十三日乃至二十六日に亘る滄州附近の戰闘に於ては敵彈雨飛の下に泰然敵情を搜索し大隊長代理の戰闘指揮を適切に輔佐し同官負傷後は之に代て運河對岸の敵を制壓せしが歩兵の渡河作業進捗せずして興濟鎮に轉進を命ぜらるゝや進路の偵察地方舟の蒐集大隊の前進部署を適切にし逐次増水する濁流の中を約五日間に亘り逐次張四庄に集結せるは其勞苦と堅忍亦賞讃に値する。爾後當面の敵を追撃して桑園に進出し十月三日更に追撃して蘆院北側に進出するや敵機關銃の猛射を受けたるも氏は勇敢機敏に部落南端に挺身して德州城壁に據る敵情を明かにし以て大隊戰闘に貢獻する所大であつた。十月五日午前四時稍々前約二大隊を下らざる敵は二十里舖南側より包圍攻撃し來るや氏は各中隊との連繫を密にし自ら該部落南端三叉路附近に出て各方面の情報を蒐むるに努めた。午前六時頃敵の歩兵主力及乘馬部隊が逐次部落の南方より東側に迂回現出する狀況を發見するや大隊重機分隊を指揮し部落東南附近に進出し將に同方面に肉迫増加しつゝある敵を猛射し殆ど之を殲滅せんとする一利那右大腿部に盲貫銃剣を受け德州野戰病院に入院したが、噫天なる哉命なる哉十月十七日津浦線戦線殉難の華と散り去つた。回顧すれば氏の後半生は滿洲に江南に將た今次事變に北走南來滿身是れ忠是れ勇其の報國偉大なる足跡を印せる繪巻物であつた。宜なる哉即日砲兵少佐に任じ次で從六位勳四等に叙し旭日小綬章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐從六位勳四等功五級

栗岡伊太郎

氏は兵庫縣揖保郡龍田村大字廣坂の人にして明治二十七年五月九日を以て生れ亡父を伊兵衛母をたよと稱し妻よし乃との間に長男哲夫以下三人の愛子がある。明治三十五年四月龍田村尋常高等小學校に入り同四十三年三月卒業爾後父母の膝



下に在つて専ら家業の手助けをなして居つた。資性剛直にして沈着父母に仕へ孝順、上に對し恭敬、人と交はつて温情信義に厚く下に臨んでは嚴正而も慈愛を以て之を遇し、又業務に極めて熱心であつた。氏は大正三年十二月徴兵として歩兵第十聯隊に入營し同四年三月より十二月まで青島の守備に従ひ同月一日歩兵一等卒次で同十八日上等兵に進み同五年四月より九月に亘り再び青島の守備に服務し同年十一月歩兵伍長翌六年十一月歩兵軍曹十一年一月歩兵曹長に歴任し第八旅團司令部附となり十四年一月特務曹長に任じ同時に第十聯隊附に轉じ同年六月より翌十五年十一月まで滿洲駐劄の勤務に服し同年十一月陸軍士官學校に入校翌年十一月同校卒業昭和三年三月歩兵少尉に任じ同時に再び歩兵第十聯隊附に補せられ越えて六年三月歩兵中尉に進級し十二月陸軍教化隊附に補せられ後復た第十聯隊附となり昭和十一年三月歩兵大尉に任じ歩兵第十聯隊中隊長に補せられ斯くて昭和十二年七月支那事變の勃發するや赤柴部隊に屬して北支方面の征途に就いた。

既にして昭和十二年八月二十日、二十一日に亘る津浦沿線の戦闘に於ては末永大隊長の指揮下に第二中隊長として二十一日午前十時三十分行動を開始し午後四時畢庄子の攻撃に移るや一個小隊を割きて第三中隊、大隊砲及機關銃隊等と協力同部落の西端に進出せしめ大隊は徐庄子附近の敵に對する攻撃準備に移るや氏は残りの二個小隊を率ゐて大隊の右第一線となり曩の一個小隊を指揮下に併はせ彈丸雨飛の間に泰然として攻撃命令下達中午後五時三十分頃不幸にも敵機關銃彈二發相次いで胸部を貫通其の場に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や其の經歷に徴するに堅忍奮闘恪勤精勵尋常一様の人にあざりしを察知せらる。かの屢々海外要地の警備又は駐劄に任じ貴重の經驗を積んで今次の支那事變に參戰す。氏の部下は舉て氏の勇氣手腕に信頼しありしに果無くも將に攻撃に移らんとして北支戦線の露と消へしはまことに痛恨極まりなき次第である、然かし中隊長を亡ひたる中隊が目立ちて勇戦奮闘し遂に敵を撃滅し徐庄子の敵陣を奪取せるは當初に於ける氏の攻撃計畫區署の適切なるは勿論勇敢にして謹嚴而かも慈愛に富み滅私奉公の精神力の結果にして其功績は偉大なるものと謂はなければならぬ。

噫今や再び氏の雄姿に接する能ず、然ども氏の忠魂は永へに生き護國の神として皇運を扶翼し奉り又遺族の守護神として三人の愛子の胸に深くも盡忠報國の精神を植へつけ遺族の各々に幸福繁榮を授けるであらう。

氏は戦死の日歩兵少佐に任じ從六位に叙し次で勳四等旭日小綬章並に功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐從六位勳五等功五級

山崎善勝

氏は香川縣香川郡圓座村の人にして、亡父を龜太郎母をタネと稱し資性温厚にして寡黙實行の人であつた。明治三十九

年八月十八日生れて夫人良子との間に一男一女がある。小學校卒業後高松中學校に入學し陸軍將校を志して大正十一年同校二年を終了し廣島陸軍幼年學校に入學、同十四年三月同校を卒業續いて士官學校豫科を経て士官候補生として隊附勤務を了へ士官學校本科に入學、昭和四年七月同校を卒業し同年十月歩兵少尉に任官歩兵第四十三聯隊附を命ぜられ、宿望漸く達して愈々忠勤を勵み隊務に精勵中翌五年上海事變の勃發と共に大隊副官として出征新進氣鋭を以て縱横に活躍し凱旋



後昭和七年歩兵中尉に進み功により勳六等に叙し單光旭日章を賜はつた。其の後豊橋教導學校學生隊附に轉じて學生の訓育指導に任じ、昭和十一年大尉に進級し中隊長とし原隊に復して傍ら勉學し陸軍大學初審試験に合格したが支那事變勃發するや昭和十二年八月部隊副官として中支方面の征途に上り八月二十三日未明江南川沙附近敵前上陸戦に於て所屬隊は左翼隊として主力を以て文宅附近に上陸した、此際氏の司令部は第二回上陸部隊と共に上陸したが天尙暗く既に上陸せる第一上陸部隊との連絡未だならずして司令部は上陸點附近に於て一時停止し状況を確かめ第一線との連絡を確保する事となつた。此時氏は命を受け直に敵火を冒して前進第一線と連絡し又一方已に上陸を終了しあるべき豫備隊の一中隊が上陸點を誤り貴膠灣に上陸せる事を確かめ部隊長に上陸直後の作戰指導上緊要なる資料を提供し部隊の掌握を確實ならしめ、爾後文宅附近に於て川砂鎮方向より敵の側射を受けた際も亦よく第一線部隊と連絡し又砲兵隊の招致等に極力之れ努め斯くして戦闘は漸次に進展して第一線部隊が川砂鎮附近の堤防を占領するに至りて左翼隊の態勢を整へ逐次地歩を擴張し敵

情の偵察並に部下諸隊特に配屬せられたる諸部隊の集結掌握に一意邁進以て部隊長の戦闘指揮を容易ならしめ、斯くて日没に至り左翼隊は豫定線を占領して敵と對峙して夜を徹するに至りたるが屢々敵機の空襲を受け第一線亦再々敵襲を受け情況甚だ緊迫せるに鑑み諸部隊との連絡警戒に周到なる対策を講じ爲に敵の夜襲も悉く撃退し以て上陸作戰の不動なる基礎を確立せしむるを得たのである。

川砂鎮附近の戦闘を有利に終局し直に羅店鎮附近の敵陣地攻撃に移るや氏はよく部隊長の意圖を體し日夜精勵就中八月二十六日夜より二十八日未明に至る間部隊司令部は五斗徑西南側畑地に位置してゐたが前方並に左側背より敵の銃砲、迫撃砲等の射撃を受け通信線は屢々切斷せられ第一線との連絡頗る困難となりし時氏は司令部員通信班等を指揮し之が連絡に遺憾なからしめ、更に二十八日拂曉敵陣地に向つてする攻撃準備の未だ完からざる時第一線の敵の逆襲を受けた、此際氏は部隊長より該状況を確むべき命を受け危険を冒して第一線を巡視し具さに状況を實視して部隊長に報告、以て部隊長の戦闘指揮に遺憾なからしめた。

八月二十八日午前十時頃羅店鎮方向に前進中氏は部隊長より第一線との連絡に關し命を受くるや單身出發連日の不眠不休疲労困憊を顧みず殘敵の狙撃と焼くが如き酷暑を冒して第一線本部に至り部隊長の意圖を傳へ第一線の状況を明にし以て爾後の戦闘指導に大なる貢獻をなした其の功績は偉大なるものであつた。

斯くして終に羅店鎮は部隊長の適切なる計畫と第一線の勇敢なる攻撃とによつて之を占領したのである。然るに二十八日夕刻より部隊司令部附近は南方より敵砲兵の集中射撃を受け數發の砲弾は連續部隊司令部に命中し恰も氏は部隊長の側傍にあつて作戰の計畫に參與して居たが不幸砲弾破片のため右大腿部に重傷を受け遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏は夙に志を立て、幼年學校に入り孜々として嘔勉任官するや暮年にして上海事變に出勤し以て第十九路軍を撃破し列

國軍團視の間に皇軍の威武を宣揚したが、今次事變に際し高等司令部副官として再び上海の攻略に従ひ江南敵前上陸に於ては人馬の下船兵器貨物の揚陸、作戰の指導等複雑多岐なる制務而も敵は虎視眈々として乘すべき機会を窺ひ寸分の隙をも許さない状況の下東奔西走よく難關を打開して終始奮闘部長輔佐の任を完うした。所屬師團長は賞状を以てその功績の赫々たるを又死に鑑み一言の家事に及はなかつたことなど縷々數百言を以て激賞武人の龜鑑なりと斷ぜられたのも定に宜なるかなである。氏は春秋に富み前途有望の材幹を懐いて遂に江南の華と散つたのは惜みても尙餘りある、然し氏の功績は燦として永く戦史を飾り在天の靈は皇國を守護し饒て東亞百年の平和を招來せしむるであらう。

氏は即日歩兵少佐に進級し從六位勳五等に叙し雙光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級 井上 鹿夫

氏は兵庫縣神崎郡八千種村の人にして明治三十三年十一月一日生である。父は諸市郎母はすきと稱し妻まきのとの間に長男一正以下三名の愛子がある。氏は謹嚴誠實にして酒煙草は一切用ゐなかつた。責任觀念旺盛にして諸成績亦優秀であつた。氏は大正四年三月八千種小學校を卒業し大正九年十二月徴兵として歩兵第十聯隊へ入營、大正十一年伍長に任官し爾後精勵格勳累進又累進昭和十一年十月歩兵中尉に任ぜられた。其間氏は大正十四年六月以降柳樹屯に駐劄し翌十五年滿洲に於ける師團通信隊演習に参加せる際は率先奮勵優秀なる成績を挙げたるに依り聯隊長より表彰せられた。昭和二年六月支那事務局の紛糾するや青島警備の爲同地に派遣、翌七月七日以來約二ヶ月間濟南警備の重任に服した。昭和六年十一月に於ける秋季演習に於ては將校斥候として拔群の成果を挙げ時の旅團長より表彰せられしが如き共に氏の人格力量

の一端を物語るものである。昭和九年一月以降約五ヶ月間は吉林省に在りて警備に服し終始一貫熱誠緊張裡に重任を全うした。

支那事變勃發するや氏は第一機關銃中隊長として聖戰に参加する事となり昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。斯くて八月二十一日には津浦線良王莊を出發し海方面の敵を撃破すべき任務を以て南進した。時恰も道路泥濘の惡路と高粱繁茂の障礙に難行軍を続け午後三時畢庄子に蟠居せる百餘名の敵を撃破し次で薄暮を利用し徐庄子に據れる約百名の敵を攻撃し午後七時四十分之を奪取して附近の殘敵を撃滅した。其夜迫撃砲三門を有する約三百名の敵部隊より夜襲を受けたが氏は沈着機敏なる處置に依り之を撃退し其企圖を挫折せしめた。洵に是れ光輝ある初陣であつた。



八月二十二日氏の中隊は東邊庄附近の敵を撃破する目的を以て午前三時行動を起し同日午前八時より東邊庄北側の敵陣地に對し攻撃を開始したが當面の敵は極めて巧妙に遮蔽陣地を構築しある爲目標の發見認識も機關銃隊の射撃も共に甚だ困難であつた。茲に於て氏は隸下各小隊に敵前至近の距離に陣地を占領せしめ且第一線中隊と密接なる連絡協同を維持して健闘した。此時敵は拾數銃の機關銃と自動小銃及重砲迫撃砲の火蓋を切つて猛威を振つた。友軍は生憎砲兵及大隊砲の支援火力を缺き加ふるに擲彈筒及手榴彈の補充も意に任かせず第一線將兵の死傷積出遺憾乍ら我軍の攻撃は頓挫するに至つた。所屬大隊長は戦線を整理し日没を待つて攻撃を再興するに決した。時正に

午前十一時過ぎである。敵は機逸すべからずとなし猛烈且壓倒的に銃砲火を集中し其優勢なる兵力を以て先づ我が左翼に次で右翼に對し潮の如く殺倒し大規模の逆襲を敢行した。友軍の死傷は益々増加したが氏は毅然として部下を叱咤激勵し有効適切なる射撃指揮に依り數次の逆襲を撃退した。當時の戦況は眞に是れ果卵の危機を呈し右翼方面の機關銃分隊の如きは分隊長相次いで死傷し残るは僅かに分隊長と銃手一名となり遂に重機を地中に埋没し小銃を執つて死闘を續けた。午後一時第一小隊長が敵前二百米に於て壯烈なる戦死を遂ぐるや氏は自ら其小隊の指揮を兼務した。日没頃より敵は益々増援隊を得其火力は愈々熾烈となつた。茲に於て所屬大隊長は兵力を集結し夜襲を決心せんとしたが戦場の高粱畑は泥濘膝を没し月亦暗雲に掩はれ指廻り連繫頗る困難なりし爲拂曉を期し攻撃再興に決心を變更した。明くれば二十三日黎明大隊は集結中なりし第三中隊と第二中隊の一部を第一中隊の左翼に展開せしめ大隊砲の増援と機關銃の掩護射撃下に憤然攻撃前進に移つた。敵は各種火器の全威力を發揚し友軍を猛射した。之れが爲友軍の損害も少くなかつたが一進一止敵に肉薄し遂に敵陣地に突入した。氏は其間部下を掌握し敵の主要陣地を急襲的に猛射壓倒し克く友軍の攻撃前進を容易ならしめた。而して突撃實施直前迄に機を失せず要點に陣地を變換し直接指揮に依り逆襲し來る敵に熾滅的大打撃を與へ以て其企圖を挫折せしめたが不幸にして此際氏は敵弾に胸部を射貫かれ遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の勇猛果敢なる奮闘に依り流石の頑敵も大敗潰走し我は要衝東邊庄の陣地を奪取し靜海附近敵の最右翼の鎮鎗に一大脅威を與ふる事となり敵の主力をして總退却の止むなきに至らしめたる其功績は極めて偉大なりと謂はねばならぬ。

噓囂局中の難局に直面し不眠不休絶倫の意氣を以て部下を督勵し戰機を捉へて敏速に挺進而かも重機關銃の全威力を發揚して歩兵戰團の骨幹となり赫々たる戰捷の途を開拓せる氏の功績は永く戦史に輝き武人の龜鑑と仰がるゝであらう。

即日歩兵大尉に進級し次で正七位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級

成島 榮 一

氏は茨城縣行方郡玉造町の人にして父を忠藏母をさだと稱し長男にして大正三年五月三十日を以て生れ未だ獨身者であつた。資性濃厚篤實にして剛毅果斷、至誠人を動かし武人として典型的である。昭和六年三月縣立銚田中學校四年を修了して士官學校豫科に入學同八年三月卒業歩兵第五十九聯隊に配屬せられ次いで士官學校本科に入學昭和十年六月優良なる成績を以て卒業同年九月歩兵少尉に任じ歩兵第五十九聯隊附に補せられ茲に宿望を達し同十一年四月聯隊旗手たるの名譽を擔つて愈々誠忠の實を擧げ、翌十二年八月歩兵中尉に進級した。

支那事變の勃發するや坂西部隊中隊長を仰せ付けられ北支方面の征途に就いたが氏は中尉進級早々にして榮譽ある中隊長の重職を拜して感激と同時に責任を痛感し一死以て盡忠報國を期したのである。上陸後直に永定河畔の攻撃に参加し激刺たる新進の意氣を以て勇躍第一線中隊長として九月十三日午前九時三十分中隊を提げ勇猛果敢敵の火制下を先頭に立ちて渡河し其際相當多數の死傷者を出したが部下を激勵一舉に敵を猛攻追撃し遂に敵をして抵抗の豫猶を與へず以て部隊主力の渡河及び爾後の作戰を有利に進捗せしめたるのみならず緒戦に於ける快捷は以て部隊の士氣を振起し攻撃精神を高潮せしめた。其の功績は拔群偉大であつた。

次いで翌十四日は大隊の豫備隊として側背の警戒搜索に任じ第一線の攻撃進捗に伴ひ南公由附近に敵を追撃し、續いて九月十五日拒馬河々畔北相附近の戦闘に於ては二大隊（二中隊員）の渡河掩護の許に猛烈なる敵の銃砲火を冒し部隊本部と共に強行渡河を敢行し渡河後第一線となり第八中隊の左翼に増加展開した。當時敵は我より甚だ優勢にして爲に我死傷相繼いで生じ且敵は再三逆襲に轉じ來りしが氏は部下を激勵し數次に互る敵の逆襲を破摧して一進一止敵に近迫し遂に自

ら陣頭に立つて敵の第一線たる部落に突撃し先づ敵機銃兵二名を斬殺し更に奮戦格闘敵陣地内を掃蕩しありしが奮戦中不幸敵弾のため頭部に貫通銃創を受け二十四歳を一期として惜しくも拒馬河畔の華と散つた。然し氏の勇敢なる空撃は遂に敵を震慄潰走に至らしめ部隊戦捷の端緒を開いたのであつてその功績は實に赫々として全軍賞讃の的であつた。のみならず特に軍司令官より最高の名譽たる感状を授與せられた其抄録は次の如くである。

坂西一部隊成島隊

右は涿州保定會戰に於て昭和十二年九月十五日第〇〇師團の拒馬河渡河に際し師團左追撃隊渡河掩護隊たるの任務を受け中隊長陸軍歩兵中尉成島榮一指揮の下に猛火を冒し他に先じて渡河を敢行し直に北相附近の敵陣地に突撃し中隊長戦死したるも克く中隊の團結を保持して之を奪取し更に中隊長代理陸軍歩兵少尉佐藤武文指揮の下に敵陣地の複郭たる北相圍壁内に突入し接戦格闘の後之を占領せし而已ならず(中略)午前十時頃隣中隊と共に王谷嶺附近の敵設堡陣地を占領せり時に中隊は渡邊曹長以下僅に二十餘名を算するのみ中隊が再度中隊長を失ひ小隊長亦全員死傷せるも毫も團結を亂すことなく衆心一致克く惨烈なる状態に耐へ遺憾なく攻撃精神を發揮して完全に其任務を達成したるは以て全軍の模範とするに足るのみならず拒馬河大冊河共に其行動に依り全軍戦勝の一端緒を開きたる功績は偉大なるものと認む。



是氏が誠忠勇敢は申すに及ばず其高潔なる人格と卓逸せる統御の結果中隊をして一心同體の極致に達せしめたる爲にし

て又氏の後任佐藤少尉は信頼せる氏の戦死を聞くや聯隊旗手でありしも部隊長に涙を流して其弔合戦を申し出でたるものにして茲に又氏が平素青年將校の間に如何に衆望を聚めてゐたかを察知するに足るのである。氏が戦死の公報あるや李王殿下は嘗て聯隊長御在職時に於て氏が聯隊旗手として忠勤を抽んでたるを偲び出でさせられ「故人の勇猛果敢の奮闘想ふべく其の勤功眞に感動の至りなり深く遺族を慰めよ」との御言葉を賜はり特に入江御附武官を實家に差遣はされ御焼香を賜はり氏の餘榮は遺族に及んだ。之一に氏が父母に至孝なる心靈の繼續と見るべきである。氏は幼より親思ひで父母の命は絶対に服従し殊に慈母に對する思ひやりは實に涙ぐましくその士官學校豫科在學中の書信に

「母が病氣私は又腸を断たれる思ひがする、その原因は私は未だに自分に在ると思つてゐる。母は二三年前にふとしたことから腎臟炎を患つたのだ。中學へ私が通ふために毎朝暗い中に起きて呉れたことがその重なる原因と思つてゐる。私は勉強する爲に母の健康をそこねたのだ、私は誰よりも親孝行をしなければならぬ。父も母も黙つてゐればゐる程私は良心の荷責に堪えない。孝行私は此の字に苦しめられた(以下氏が軍人を志願するに至つた経験及入學試験合格のため努力した状態其間母の病氣のため煩悶したが又氣を取直して死ぬ覺悟で勉強した模様を仔細に綴りあり)病の母を残して立つのは何だか心残りでした家からは終始一同無事の手紙が来たけれども屢々母が思ふのを知つてゐる私にはその手紙が信ぜられなかつた。私は毎朝都の空から家の方を向いては母の無事を祈つた、おゝ母よ健在なれ、神よ我が家を守り給へ」とあり噫誰か綿々たる氏の哀切極まる文を讀んで泣かざるものがあらうか若しありとすれば子としての價値がない者である。氏は又精勵「昭和十二年四月二十九日天長の佳日を期し日課を左記の如く定め堅く相守り意志を鍛錬し併せて學術を練磨し素志の貫徹を期す」と前書し「起床午前四時三十分 讀書出勤前二時間 退廳午後六時 讀書夜間三時間 就床午後十一時」と自戒し之を實行して居たのである。

氏は家に在りては至孝友と交はつて信義、衆望を一身に聚め軍に入りては精勤戰場に出でては勇戦奮闘義勇奉公、其の一生を通し軍人勲諭教育勅諭の精神を實行に移した士で斯る人をこそ眞に國民將又武人の魁鑑と云ふべきである。噫氏逝いて今や雄姿に接し難きを怨む、然ども氏が赫々たる武勳は永しへに皇軍戦史に輝き其の忠魂は不滅に生き護國の神となりて更に皇運を扶翼し奉り又一家の守護身として強き力と清き光を遺族の上に投げ與ふるであらう。

氏は戦死の日歩兵大尉に進められ次いで正七位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵大尉正七位勳六等功五級 熊谷儀藏

氏は仙臺市大町二丁目の人にして明治卅八年十月廿日生である。亡父を仁藏亡母をクラと云ひ妻楨子との間に一子友吉を擧げた。大正七年三月仙臺市立町小學校卒業同十三年三月仙臺市商業學校卒業昭和三年三月東北學院専門部商科を卒業し翌四年九月文部省英語商業簿記實業學校教員資格の免許を受け翌五年より八年迄仙臺市宮城野小學校に教鞭を取つた。資性純真慈愛に富み責任觀念に厚く趣味亦廣く狩獵寫眞を能くし遊藝に文才に頭角を現はし就中柔道は特技に屬し講道館三段を允許され戦死後四段を贈られて居る。

昭和四年二月幹部候補生として高田歩兵聯隊へ入隊し同七年三月歩兵少尉に任官し次で正八位に叙せられた。昭和八年九月特別志願士官に採用せられ仙臺歩兵聯隊附となり翌九年戦車裝甲自動車教育修得の爲習志野戦車隊に分遣せられ次で同聯隊附となつた。昭和十一年一月修學の爲陸軍歩兵學校に分遣せられ成績優秀にして教育總監賞を授與せられ同年九月中尉に進級従七位に叙せられた。支那事變起るや今田部隊に屬し勇躍北支戦線に赴き昭和十二年八月十八日より九月十一

日の間は南苑附近の警備に任じ九月中旬に於ける永定河々畔の戦闘に於ては九月十四日將校斥候となり彈雨を冒して同河川の偵察に任じ又第二小隊長として克く部下を指揮し所在の殘敵を掃蕩して追撃戦闘を容易ならしめた。翌十五日には拒馬河畔楊家屯附近の河岸に展開して對岸の頑敵を猛射し遂に之を壓倒殲滅し以て友軍歩兵の渡河を容易ならしめ更に翌十六日には尖兵中隊長指宿大尉の指揮下に駱駝灣附近の殘敵を背後より掃蕩し敵に多大なる損害を與へ同河畔に蟠居せる敵



軍の總退却の素因を作爲した。爾來敵を急追し大冊河一畝泉附近の戦闘に於ては進路上の障礙を排除し友軍戦車の救援に従事する等追撃戦闘に寄與する所多く保定附近の會戰に於ては氏は故障の爲殘置せる戦車を救授し中隊主力に追及すべき任務を受領し九月二十四日午前四時永山大尉の指揮する戦車一輛と協力して馬廠を出發し途中中門良及四里營附近に於て機關銃を有する各々一中隊の敵を撃破前進したが偶々大隊本部及中隊主力が燃料全く缺乏し前進不能となれる狀況を知るや豫め大隊の企圖せる保定停車場附近の敵陣地攻撃を獨斷敢行するに決し同驛北側に對戦車壕を有する敵陣地を猛攻し之に多大なる損害を與へ午前九時之を占領し以て大隊主力の保定停車場への進出を容易ならしめたのみならず敵が列車を以て退却せんとする企圖を挫折せしめたもので作戦上至大なる利益を齎らしたものであつた。又漳沱河々畔の戦闘に於ては將校斥候として危險を冒し河川の偵察に任じ或は進路の補修作業に任じ次で石家莊順德附近の戦闘間には京漢線漳沱河鐵橋の補修作業及爾後の追撃戦闘に従事し又十月十五日沙河縣附近の戦闘に於ては所屬中隊長の指揮下に第二小隊長と

して沙河縣西側地區の敵を攻撃し最も勇猛果敢に奮闘し中隊戰鬥に貢献する所甚大であつた。翌十六日臨洛關附近の戰鬥に於ては午前十時半潰走中の敵に猛射を加へ臨洛關北側の洛河々岸に進出し敵彈を冒して渡河點を偵察し之を標示し以て中隊の渡河攻撃を容易にし且渡河後は速に臨洛關西側地區の敵に對し僅に戰車一輛を以て之を蹂躪し以て臨洛關附近一帯の敵をして頑強なる抵抗を放棄し敗走するの已むなきに至らしめた。十一月四日には彰德西方約六軒にある西八里庄の部落を利用し堅固に陣地を占領しある約二百の敵を攻撃すべき目的を以て午前六時四十分行動を起し午前七時より攻撃を開始した。氏は中央第一線小隊長として戰車一輛を指揮し同部落の側面より肉薄し敵を猛射して之に多大なる損害を與へ圍壁前二十米に達せる時彼我激烈なる銃砲火の爆煙に依り敵狀の認識困難となりし爲氏は大膽にも天蓋を開いて敵の狀態を確かめ動搖中の敵を猛射せしめんとする一刹那一彈飛來氏の頭部を貫通し午前七時卅分遂に壯烈なる戰死を遂げた。然れども氏の勇猛果敢なる奮闘に依り所屬中隊は當面の敵を粉碎し午前八時西八里庄を占領するを得た。

氏の純眞なる天性は軍隊生活に依り益々麗明美化し氏が丹精覃めて學びたる戰車の運用は既に妙境に達し各戰克く轉々たる武動を奏し快速部隊の急先鋒として所屬上官を初め同僚部下の信望を一身に集め切りに皇軍の武威を中外に宣揚した。が聖戰の中道にして此精神有爲の青年將校を喪ひしは皇軍の爲轉だ痛惜を禁じ得ない所である。さり乍ら人生死所を得るや寔に難し氏は此聖戰に参加し其蘊蓄を傾倒し其精神を捧げて一意君國に報じ遂に玉碎せるは正に是れ軍人の本懐とする所であらう。氏の勳功は皇軍戰史に異彩を放ち其名は千載の下大和櫻と咲き匂ふであらう。而して氏が英靈は永世に生き皇國を守護すると共に亡き父母先祖の諸靈に大いなる孝行を盡し又愛子が胸に忠勇義烈の志を深くも刻みつけ遺族の多幸を加護するや必然であらう。

氏は即日歩兵大尉に進級し次で正七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳六等功五級 小 島 繁

氏は埼玉縣南埼玉郡和土村大字笹久保の人にして、亡父を秀三郎母をトヨと云ひ大正二年十月三十日を以て生れ資性寡言力行の人にして剛毅果斷の一面友人知己に對しては敬愛の心を以て接し又歸省毎に墓參恩師の訪問を怠らぬ等情義に敦かつた。又中學在學當時も成績優等にして尙五ヶ年間無缺席に依り皆勤賞を授けられた。氏は更に又運動に興味を有し一萬米マラソン競争及器械體操競技等に於て兩三回賞状を與へられた程だ以てその性情の一般を知ることが出来やう。大正十五年小學校を卒業し縣立粕壁中學校に入學昭和六年三月同校卒業翌四月陸軍士官學校豫科に入り規程の修學を経て昭和十年六月陸軍士官學校本科を卒業し歩兵少尉に任官歩兵第五十九聯隊附となり翌年三月歩兵第三聯隊附に補せらるゝや五月には滿洲派遣を命ぜられ北滿警備中昭和十二年七月事變のため北支方面に出動し八月一日歩兵中尉に任せられ八月二日より同九日に亘り小隊長として天津附近の殘敵掃蕩に従ひ次で八月十三日より二十一日に至る外長城線附近の戰鬥には大隊長小浦少佐の指揮下に屬し第九中隊小隊長であつたが八月十九日午前二時三十分張北南方高地にありて約四百の敵襲を受くるや斷然之に應戦し黎明に至り敵動搖の色あるに乗じ疾風迅雷猛攻撃に轉じ以て敵に對應の追なからしめ多大の損害を與へて之を撃退した。翌二十日外長城線の敵陣地夜襲に際しては右第一線小隊長として敵の十字火を受けたるも確實に部下を掌握し敵前約四十米に近迫し中隊長の命令一下小隊の先頭に立つて突入せしが敵陣地前に豫期せざる外壕ありて行動を阻害せられ之が爲め小隊は一時混亂せんとせしも沈着よく部下を掌握し且冷靜に敵情地形を観察し正面に自動火器らしきもの數個あるを知り戰陣正面に小修正を加へ稍側方に迂回して人梯を以て壕を攀登した。此時手榴彈の猛撃を受けたが意に介せず小隊の陣頭にあつて敵の警戒線を突破し更に石垣陣地に突撃を敢行した。然るに不幸敵前五米に於て敵機關

銃のため右腿部及右下腹部に貫通銃創を又右肩胛部に盲管銃創を受け茲に惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。
尙部隊長よりの通信に依れば八月十九日氏は勇猛果敢第一線に在りて部下を指揮し峻峻なる山岳地を一意前進し攻撃を準備した。折柄黄昏より一大颶風巻起り同時に豪雨となつたが所屬部隊は夜襲を以て一舉敵陣地を攻略するに決し猛烈なる敵十字火を浴び全身泥まみれとなつて匍匐前進し漸く敵前數十米に到達したのであつた。午後十二時稍前夜襲の機熟し



突撃の令は凄絶悲壯に響き渡つた。氏は敢然小隊の先頭に傳家の寶刀を振り冠り敵陣目がけて斬り込んだ。忽ち敵兵三名は血煙あけて打斃れた眞に鬼神の早業颯爽として邊りを拂つた。折しもあれ兇彈飛來勇猛果敢なる我小隊長を打倒し氏は倒れ乍ら天皇陛下萬歳を絶叫した。此瞬間に向井一等兵は氏に駆寄りて背負ひ歩まんとするや又もや敵彈飛來一等兵の顔面と大腿部を打貫き其場に小隊長諸共折重りて壯烈なる戦死を遂げた。嗚呼諸共に崩つるゝ土の霜柱にとも云はんか一隊爲に悲奮の涙を抑へつゝ根限り精根りに敵兵を八ツ裂にせんず勢を以て格闘に入り遂に赫々たる戦勝を得たのであつた。

氏や天資英邁則途洋々大に駿足を暢べ得たらんに聖戦の中道に玉碎せるは眞に國軍の爲痛惜に堪へざる所である。さりながら人生夫れ死所を得るや寔に難し氏は皇軍作戰上重要な時期に敵が金城湯池の天險と恃みたる外長城の攻略戦に參加し神速機敏に光輝ある戦勝を獲得せしめ以て敵が雄大なる企圖を一舉に畫餅に歸せしめた次第で此の烈々たる殉職こそ正に是れ其死所を得萬古不朽の軍功と謂ふべきである。今や風發叱咤の雄姿に接する能はずと雖氏が英靈は不滅に生き尙も皇運を扶翼し奉り皇軍將校の龜鑑ともなり又遺族の將來を加護するであらう。其芳名や大和櫻と咲鏡ひ千載の下語り傳へて軍民共に感謝の涙を誘はるゝことであらう。

氏は即日歩兵大尉に進級し次で正七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳六等功五級

森岡徳右衛門

氏は岡山縣上房郡上水田村の人であつて父を半次母をしやうと云ひ明治四十一年十一月二十日の生れである。大正十二年三月上水田小學校高等科を又同十四年三月同校補習科を卒業昭和三年十二月一日徴兵として朝鮮平安北道江界歩兵第十七聯隊に入營し本務の餘暇刻苦學を修め同五年三月遂に陸軍士官學校豫科に入校同七年三月同科卒業士官候補生として歩兵第三十一聯隊に配屬せられ同年九月更に陸軍士官學校本科に入校同九年六月同科を卒業し同年十月二十日歩兵少尉に任官同十一年十月一日歩兵中尉に進級した。

昭和十二年七月支那事變勃發するや氏は湯淺部隊本部附として勇躍征途に上つた。而して七月三十日より八月十三日に至る間は部隊瓦斯連絡係將校として天津附近の掃蕩戦に従事し同月十四日より二十一日に至る外長城線附近の攻略戦に於ては兵團司令部及び第一線大隊との連絡に積極的に努力し部隊長の戰闘指揮に貢獻する所極めて大なるものがあつた。續いて八月二十二日、二十三日に亘る察哈爾省萬全縣水魁南方長城線關内附近の戰闘に於ては部隊長及び副官を補佐し部隊と共に敵を追撃し二十二日午後零時頃水魁附近に到着し爾後に於ける戰闘を準備しつゝ夜に入つた。抑々水魁、萬全間は岷々たる一帯の岩山であつてその間縫に峽谷に通ずる一路あるのみ而かも敵はその附近一帯に堅固なる陣地を構築守備

して居たのである。而して我部隊は速に之を突破して平緩線に進出しなければならぬ任務を持って居たので部隊長は夜暗に乗じ一擧この險難を強襲通過するに決心した。勇敢なる氏はこの事を知るや自ら志願して率先陣頭に立ち部隊誘導の大任を負ふた。部隊は午後十一時前進に移り隘路に近接する敵は險要を扼して猛烈に射撃を集中して来た。この裡にあつて氏は沈著豪膽熱誠を以て部隊長を補佐し其指揮を助けて前進を続けありしが右前方高地及び前進路上の敵は猛烈に我を射



撃し死傷續出し我が部隊の前進頗る困難となつた。此時氏は再び志願して掃蕩隊長となり第三中隊の一部及び本部傳令の一部を指揮し隘路内を猛進し道路に沿ふ小流の河床内に在て我を猛射しある敵陣地に突入之を撃退し續いて隣接の陣地に突入自ら刀を揮つて敵數人を斬殺し續いて格闘中敵彈飛來して肩より腹部を貫通し遂に氏は壯烈なる戦死を遂げた。時に午前一時四十分であつた。

氏や人格、識見、學術共に優秀にして士官學校在學中其成績品天覽の光榮に浴したること三回に及び又弘前歩兵聯隊勤務當時は秩父宮殿下の御部下として奉仕し殿下より御下賜品を賜はつたこともあり更に戦死の報台聞に達するや長くも御弔慰金を下賜せられた。以て氏の人と爲りを知ることが出来る。

其の戦場にありても沈着果敢指揮亦適切殊に其の最期に於けるや獨斷機宜に適せる積極的行動と犠牲的精神の發揮により一般將兵の志氣を鼓舞し部隊爾後に於ける強襲奏功の端を拓きたるは眞に功績拔群にして其赫々たる武勳は千載に芳香を留むるものと謂ふべし。

氏は即日歩兵大尉に進級次で正七位に叙し勳六等單光旭日章並に功五級金鷲勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳六等功五級 關根 愛 次

氏は埼玉縣南埼玉郡百間村の人にして亡父を市之助母をまつ妻を美也と稱し明治四十一年四月六日の生れである。性質直にして義務心篤く百間尋常小學校卒業後大正十年四月埼玉縣立杉戸農業學校に入學同十五年三月同校を卒業し爾來家にあつて農事に關係してゐた。昭和三年十二月一日近衛歩兵第一聯隊に幹部候補生として入營翌年十二月退營し昭和七年十一月歩兵少尉に任官越えて昭和八年九月一日現役勤務となり近衛歩兵第一聯隊附となり昭和十一年四月歩兵第三聯隊に轉職同五月滿洲派遣を命ぜられ北滿各地に移駐して警備に任じ又洮南附近の匪賊討伐に参加して功績を樹てた。同年十月歩兵中尉に進級し支那事變の勃發するや七月末湯溝部隊の大隊副官を仰せ付けられ勇躍征途に就き八月月上旬天津附近の警備に任ずるや各部隊との連絡を保持し克く其任務を全うした。外長城線附近の戦闘に於ては二十日午前一時行動を起し午後三時長城線に對し晝間攻撃を開始せられたが此時湯溝部隊右第一線たる小浦部隊の副官として參加した。小浦部隊は廣正面の地區を擔任し午後八時舊堡壘奪取を目的として猛烈なる攻撃前進を行ひ二十一日午前零時三十分氏は先頭に立ち小浦部隊と共に長城線に突入此間暗夜に危険を冒し單身各隊との連絡を確保し同部隊をして午前二時堡壘を奪取し同地を確保するに遺憾なからしめた功績は拔群である。續いて小浦部隊は〇〇兵團の水魁蘇家橋道轉進を掩護する任務を以て二十二日薄暮を利用し攻撃前進を起すや氏は書記及び傳令を適切に區處し部隊長を輔佐し午前一時頃夜襲を以て萬全附近の要地を占領することを得た。次いで八月二十五日、二十六日に亘る張家口附近の戦闘に於て廿五日午前九時頃より〇〇部

隊は優勢なる敵の包圍攻撃を受け小浦部隊は揚家庄西南方に展開該敵を攻撃したが正午頃同部隊長は兵力を轉用し鐵道線路方向より攻撃するに決し左第一線たる第十一中隊を右翼に移動せしめた。此時副官たりし氏は彈丸雨飛の間を馳驅して連絡に任じ同中隊をして小浦部隊長の意圖の如くに戰鬪を指導した。引續いて所屬隊が翌二十六日老雅生の敵を攻撃するや氏は克く部隊長を輔佐し危険を冒して各中隊と連絡を確實に保持し小浦部隊長をして戰鬪の指導に遺憾なからしめ以て敵をして敗退に至らしめた。又九月六日より七日に亘る天鎮附近の戰鬪に於ては所屬小浦部隊は張家河底西方高地に於て大橋上北側高地より大營に至る間の敵を攻撃したが氏は副官として第一線中隊との連絡命令の傳達に任じ危険を冒して任務を達成し部隊の指揮を遺憾なからしめた。翌九月八日より九日に亘る陽高附近の戰鬪に於て八日午後七時三十分第九中隊は城壁に突入した。小浦部隊長は機を失せず直に城内に進み戰果の擴張に努めつゝあつたが東門に在る敵は頑強に抵抗し猛烈なる手榴彈戰を惹起し茲に將兵の大部は壯烈なる戦死傷をなし悲惨なる戦況を現出した。黎明に至り部隊長は背後より敵を攻撃するに決し決死隊長を募るや副官たる氏は自ら之に應じ歩兵一分隊傳令若干を指揮し勇敢に前進東門上に突入しさしも頑強の敵を驅除して東門を占領し謂はゆる畫龍点睛を加へた功績は拔群である。引續き九月十日以降聚樂堡附近に或は大岡附近に或は下社村附近の各戰鬪に參與し小浦部隊副官として部隊長を輔佐して毎戦よく部隊の戰鬪目的を貫徹せしめた其功績は偉大なるものである。



陸軍砲兵大尉正七位勳六等功五級 順崎篤次郎

同九月三十日より十月六日に亘る崞縣附近の戰鬪に於ては小浦部隊長の下に依然副官として參加し十月四日午後六時部隊が庄頭北方四吉米に達せし時前方に激烈なる銃聲を聞き〇〇部隊に連絡の處置をなし自ら單身部隊に先行して敵情偵察に任じ庄頭南端に達した所我迫撃砲分隊の數名が敵の急襲を受け苦戦中であつた依て氏は早速同分隊を指揮して該敵を撃退すると共に前面の状況を速に部隊長に報告した。然るに此時小浦部隊は山橋村西端附近を占領すべき命令を受け薄暮を利用して其西部々落を又五日黎明其中央部を占領し次いで東部々落の攻撃準備に着手した。六日砲兵の掩護射撃の下に第九中隊が東部々落に突入せんとした時家屋上より投擲した敵の手榴彈に依り忽ち數名の死傷者を生じた。依つて部隊長は第十一中隊を率ひて突進中敵の數個の掩蔽機關銃は部隊本部及豫備隊に猛射を加へた。之が爲め小浦部隊長先づ負傷し氏も亦胸部に貫通銃創を蒙り壯烈なる戦死を遂げた。

本戰鬪に於ける氏の有益なる敵情偵察と又勇敢なる行動により友軍の危急を救ひ且又氏が終始各隊と確實なる連絡を保ちたる事は實に戦捷の因をなしたるもので其功績赫々たるものがある。噫氏の戦歴は察哈爾綏遠山西の三省に及び懸軍幾百里堅城を屠り絶壁の山岳を踏破し常に豪膽敵を呑み周密細心よく所屬隊長を輔佐し又進んで難局に當り以て光輝ある戦勝を獲得せしめた。寔に是れ皇軍將校の範鑑にして其名は千古に芳ばしく其英靈は不滅に生るであらう。

氏は即日歩兵大尉に進級し次いで正七位勳六等に叙せられ單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

氏は明治二十七年一月七日東京府下西多摩郡古里村字大丹波に生る。父を紋吉母をナミと謂ひ妻フチエとの間に二男三

女を擧ぐ。氏は資性濃厚篤實にし義務心厚く又同情心に富み老幼を憐み窮困を救助したる實例尠からず。退役後は前後十二年間に亘り村道林道等の改修に盡力したる所多大にして郷人皆氏を徳とした。又隊内に在りては克く部下を愛撫する事子の如く部下亦氏を父兄の如く敬仰し定に初級士官の模範たる人格者であつた。明治四十一年三月古里尋常高等小學校高等科を卒業し次で同地の補習夜學校に於て勉學し大正三年横須賀野戦重砲兵聯隊に入營し下士官候補者に採用せられて

軍務に精勵累進して昭和三年三月陸軍砲兵少尉に任ぜられ而かも當時一兵卒より士官に進みたる者六名中の第一位であつた。任官と同時に待命仰付けられて歸郷其の後十二年間郷里に於て在郷軍人分會長、同西多摩郡聯合會理事、青年學校指導員、防護團副團長、消防組副頭取、木炭組合理事、海員救濟會委員、その他東京府肥料改善調査委員等として公共事業に盡瘁せる所頗る大なるものがあつた。



昭和十二年八月支那事變の爲め召集を受け同月十四日今田部隊に屬して征途に就き九月十二日より同月十六日に亘りては上海市政府附近の戦闘に参加し觀測班長として克く大隊長を輔佐し爲に大隊は極めて有効なる射撃を實施し敵に多大の損害を與へた。九月十七日以降は劉家行及顧家屯附近の戦闘に於て朱家屯に大隊觀測所を選定し各中隊の觀測小隊の一部を統一指揮して敵情の蒐集整理をなし以て大隊長の射撃指揮を便ならしめた。大で大隊は金家灣王宅王九房の敵を射撃するに及んで氏は晝夜兼行にて敵情の蒐集並に上級部隊との連絡及射撃効果の觀察に精力を傾倒し大隊の戦闘威力を最高度に發揚する

ことを得しめこの間中尉に昇進した。九月二十日は大隊の觀測所附近に敵銃砲彈落達し正午頃より愈々熾烈となり爲に大隊は我が損傷を減殺して大隊の射撃威力を益々發揚せんがため工事を始むるや氏は射撃觀測の間斷を利用して掩蓋を有する掩壕を工夫構築し敵彈雨飛の下自ら將兵を指導して該工事を督勵中午後三時三十分左胸部に敵の小銃彈を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

因に九月廿一日未明に於ける我砲撃は頗る正確に敵陣地に命中し其巨彈の威力は徹底的に敵陣地を破壊し壘壕と云はずクリークと云はず敵兵の死屍累々折重つて斃れ其損害は二千名を下らぬと云ふ事であつた。是れ實に氏が不眠不休の努力を以て正確なる情報を蒐集し又各中隊の射撃準備に確乎たる準備を與へた賜であつた。

氏の所屬隊は到る處に赫々たる武勳を奏し藤田部隊長より前後三回に亘り褒賞狀を授與せられた。氏の戦歿する所屬隊長は自分の四肢を切斷せられたる思ひがすると痛惜し戦友及部下は一大光明を失つたと慟哭せるは蓋し過言ではあるまい。噫入りては一郷の中堅となりて公益を廣め出で、は一隊の樞軸となりて不滅の武勳を奏せる氏の生涯こそ輝かしいものであつた。今や聖戦の尊き犠牲となり風發叱咤の聲咳に接すべからずと雖氏が英靈は永世不朽に生き皇運を扶翼し奉り忠勇義烈軍民の龜鑑として末永く仰がるゝであらう。

氏は即日砲兵大尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 岡田平一郎

氏は栃木縣芳賀郡清原村の人にして大正二年九月二十四日生れである。父を平七郎母をヨネと云ひ氏は未だ獨身者であ

つた。資性剛直にして而かも人に接し和樂愛敬の念を失はなかつた。昭和六年三月宇都宮中學校を卒業昭和八年六月人命救助に依り栃木縣知事より表彰せられ金一封を授與せられた。氏は常に謂ふ「爲すべき時機を失ふてはならぬ當然行ふべき事は遲疑逡巡する事なく即時決行を要する」と蓋し氏の積極敢爲の性格を現はしたものと思はれる。昭和八年十二月宇都宮歩兵聯隊へ入隊し直に滿洲派遣となり泰安鎮附近の警備に任じ翌九年四月歩兵科幹部候補生を命ぜられ翌五月内地歸還十一月軍曹の階級に進み現役滿期となつた。



支那事變勃發するや石黒部隊に召集せられ歩兵少尉に任官し勇躍征途に就いた。氏は濶井部隊に編入せられ十一月六日道西堡附近戦場に於て河村中隊第三小隊長として参加し中隊が道西堡東端に陣地を占領するや第一線中央小隊として陣地を構築し爾後逆襲し來れる敵と奮戦し之を撃退した。十一月十一日乃至十三日の南小留附近の戦場に於ては左第一線小隊長として南小留の敵陣地を攻撃したが當時所屬中隊は隣接の他部隊と協力の上左翼方面より南小留の敵を攻撃すべき命令に接し先づ氏の小隊をして之に協力せしめたのであつた。此時敵は狙撃的射撃を行ひ一度發見せられんか近距離より猛烈なる射撃を加へ來る状態にして攻撃部隊の行動は甚だ危険なりしに拘らず氏は率先先頭に立ちて前進し有利なる射撃位置を發見して小隊を誘導し正面の墓地附近に在りし敵を猛射した。氏は我が射撃の有効なるを喜びつゝ眼鏡を取りて彈着の觀測に努めて居た。然るに氏の利用したる墓地は高さ約一米にして確實なる彈着觀測には稍姿勢を高くすべき必要を認め墓地高より高姿勢を取りたる瞬間左前方の敵より發

見せられ午前十一時三分其側射を受け左胸部貫銃創に依り遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の小隊の有効なる射撃に依り隣接せる第四中隊の進出を著しく容易ならしめ本戦團勝利の主なる素因となつた。

本戦團に於ける氏の行動は全く氏が平素より堅持せる信念に基き死生を超越し勇猛果敢克く小隊の志氣を振作し敵をして疑懼の念をさへ起さしめた。而かも氏が旺盛なる責任觀念の躍動する所危険を顧みず觀測高度を高め遂に玉碎するに至つた。寔に是れ皇軍將校の眞骨頂を具現せるもので天晴軍人の龜鑑と謂ふべきである。今や氏は饒誦の任を全うして聖職の花と散つたが其名は千載に芳ばしく其勲功は皇軍戦史に光彩を添ふべく其英靈は永世に生き護國の神又一家の守護神として強き力と清き光とを投げ與ふるであらう。

氏は即日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍主計中尉從七位勳六等功五級 大野八郎左衛門

氏は岐阜縣稻葉郡岩村の人にして明治三十九年九月二十七日生れである父を三郎母をまさよと稱し妻まきととの間に裕子拘子の二愛子がある。資性濃厚篤實の他面に明敏快活の特長を藏し事を處するに注意周到にして常に積極的努力を拂ひ人と交りては誠實圓滿にして上下及同僚の信望厚かつた。大正十三年三月岐阜中學校卒業後第八高等學校を経て昭和五年三月京都帝國大學經濟學部を卒業したが帝大在學間計理士試験に合格し同大學卒業後は幸無盡會社に入社し終始一貫庶民金融機關たる社業の爲精勵し純眞且責任觀念の旺盛なる社員として上下一同の信望を集め前途有爲の模範社員として囑目されて居た。氏は俳諧にも趣味を有し徹人と號し技漸く堂に入つて居つた。昭和六年二月經理部幹部候補生として名古

屋歩兵聯隊に入隊し昭和八年三月陸軍三等主計に任ぜられた。

支那事變勃發するや昭和十二年十月十四日牧野部隊に屬し江南戦線に出征した。氏は應召以來大隊經理事務に精勵し大隊將兵が給養上受けたる幸福は甚大であつた。昭和十二年十二月皇軍が南京攻撃の爲め西へ西へと移動したが氏の所屬隊は石灣鎮を守備し〇〇主力の左側背を掩護すべき任務を受けて居た。當時杭州には約五箇師の敵軍が集結して居たので隊



長以下は決死の覚悟で重責に當つて居つた。所命の守備地に来て見ると住民は全部逃走し物資後送の途もなく徴發の南京米白豆蠶豆味噌醬油等の若干を有するに過ぎなかつた。依て牧野隊長は塚本、大野兩少尉以下十三名の將兵を以て物資調査隊を編成し十二月十日午前七時一隻の小舟に搭乗せしめ石灣鎮を出發桐郷附近へ派遣し當日午後五時迄に歸還すべき事を命じた。調査隊は石灣鎮より小舟でクリークを下り石灣鎮の東方約二里に在る桐郷に到着し午後四時頃には任務を完了して歸途に就いた。午後四時四十五分頃嘉興西南方約五里に在る何姜村附近の橋下にさしかゝつた時敵はクリークの兩側

にありし電柱を倒し電線を無數に張りて舟の通行を阻止して居た。此附近の地形は大小二筋のクリークが流れ小クリークの右岸一帯は高さ身長に及ぶ桑畑打積き全く通視を妨げ左岸は所々に芒が生ひ茂り其高さは身長の一倍半に達して居り大クリークの幅約五十米、近くには二箇の眼鏡橋が架けられてあり而して後にわかつた事だが此二つの橋梁こそは敵が歩哨を立て、嚴重に警戒し居た所であつた。あゝ無念なるかな一行は敵が計畫的の係蹄に引かゝつた。突如前後左右から約二百の敵兵が現はれ機關銃小銃の亂射亂撃而かも陸上に陣地を構へての狙ひ撃ち我は舟中に行動の自由を失ひ所詮不利なる態勢であつた。併し沈着剛膽なる大野少尉以下の各勇士は少しも騒がず舟を東岸によせて上陸奮戦した。斯る中にも味方の若干は敵弾を受けて噎れて行く敵は連續的に手榴弾を投げつけて来る勇士の各々は早や數創を受けて萬策盡き果てた。斯くて戰鬪約三十分を經過した頃は桑の木の小枝迄が無數の彈痕を印するの大激戦となつた。氏は最早是れ迄と思ひけん決然群る敵中に突入り多數の敵を斬り倒し刺し殺し阿修羅の如く奮闘したが遺憾にも下腹部貫通の銃創と額面に手榴弾の破片創を受け遂に壯烈無双の戦死を遂げた。氏は突入に先ち 陛下の萬歳を三唱しつゝ傳家の寶刀を大上段に振り冠り塚本少尉と共に群がる敵中に突入りした而して其勇姿こそは九死に一生を得たる部下榊原上等兵の報告に依て明かにされた所であつた。

噫死に直面して唯々限りなき皇恩に對し死を以て御禮申上ぐる氏の心こそ莊嚴ではないか。大敵たりとも懼れず己が武職を全うしたる氏の大勇こそ武人の鑑ではないか。幾千年も経たらん松の大木にも仔細に觀すれば風雪の犠牲となつた枝もあるのだ。而して其犠牲こそは年々に新芽を出す松の生命を繼いでくれた尊い枝葉であつたのだ。

皇軍の輝かしき戦捷の裏氏等の隠れたる大武勇こそ敵軍の心膽を奪ひ去つてくれたものである事を感謝せずには居られぬ。

氏は即日主計中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳五等功五級 荻野隆知

氏は埼玉縣大里郡大寄村大字上敷免の人にして父を倉次郎母をフミと云ひ明治三十八年五月二十五日を以て生れ夫人ツギ子との間に二男一女がある。資性濃厚篤實にして果斷事に當りて毫も動ぜず思慮周密にして事理に違ふことなく熱心且勤勉であつた。氏は大正九年三月大寄尋常高等小學校を卒業したが其在學中は各年次を通じて首席を保ち模範生として全校崇拜的となり又青年教育に意を用ひ軍部發刊新聞「つはもの」を月々出身小學校に寄贈して教育の資に供し又先輩崇拜の念強く軍務多忙にも拘らず通信を怠ることがなかつた程で其の戦死の報あるや村を擧げて哀情遺族に對する慰問者引きも切らざる有様であつた。嗣て又彼の二、二六事件の際に當つて氏は中隊の週番士官であつたが毅然として「勅命に非ずして一兵を動かすべからず」と言ひ放ち遂に同中隊の一兵も該事件に参加せしめなかつた。此事の事實によりても克く其の人となりが窺はれるであらう。大正十二年一月現役志願として宇都宮歩兵聯隊に入營翌十三年十二月歩兵伍長に任ぜられ爾後累進して昭和九年十二月特務曹長に進み同日少尉候補者として陸軍士官學校に入校し翌十年十一月同校卒業昭和十一年三月歩兵少尉に任ぜられて在京の歩兵聯隊附となつた。而して同年五月滿洲駐劄として渡滿し警備の任に服し十二年三月勳六等瑞寶章を授けられ今次支那事變の突發するや尾畑大尉の指揮に屬し北支方面に出征八月一日より同九日に亘り臨時天津防衛司令官の直轄となり海光寺兵營に位置して該地附近の警備に服し八月八日所屬部隊に復歸し關部隊司令部及び湯淺部隊本部の警備に任じたが物情騒然甚だ不穩にして此間頻繁に衛兵長巡察勤務に従事し或は出動し以て部隊作戰を容易ならしめた。而して同月十四日より二十一日に亘る外長城附近の戰闘には小浦部隊に屬する第一線中隊の第一小隊長として参加し十九日「バサロホ」東南方高地に於て約三百名の敵に遭遇するや部下小隊を率ひて之を攻撃約十倍の敵

に對し勇敢適切なる戰闘指導により遂に敵を擊退し緒戦に於て戰勝を博し部隊の士氣を一段と昂揚せしめ又同夜敵の夜襲を受けたるも部下の指揮適切にして敵に多大の損害を與へ之を擊退し延て中隊爾後の戰闘を容易ならしめた。續いて翌二十日長城線「トーチカ」攻撃に方つては之が占領の任務を以て部下を能く掌握誘導し「トーチカ」至近の距離に迫るや中隊長尾畑大尉負傷し氏は直ちに之に代りて中隊を指揮し勇猛果敢率先陣頭に立ち敵陣に突入之を奪取し其勇敢なる奮戰振りは部下一同の驚嘆する所と成つた。越へて八月二十一日には中隊長代理の任を戸伏中尉に譲り其の指揮の下に第一小隊長として攻撃前進せしが部下は數日來殆ど不眠不休の戰闘を續け殊に前夜の夜襲により疲労著しく且つ左第一線中隊が未だ進出をなさざりし爲め小隊は三方より敵の集中火を受け前進氣勢漸く沈滞せんとしたるを見た氏は意氣頗る軒昂部下を激勵叱咤して前進を續け斯くて午後五時三十分荻野山に對し突擊命令を受くるや氏は此時とばかり部下を率ひ熾烈なる敵火を冒し荻野山脚に進出し更に峻峻なる斜面を攀登し頂上附近に達した頃は隨從し來る者漸く第一分隊長平澤軍曹他一名のみであつた。併し中隊長は現在地に於て中隊を集結し態勢を整ふるが如きは徒に損害を増すものとし斷乎突入を命じたのである。氏は平澤軍曹と共に友軍歩兵に記號をなしつゝ敢然中隊長に續いて突入した。四十名餘りの敵は健氣にも逆襲し來たので中隊長及氏を初めとし軍刀を揮ふて其數名を斬撃した。然るに午後七時十分左側面に廻りし敵は我に向て狙撃し今や前面の敵と格闘奮戦中の氏は鼓に無念にも其凶弾に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や好學有徳の士、敬順上に仕へ仁慈下を愛し而かも謹嚴己れを持し孜孜として職分に精勵す皆是先憂後樂園を受するの至誠に出づ宜なるかな郷黨氏を仰いで師表となすや。

氏滿洲駐劄中功に依り勳六等に叙せられ今次北支の征戰に參與して頭敵を外長城線方面に追ひ終に氏の姓をとりたる荻野山の激戰突撃に於て敵彈の爲めに殲る。

噫、有爲の士、氏を喪ひたること嘗に郷黨のみならず邦家の一大損失にして痛恨極まりなし。然れども氏が最後に至るまで發揮せし熾烈なる攻撃精神は遂に中隊の突撃を成功せしめ敵をして一舉遠く水魁附近に退却の已むなきに至らしむ其功績眞に拔群と謂ふべく其疾野山の名と共に永く青史に輝くであらう。即日氏は歩兵中尉に進級次で從七位に叙し勳五等双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功四級 武田貫二郎

氏は長野縣東筑摩郡朝日村の人にして大正元年九月十四日生れである。實父は捨三郎實母はみちと云ふが二歳の時より叔父夫妻の養子となり養父は克己養母はたけえと稱し妻の名をやす子と云ふ。愛子は未だ授からなかつた。資性温順にして特に忠孝の念厚く事を處するに果斷であつた。大正十四年三月郷里の小學校を卒へ昭和五年三月松本第二中學校を卒業し昭和七年十二月幹部候補生として歩兵第五十聯隊へ入隊翌八年十一月歩兵軍曹に進級し歸隊となつたが昭和十年七月以降朝日村信販購利組合員に就任し又青年學校指導員として衆望を擔ふて居つた。而して昭和十一年三月には歩兵少尉に任じ次で正八位に叙せられた。

支那事變勃發するや遼山部隊遼山中隊に召集せられ昭和十二年八月下旬勇躍征途に就いた。斯くて九月十五日より十七日に亘る間河北省交通附近の戰闘に参加するに至つた。即ち所屬中隊は右側衛となり十五日午後三時前進を起し午後六時より高家坎の敵を攻撃し午後十一時同村を占領した。此日氏は尖兵長を命ぜられ良郷を出發したが克く高家坎の敵情を明かにし當面より力攻して敵を牽制し中隊主力の敵右側背に向へる夜襲を容易ならしめた。十六日中隊は交通の敵に對し午

前八時より攻撃を開始し夜十二時敵陣地を占領した。此日當初は豫備隊たりしが優勢なる敵に對し警戒を嚴にし遂に其の出撃の機會を皆無ならしめ午後七時より右第一線小隊長となつたが指揮掌握確實にして率先勇猛果敢に交通東端の敵陣地に突入しさしも頑強なりし敵を潰走せしめた。翌十七日中隊は黄土坡の殘敵掃蕩の爲午後三時より行動を起し午後七時同村を占領した。此日氏は右第一線小隊長として陣頭に立つたが疾風枯葉を掃くの勢を以て堅壘に殺到し周章狼狽する敵を

薙ぎ倒し遂に之を全滅せしめた。之が爲本隊主力をして大石橋及涿縣に向ふ追撃を神速ならしむるを得作戰上多大なる利益を得たのである。

同年九月二十一日所屬部隊は〇〇部隊の前衛となり大冊河の線に向ひ追撃前進した。折しも二十一日夜十二時を期し敵前渡河を強行し夜襲に前進せる第一大隊の左翼が危険に瀕するや所屬中隊は聯隊命令に基き第四中隊に跟随し午前一時半頃渡河を行ひ同大隊の左側掩護に任ずる事になつた。氏は小隊を提げ中隊長と共に敵の銃砲火を冒し勇敢に前岸に進出し右第一線となり今や攻撃頓挫しある第四中隊の左翼に展開し敵の突出陣地を猛攻し遂に頑敵を撃破して完全に其任務を遂行した。爾後聯隊命令に依り第一大隊の右翼に轉進し同大隊主力の右側を脅威する突出陣地に對し放膽且果敢なる包圍攻撃を行ひ之を撃破し積極的に其任務を達成した。引續き第三中隊と共に第一大隊主力の中間地區を突破して黃村に進入し二十二日午前七時之を完全に占領した。本戰闘に於ける氏の勇敢なる行動は的確なる戰機の看破と俊敏適切なる戰闘指揮と相俟ち隣接大隊の危機を免がれしめた



將校准士官之部

るのみならず本期作戦捷の因をなしたるものであつた。

所屬部隊は更に黄付西南方の敵陣地を突破し石莊へ進出するの目的を以て行動を起した。氏は前夜々襲に依り奪取せる黄村より石莊に向ひ進出せんとしたが九月二十二日午後五時頃より優勢なる敵に包圍せられ窮へ當面の敵は既設陣地に據り熾烈なる火力を以て執拗且頑強なる抵抗を試みた。茲に於て氏は先づ敵の側防火器を求めて之を撲滅若くは制壓を加へ大、中隊主力の展開を容易ならしめ所屬大隊が攻撃前進に移るや最も活動する敵の側防火器を逐次に撲滅し其前進を容易ならしめ左小隊たりし第三小隊が敵陣地へ突入する際も機を失せず突入して其戦果を擴張し以て敵の重圍を崩壊せしめ本隊主力の南進を容易ならしめた。氏の俊敏なる戦機の看破並果敢なる戦闘指揮は此處にも現はれて突破戦の成果を迅速確實ならしめたるは亦武功拔群と謂はねばならぬ。

九月二十三日より二日間は保定附近の殘敵掃蕩であつた。即ち氏は尖兵中隊の第一小隊長として保定南方地區に於て京漢線を遮断する目的を以て南進したが進路の兩側地區は勿論所在に出沒する殘敵を掃蕩して之が目的達成に大なる貢献を與へた。斯くて同月二十八日迄各種警戒勤務並に追撃準備に従事し本隊の保定集結と追撃準備行動とを容易ならしめた。

九月二十九日以後は滹沱河の渡河準備並に其戦闘に参加した。即ち保定より滹沱河に至る間は或は困難なる地形に於ける尖兵長として或は軍旗護衛の小隊長として或は地形偵察の斥候として重要な任務に服し常に積極的に活躍し克く其任務を遂行した。特に十月八日夜中隊が西韓村より小壁村陸村方向の河川並に敵情搜索に着手するや敵前至近の距離に於て困難なる地形を意とせず勇敢に威力偵察を敢行し十二分に其目的を達成した。斯くて十月十一日より同月十五日に亘る間は石家莊元氏及順德附近の戦闘に参加し同月十七日には磁縣に向ふ追撃戦闘中馬頭鎮附近に於ける大隊の夜襲に方り氏は大隊豫備隊長として大隊長の直轄指揮に入りしが克く側方及後方の警戒を全うし好機に投じ大隊長に従ひ敵陣に突入して

敵を撃退し機を失せず第一線に進出し敗退する敵に對し殲滅的の大打撃を與へた。氏の發刺たる意氣や戰場到る所に躍動し痛快の極みであつた。爾後磁縣に至る追撃間京漢線兩側地區に出沒する殘敵を撃破し其後遼山部隊長の直轄豫備隊となり磁縣西側に位置し主力部隊の掃蕩戦實施間戦備を嚴にし克く其重任を全うした。

十月二十日より三日間は氏の最終戰場たりし西保障附近の戦闘であつた。二十一日午前二時西保障南方高地に向ひ優勢なる敵の逆襲を受けた。當時氏は右第一線小隊長として同高地を占領すべき任務を受けて居た。茲に於て氏は猛烈なる敵の銃砲火を意とせず憤然として同高地に進出し午前十一時迄に數回に亘り我に數倍せる敵の逆襲を撃退し之に多大なる損害を與へた。折柄第三小隊が超越攻撃に移りたる爲豫備隊となつた。敵は要點奪回を企圖せるものゝ如く夜に入り益々執拗且熾烈なる逆襲を敢行し其第三回日の午後六時には大隊陣地の鎗鎗たりし第三小隊陣地の左翼高地は其溢出し來れる敵の有に歸せんとする状態となつた。氏は此状況を看破し自ら進んで此危急を救ふべく意見を具申すると共に即時部下小隊を提げ陣頭に立ち果敢なる突撃を敢行し次で壯烈なる白兵戦の後該高地を確保するを得た。だが此突撃に當り氏は敵前三十米に肉迫せし時敵の手榴弾の爲右大腿部に爆創を受けた。併し豪膽不敵の氏は之を意とせず率先陣頭に立ち群る敵中に突入して忽ち敵兵數名を斬り斃し數倍の敵を撃退し機を失せず同高地の確保を部署し隣接第三小隊に連絡し終るや不幸にして頭部に貫通銃創を受け午後六時三十分壯烈なる戦死を遂げた。

噫氏や參戰以來激戦を交ゆる事幾度か其間克く戦機を捉へて勇戦奮闘常に赫々たる武勳を奏し偉大なる戦果を收獲した。踏破戦線の縦長距離實に百數十里、其間殆んど不眠不休喰ふに食なく喝すれど水なく惡路惡天候を征服しつゝ部下と勞苦を頗ち常に戦闘力を維持せるは氏が絶倫の忠誠垂範示教の賜であつた。洵に是れ皇軍青年將校の龜鑑として國寶的存在の一人であつた。今や風發叱咤の雄姿を見る能はずと雖京漢線戦史に不朽の異彩を放つものであり其名は盛夏尙爽颯と

して雪消えざる峻峰の如く仰がるゝであらう。氏が信念とせる忠孝兩全は正に具現せられて聖恩遺族に及び氏こそは親先祖と共に生き又假令愛子はなかつたにせよ其後繼者及愛妻に清き魂を頌ち護國の神、家庭の守護神として永世不滅に生き得らるべき神徳を授けられたものである。

氏は即日歩兵中尉に進級し從七位勳六等に叙し單光旭日章並に破格の功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 武田 肇

氏は山形縣東村山郡鈴川村大字下山家の人にして父を留蔵母をみやと云ひ妻コウとの間に三人の愛兒がある。明治三十八年七月十二日に生れ大正七年四月山形中學校に入學同十二年三月卒業翌十三年二月准訓導心得を命ぜられ東村山郡鈴川村尋常高等小學校に教鞭を執つてゐた。性質温順にして孝敬慈愛の徳を備へ一面勇往果斷而かも不言實行の人であつた。大正十四年十二月一年志願兵として山形歩兵聯隊に入營翌十五年十二月豫備役に編入せられ昭和二年四月歩兵曹長に任ぜられ同四年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられた。同年八月山形縣内務部會計課に勤務し十一年五月山形縣屬に任ぜられ勤績中昭和十二年七月應召赤間部隊深谷隊に編入せられ其第三小隊長として北支に出征した。而して九月十四日より同二十一日に至る永定河附近の戦闘及徐水に至る追撃戦に於て所屬中隊は赤間部隊の本隊として行動したるも道路不良加之敗殘の敵は各所に出没して車馬部隊の行動頗る困難であつたが氏はよく部下を激勵掌握して所命の任務を遂行した。更に九月二十二日より二十四日に亘る保定附近の戦闘に於ては二十三日午後五時二十分行動を開始し部下小隊を率ひて季莊南側(京漢線の南側)に放列の布置を終り午後七時三十分保定城内に對して擾亂射撃を開始し午後八時射撃終了の後夜暗陣地

を郭莊南方鐵道附近に變換翌二十四日午前六時三十分保定城北側城壁附近の敵に對し射撃を開始するや敵は小銃重機關銃を以て猛烈に射撃し其勢侮るべからざるものがあつた。此時氏は敢然として冷靜部下を指揮し、適切な射撃指揮を以て中隊長の意圖の如く極めて有効なる射撃を実施した。殊に銃砲聲熾烈の爲號令の徹底動もすれば不充分なるを察知した氏は彈丸雨飛の間を左右に移動して號令の徹底に努め分隊長以下の射撃動作を監督指揮し斯くして部下に沈着有効なる射撃を実施せしめ、迫撃砲の射撃威力を最大限に發揮し敵に與へた損害と脅威は圓り知るべからざるものがあつたが午前七時二十分頃敵の一彈は氏の左胸部を貫通し惜しくも遂に壯烈なる戦死を遂げた。氏や温良有徳の士育英に地方官廳事務に貴重の經驗を持し今次事變に會し欣然劍を執つて小隊指揮の任に就く其の克く中隊長を輔佐して萬般の隊務に貢獻せること尠からざりしや蓋し疑を容れず。氏は又敵に直面しても善戦克く努め中隊全面の戦果を發揚し殊に其の最期の戦闘に於て氏の小隊が前日當日の二日に亘り實施したる射撃は正確猛烈敵の心膽を寒からしめ第一線歩兵部隊の攻撃前進を有利に導き以て保定攻略の有力なる素因をなしたる次第にして一死遂に克く此拔群の功績を擧げたる氏の英名や千載の下青史に芳香を放つものと謂ふべきである。



氏は即日歩兵中尉に進級次で從七位に叙し勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 田中 奔 韶

氏は北海道沙流郡平取村の出身、明治四十一年一月三日生れである。父を鶴吉母をタミと稱し、妻カホルとの間には未だ愛子がなかつた。氏は思想正順、不言實行の士である。十五歳の折、志を立て、東京に出で見習奉公の餘暇を以て夜間商業學校に入校し二十一歳の三月同校卒業、引續き大倉高等商業學校に入り二十四歳の三月同校卒業、直に大倉火災保險會社に就職した。大倉高商在學間學生等は學校當局に不満を抱き約一週間休校したが、氏は相互の間に入りて紛争を圓滿に解決せしめた。

昭和六年幹部候補生として歩兵第二十八聯隊へ入隊したが、翌七年度の秋季演習間、同聯隊は關留方向より進文台の敵陣地を攻撃するに方り氏は斥候となり敵情搜索に従事した。時に同部隊の將兵は極度に疲勞しありしに拘らず氏はよく部下要員を督勵し熱心搜索に努め極めて正確適切なる情報を提供した。之が爲聯隊長の戰闘計畫を適切ならしめ且其戰闘指揮を容易ならしめた爲、時の聯隊長石井大佐より表彰狀を附與された。以て氏の性格、力量の一端を窺ふ事が出来やうと思ふ。昭和十二年八月二十四日召集せられ獨立機關銃部隊附となり、勇躍出征の途に就いた。かくて同年十月まで石家莊、元氏、順德附近の戰場に輝く武勳を奏したのである。

以下氏の主要なる戰歴を述べれば九月二十九日乃至十月九日に於て所屬隊の濼沱河渡河準備中であつたが、氏は第一小隊長兼中隊馬係として、連日長途の難行軍に引續き繁劇なる渡河準備を積極且適切に處理し、常に部下小隊並に中隊馬匹の戰力を維持増進し以て適切有效に中隊長を輔佐した。十月十日には濼河を決行する事になつたが、氏は右小隊を指揮し適確機敏なる射撃を以て協力部隊に支援し、剛膽不撓克く優勢なる敵を壓倒し遂に之を潰滅敗走せしむるの動機を作爲し

た。かくて同日午後敵を急追し途中輕戦を交へつゝ翌十一日には、約一ヶ師を以て防禦せる敵陣地前に到着した。所屬中隊は歩兵部隊第一大隊に配屬せられ、十二日午前三時二十分堡家庄附近の敵陣地に對し攻撃準備に着手し、午前五時四十分より協力歩兵大隊の攻撃開始と共に堡家庄村端に全火力を集中した。敵亦必死となり迫撃砲彈及小銃火を所屬中隊の正面に集中し氏の小隊内にも迫撃砲彈の爲戰死者二名を出した。されど氏は沈着部下を指揮して士氣を鼓舞し以て友軍歩兵



に緊密なる協力を與へ、更に彈丸雨飛の中を、獨斷百米を躍進して第一線歩兵中隊長に會同し、突撃支援の爲め新陣地を協定の上之を偵察し、將に現陣地に復歸せんとする一刹那、一彈飛來會談せる中隊長を斃し其餘勢を以て氏の下腹部に命中し其場に打倒れた。併し氏は重傷に屈せず、所屬中隊長の走り寄るを見て、負傷して相濟みません何卒お救し下さい、中隊の戰捷を祈りますと述べ、側近の將兵爲に暗涙に咽んだ。やがて急造擔架に載せ後送し手當を加へたが、重傷故所屬中隊長の悲痛の思にて何か傳言なきやと尋ねれば、唯一言田中は笑うて死ねますと答へた。斯くて翌十三日午前五時遂に護國の華と散つた。本戰闘に於ては濼沱河の障礙に依り友軍砲兵は前進を阻止せられ、歩兵獨力の攻撃となり、敵は野砲及迫撃砲を有して我を猛射し友軍の苦戦一方ならざる狀況であつたが、數回に亘る逆襲を撃退し、十二日午前十一時壯烈なる突撃を敢行し遂に頑敵を撃破し、堡家庄一帶の陣地を占領した。此光輝ある戰捷の蔭には氏の勇猛なる奮戦、尊き犠牲が礎石を爲しある事を忘れてはならぬ。

即日歩兵中尉に進級、從七位に叙し、勳六等單光旭日章及び功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵中尉從七位勳六等功五級 長岡 督

氏は北海道札幌市北一條東四丁目の出身にして父を未至郎母をカメと云ひ明治四十三年三月二十六日を以て生れ妻政子と娶つた。大正十三年三月公立中央創成小學校を卒業後札幌第二中學校に入學、昭和四年三月同校を卒業し直に北海道帝國大學附屬土木専門部に入學同七年三月同部を卒業して北海道廳帶廣治水事務所勤務した。性剛毅果敢で一度決心した以上、初志を貫徹せなければ一步も退かぬと云ふ強い意志の持主で、例へば北海道拓殖事業の一である聖臺貯水池セメント注入工事が實施せらるゝや氏は選拔せられて該工事を擔當したのである。同工事中セメント注入の作業は斬新で隨時と雖も中絶することを許さぬから天候の如何に拘はらず又日夜の區別なく之を續行し幾夜かを徹し眞摯的な研究態度と熱烈なる意氣を以て見事に完成したるが如きは其の發露に外ならない。而も老父母に對して至孝弟妹に對する慈愛のやさしい反面があつた。昭和八年二月幹部候補生として旭川工兵聯隊に入營し所定の教育勤務課程を経て同十一年三月工兵少尉に任官正八位に叙せられた。

支那事變の爲昭和十二年八月應召和田部隊に編入せられ九月十三日北支方面の征途につき十月二日以降或は聖臺寶店間の道路並に橋梁の補修に或は正定北高家營間の道路の補修並に渾沱河橋梁の架設作業に従事し、殊に渾沱河の架橋並に補修に方りては當時の狀況時日の遷延を許さないので晝夜を分かつた、よく隊長を輔佐し作業の計畫指導に任じ、以て其の完成を迅速ならしめ軍の作戰を容易ならしめた。其の功績は優秀のものである。

和田部隊は十月二十四日元氏に到着し元氏―贊皇―九龍關―春陽道を作業しつゝ西進の任務を受け十月二十五日午前七時三十分純屯南方小流に橋梁を架設したる後前進し南靈山附近通過の際野戰電信隊が前夜西龍門に於て敵の襲撃を受けたるの通報に接し、和田隊長の指揮を以て救援に赴き其の歸途午後三時四十分頃南靈山附近通過の際敵の敗殘兵と遭遇し、直に之を攻撃し交戦約四十分にして遂に敵を敗走せしめ十月二十六日午前七時三十分元氏を出發して贊皇に向ひ其間道路



補修作業を完了し午後二時十分頃贊皇北方槐河に達したる時氏は道路偵察のため前進を開始するや俄然贊皇北端城壁上より敵の小銃機關銃の猛射を受けた。然かし氏は之を物ともせず彈雨をくぐり敵前百五十米に前進した。此敵の現出に後方にありし我部隊は攻撃の爲前進して來た。氏は部下數名を指揮して敵を猛射し我が増援隊の前進散開を授護し勇戦奮闘して居たが偶々飛來せる敵の兇彈は氏の腹部を貫通し遂に惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏は曩に聖臺貯水池（北海道上川にありて貯水量六十六萬五千立坪満水面積五十一町歩一千七十町歩に灌漑す）を完成し水田經營者に對し永へに慶福を與へたる而已ならず昭和十一年九月アメリカワシントンに開催せられたる世界動力會議第二回國際堰堤會議に於て日本の代表論文の一として該工事を報告せられ、軍に従つては技術兵科として道路の修築橋梁の架設に關し専門的技術を發揮し迅速堅固に其任務を全うして軍の作戰に至大なる貢獻をなした戦闘に於ては勇敢なる指揮者として所謂八面六臂を遺憾なく發揮したが天無情にも此將來ある有爲の士を奪ふ惜みても尙餘りがある。併し氏の功績は學術史上

に將又皇軍戦史に偉彩を放ち水く人口に膾炙せらるゝと其に其忠魂は永久に生き護國の神として祀られ皇國を守り、又其遺族の多幸を加護するであらう。

氏は戦死即日工兵中尉に任ぜられ從七位に昇叙次で勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 長野 滿雄

氏は岡山縣笠岡町の人明治四十四年九月二十一日生れである。父を杉平母を長と稱し妻勝枝との間に一人の愛子博道がある。

氏は思想正順眞摯熱烈にして進で難局に當るの美德があつた故に到る處上司同僚及部下より愛敬を受けし天晴の青年將校であつた。大正十三年四月岡山縣笠岡商業學校へ入校昭和四年三月同校卒業。昭和六年十二月岡山歩兵第十聯隊へ幹部候補生として入隊昭和七年度秋季演習には、終始一貫奮勵努力し或は警戒勤務に或は連絡勤務に或は豪雨を意とせず徹宵事務に服し其意氣旺盛にして眞摯熱烈なる努力は近時稀に見る模範者としての留守隊長内山歩兵中佐より表彰状を附與された。氏は劍道練達の士にして昭和五年には大日本武徳會劍道初段を昭和八年には同貳段を昭和十年には同參段を昭和十二年六月には同四段を允許され戦死の報傳はるや五段を贈られた。氏は自宅に振武館道場を設置し館員及地方青年の指導に終始一貫の至誠を捧げた。

昭和十二年七月三十一日勇躍某歩兵隊へ應召直に赤柴部隊小隊長として北支戦線に赴いた。

八月二日乃至九月六日の間は津浦沿線の戦闘に参加したが八月二十日良王莊に到着するや揚柳青站の西北方約三里に在

る三慶陀嶺附近に約一ヶ營尙西南方約二里に在る當城にも相當の敵ありとの報に接し氏の所屬中隊は揚柳青站の警備に任じた。氏は第一小隊長として部下を督勵し克く其任務を遂行した。

八月二十一日揚柳青站の警備を交代して前進し、在七里堡の聯隊本部に到着すると第一大隊は東邊庄附近で苦戦中なり長野小隊は行李を護送し之を該部隊に交付し且中隊に復歸すべしとの命令を受けた。依て氏は廿二日夜糧秣彈藥を積んだ



大行李を護送し夜行軍をしたが途中の道路著しく不良なる上敵彈激しく飛來し行動益々困難となつた。氏は遂に彈藥糧秣を卸下せしめ大行李の人馬車輛を後退せしめた。明くれば廿三日午前五時突如敵兵約五百高梁畑の中に現はれ亂射亂撃を以て我に襲ひかゝつて來た。氏は逃る部下を制し好機の到るを待たしの一齊に輕機及擲彈筒の全威力を發揚して一瞬に敵に多大なる損害を與へ之を撃退した。爾後速に部隊を整頓し彈藥糧食は小隊全員を使用して分割携行せしめ所命大隊に之を交付し中隊に復歸した。思慮周密にして豪膽不敵の士ならではの斯る鮮かな行動は出來ない事である。

八月二十九日には中隊長馬杉大尉の指揮下に尖兵として前進し陳官屯附近の敵陣地を攻撃した。氏は中隊の左第一線となり克く部下小隊を指揮し勇猛果敢に陳官屯に侵入し續て之を追撃し呂官屯に向ひ前進中所属中隊は、本道の西方約六軒の胡家庄に到り所屬兵團の左翼を警戒し且孫門口大十八戸方面の敵情及地形を偵察すべき新任務を受領した。氏は奮勵努力同地の警戒及搜索に任じ任務を遂行した。斯くて九月三、四日の唐官屯附近に於ける戦闘参加となつた。

九月三日氏は左第一線中隊たりし第三中隊の左第一線小隊長として午後二時攻撃準備位置への前進を開始した。當時左大隊との連繫上氏の小隊のみは敵前四百米に突撃陣地を占領する事になつた。折柄其夜は終夜豪雨となり寒氣甚だしく殊に壕内に流れ込む水に依り腰以下を浸され、加ふるに敵は豫め周到なる射撃準備を整へ、小銃輕機迫撃砲を以て三方面より我陣地構築を妨碍すべく終夜擾亂射撃を加ふるのであつたから皇軍將兵の困苦と危険は察するに餘ありと云ふべきである。だが氏は危険を意とせず各分隊を巡視して工事を監督した。折柄飛來せる迫撃砲は、氏と部下川上との中間に炸裂した。氏は直に川上無事か。夫れはよかつた明日は我小隊は敵の突角主陣地に突撃するのぞ共に勇しく突撃しやうぞ煙草はあるか何に濡れて居るか俺のをやらうと火をつけてやつた。又他兵が寒さに身ふるいして居るのを見て皆身體を動かせ元氣がつくぞと勵まし夜明近き頃自己の乾麵麩を取出しさあ皆食べよと部下に頒け與へた。兵等は氏の温情に目頭の熱くなるを覺えた。

翌四日午前八時砲兵隊の第一次突撃支援射撃を開始するや中隊は一舉に起ちて躍進した。併し我砲兵の火力を集中せる突角陣地の敵は沈黙しありしも其兩側よりする敵の十字火は尙衰へず爲に第二次の突撃支援射撃も行はれた。氏は敵前五十米、彈雨の中に突撃に一の號令を下せば早や四、五米も第一線から進出して居た。傳家の寶刀は紫電を畫いて早くも突角に突入、斬る手は天下の劍豪、瞬く間に附近の敵兵は血煙あけて打斃れた。小隊全員の視線は暫し氏の勇猛無比の姿に注がれそれ等の生涯に深き印象を與へたのであつた。續いて怒濤の勢を以て突入する勇士等は頑強に抵抗する逐次の據點を奪取、敵敵を掃蕩して唐官屯南端に進出した。此突角陣地の攻防こそは彼我勝敗を卜する戰闘であつたが疾風迅雷の我が猛攻に抗し兼ね遂に全線瓦解敵は一舉退却の餘儀なきに至つた。

九月七日靜官屯南端の寺院高地の攻撃に於て氏は所屬中隊の左第一線小隊長となり午後三時より攻撃準備に着手した。

午後六時砲兵の突撃支援射撃開始と共に勇躍前進し右第一線小隊の攻撃進捗に伴ひ午後七時同高地を奪取し爾後同高地を確保して馬廠河の渡河攻撃を準備した。同月十日氏の所屬大隊は隣接大隊の馬廠河渡河攻撃に方り現在線に在りて支援射撃を行ふ事を命ぜられた。氏の所屬中隊は右第一線となり九日夜半より準備を整へたが當日は敵の小銃輕機並砲兵は氏の所屬部隊の陣地附近に猛射を加へ來りし爲戦死傷者を出す至つた。氏は此間壕内を巡視して補備工事を指導し又適時狙撃を命じて敵を斃した。正午稍前より敵の迫撃砲は氏の所屬中隊に集中して居たが氏は連絡の目的を以て中隊長位置に近づき來りし折しもあれ、敵の迫撃砲は連續三發同地附近に炸裂した。中隊長は左肩に受傷したが忽ち右手に呻吟の聲左手には中隊長殿やられましたと云ふ聲は正に氏であつた。此瞬間に兵三名即死、氏と兵一名は重傷外に中隊長以下數名は輕傷を受けた。中隊長は衛生兵をして手當せしめたるに氏は私の傷は浅いですと立上るを中隊長は之を制し後送せしめた。氏の受傷は砲弾破片の腹部貫貫であつた。氏は野戦病院に收容せられた時入院中の所屬大隊長が長野大丈夫かと尋ねれば隊長殿！チャンコロの弾には死にませんよと意氣軒昂たるものがあつた。腹部貫貫又は腹部貫貫で數日も長らへた者は殆どないのだが氏は一週間も旺盛なる意氣で生き國元へは傷急所外づれ心配なしと打電したが其親思ひの心根には並居る人々の眼頭を熱くさせた。死期の愈々迫るや聯隊長殿を始め各上官の方々によろしく、又戦友皆さんによろしく、軍醫殿並に看護婦の方々にも手數をかけました。お父さんお母さんには皆さんからよろしく御傳へ下さいと言ひ最後に手を高く擧げて 天皇陛下萬歳と唱へ十五日の夕暮近き五時頃從容として天津軍病院に劍豪長野は護國の神として神去つた。氏の上官部下は又と得難き勇將を失ひ切々の哀悼を氏の奮戦史と共に氏の兩親に宛て發信して來た。氏の奮闘は果然隣接大隊の渡河攻撃に至大なる効果を齎らし馬廠附近一帶の陣地崩壞の動機を作爲した。宜なる哉即日歩兵中尉に進級從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 山村 壽春

氏は島根縣松江市奥谷町の人にして父は歩兵中佐山村靜雄母を足代と云ひ其の次男として大正四年二月二十五日を以て生れ未だ獨身者であつた。資性濃厚篤實人格圓滿にして僚友との交誼厚く一面犯すべからざる氣魄を持し文武兩道に秀でゐた。昭和二年本郷富士前小學校を卒業して東京府立第五中學校に入學昭和七年三月同校を卒業し翌四月陸軍士官學校に入り昭和十一年同校卒業の上同年十月歩兵少尉に任官水戸歩兵聯隊附となつた。昭和十二年八月支那事變のため石黒部隊に屬し北支方面の征途に就き石黒部隊瓦斯防護係將校として部隊長の側近にあつて重要な連絡並に部隊長の作戰輔佐に任じ九月十四日十五日の永定河々畔北相各莊附近の戰闘に於て十四日朝所屬隊は即時追撃に決するや氏は各隊と連絡して其進撃を迅速ならしめ午前十時稍前部隊本部と共に渡河し午後四時馬公莊に進出同地を確保した。而して午後九時部隊は揚家屯附近に友軍救援に出發するや部隊長より馬公莊殘留者並に馬匹の整理を命ぜられ其任務完了の後翌拂曉部隊本部に追及した。次で拒馬河々畔北相附近の戰闘に於ては九月十五日午後十一時行動を開始し三十分後には熾烈なる敵側防火を冒して渡河し續て石黒部隊長と共に敵陣に突入し、更に本多大尉指揮下に軍旗を護衛して隣地區に突撃したが此時左前方より敵の逆襲を受けるや最先頭に立ちて敵中に斬込み數名を斬殺した。爾後本多大尉と共に軍旗を護衛して突入すると二回常に先頭に立ちて勇敢に奮闘し後軍旗を擁して部隊長の許に集結した。次で揚家屯西方軍橋占領のため前進せしが當時敵砲彈の飛來は猛烈であつた。此時氏は部隊長の命を受け歩兵半小隊機關銃一分隊を指揮して勇躍此敵砲彈下を前進し午前六時五十分軍橋の出口に到着して之を確保し師團主力の渡河を迅速ならしむる因を作つた。又九月二十一日二十二日に亘る大冊河々畔石頭村附近の戰闘に於ては部隊本部にあつて二十一日正午蘇庄を出發直に膝を浸す大濕地に遭遇した

が率先之を通過し大冊河に進出したところ水流二線あり何れも頭を浸す深さなりしが直に之を徒渉して前岸に至り先頭に立ち猛烈なる敵火を冒して丈餘の外壕を越え第一線に突入した。此時部隊長の命により第九中隊長に攻撃目標を示すため先行し確實に之を傳達して更に本部に追及せる時氏は部隊長が前方高地に於て傳令其他と共に苦戰中なるを知り氏は直に戰闘に参加し遂に敵を潰走せしめた。斯くて二十二日午後四時第十二中隊長加藤大尉が調山に於て負傷するや、氏は同



中隊長代理を命ぜられた。而して九月二十三日午後三時大隊長より戦利品を運搬し菅莊に到り大隊主力に追及すべきを命ぜられ北段灣附近より菅莊に向ひ前進中二十四日午前四時半菅莊部落に入らんとせる時忽ち數發の敵射撃を受け偵察の結果敵の車輛部隊が宿營中なるを知り氏は直に之を攻撃するに決し午前五時東天漸く明けかゝる時氏は中隊全員に輕裝をさせ敵を全く包圍して猛烈に之を攻撃潰滅せしめ午前五時四十分完全に菅莊を占領し部隊爾後の行動を大に容易ならしめた。本戰闘に於て敵三十二名を捕虜とし敵の遺棄死體七十同馬三十九、鹵獲品は馬二百三十五、牛七、車輛五十四、米四十

依メリケン粉四百五十袋、其他兵器材料多數であつた。十月十一日十二日の元氏附近の戰闘に於ては十一日午後八時所屬大隊が東張村に進出するため蕉堡村を出發郝村に通ずる道を京漢線路に向ひ前進中京漢線鐵道橋附近に敵陣地あるを偵知し大隊長は第九中隊に夜襲を命じた。此時恰も鐵道線西側より敵の一團喇叭を吹奏しつゝ我に向ひ攻撃し來る報あり茲に於て氏は直に大隊長に自己の中隊を以て對處せん事を乞ひ之が認可せらるゝや、氏は指揮班及び部下の一部を率ひ鐵道線

路西側に移動し偵察の結果鐵道橋近く敵陣地ありて至近距離より猛射を受けた。茲に於て中隊主力に逐次鐵道橋下を経て凹地に來るべきを命じたるに敵は程なく我に向ひ攻撃して來たので、氏は決然指揮班及び到着せる一部の兵を率ひ該敵に突入奮戦之を撃退し更に敵の第二線に突入して之を占領し爾後の突撃を準備中不幸敵の手榴彈前額部に命中し壯烈なる最後を遂げた。氏や年齢未だ若くして既に赫々たる武勳を奏し洋々たる前途に駿足を伸ばし得たであらうに聖戦の中道に玉碎せるは惜みても尙餘ある事である。されど人生限あり名盡くるなし氏の忠勇武烈は正に皇軍青年將校の精華であり又一般軍人の龜鑑であつた。其武功は皇軍戰史に輝き其名は千載の下に薫り英靈は永遠に生き 皇運を扶翼し奉るであらう。氏は即日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 山口 隆

氏は神奈川県高座郡新磯村磯部の人にして父保行の次男として大正四年三月五日を以て生れ性沈勇にして果斷信念強く實行の人であつた。劍道は初段に達し技益々神に入らんとして居つた。昭和二年三月新磯小學校を卒業直に縣立厚木中學校に入學同年七月見習士官を命ぜられ同年十一月歩兵少尉に任官し宇都宮歩兵聯隊附に補せられ同年十二月歩兵學校に入校を命ぜられ翌年三月卒業原隊に歸つた。昭和十二年八月支那事變のため坂西部隊に屬し北支方面の征途に上り山田部隊副官として早くも九月十三日、十四日に亘る、檢査鎮南方永定河渡河戰闘に参加した。當時所屬隊は右第一線となり前進したが攻撃前進迅速にして電話連絡續かず且つ右方及正面より敵の猛射を受けたが氏は大隊副官として危険を冒し隸下部隊及び部隊本部との連絡に任じ大隊をし

て有利なる態勢を以て戰闘を終始せしめた。續いて十五日南公由附近の追撃戰闘に於ては暗夜至近距離より敵の狙撃を受け危険極まりなかりしが氏は豪膽不敵にも立姿を以て大中隊間を往復し以て密接なる連繫を保持し殊に所屬隊が部隊本部より遠く隔離して進出せしに拘らず部隊長に刻々大隊の状況を詳報し次で大隊主力が南公由西北端に突撃を行ふや大隊本部の先頭に在りて前進し大隊長の區處を適切ならしめ以て突撃を容易ならしめた。更に十六日揚家屯附近拒馬河渡河戰闘



に於ては小銃彈及迫撃砲彈の雨下する間を先行し第一線渡河點にある工兵と連絡して大隊を誘導し次で第二線渡河を完了し直に攻撃前進に移つたが左右兩側よりする敵の十字火は熾烈を極め連絡皆無となりしも氏は敢然各中隊間を縱横に往復直ちに連絡を回復し以て大隊主力の戰勝を誘因し其後敵の逆襲に會し彼我混戦の狀を呈せし時も絶えず部隊本部に大陸の現況を詳報し以て部隊長の指揮を容易ならしめた。次で北義安の攻略及渡河戰闘に於て山田部隊は前兵として前進せしが十八日午後三時頃北義安を攻撃すべき部隊命令を受くるや氏は彈丸雨飛の間部隊主力及各中隊との連絡に任じ特に北義安

占領後河川偵察及前進路偵察を命ぜらるゝや勇躍之に當り迅速適切に其の任務を完了した。續いて九月二十一日二十二日に亘る王谷莊附近大冊河の戰闘に於ては二十一日所屬大隊は前兵として前進し午後三時大冊河東方獨立高地に敵隊を發見するや尖兵中隊及び半田小隊は獨斷之を攻撃した。此時氏は敵彈雨下の間を不敵にも汗馬を驅つて大隊長の意圖を尖兵中隊及半田小隊に傳達し大隊將兵をして其大膽に驚歎せしめ次で船上より大隊主力を以て

夜襲を敢行するに當つては常に大隊本部の先頭を前進し戦死傷者の出づる毎に動もすれば前進氣勢を阻害されんとする兵員を勇奮激勵し驅て第一線陣地に突入する際には第一線中隊との中間を前進し率先主力の突進を誘促し以て第一線陣地突破成功の因をなし更に同所に於て第二線陣地に對し突入準備中惜くも敵彈の爲め頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。氏は副官とし大隊長の計畫を補助し其實行に當りては率先挺身迅速適切なる行動を以て範を示し以て大隊將兵の士氣を振興し毎戦光輝ある勝利を博するに甚大なる素因を與へた。

氏や春秋に富み前途洋々其驥足を伸ぶべかりしに聖戦の中道にして遂に鋒鏑に斃れしは嵐に散りし蕾にも似て轉た痛惜を禁じ得ぬ次第である。さり乍ら人世限あり名盡くるなし氏が戦場を馳驅するや一隊の士氣恰も夕立に懸へる夏草の如く氏が神速機敏の連絡は所屬隊長の戦闘指揮を容易且適確ならしめ以て轉々たる戦勝に貢献せる所絶大にして其功績や皇軍戦史に異彩を放つものである。今や風發叱咤の雄姿に接する能はずと雖も其英靈は大天地に生き尙も皇國を守護し其名は萬世に芳ばしく謳はるゝであらう。

氏は即日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 小寺 俊 介

氏は兵庫縣神崎郡瀬加村の人にして明治四十三年一月十二日生れである。實父は三木正雄實母はさくと云ひ養父を誠之助養母をためと稱し妻婦美子との間に長男俊雄外二男三男つ愛子がある。昭和三年三月兵庫縣立姫路中學校卒業同年四月水産講習所漁撈科本科へ入學昭和七年三月同校卒業同年四月より京都市中央卸賣市場課勤務昭和九年三月家事の都合に依

り退職昭和十一年九月岡山縣水産試験場勤務農林技手に任ぜられ判任官三等待遇となつた。兵役關係に於ては昭和八年度歩兵科幹部候補生として歩兵第三十九聯隊に入營同年十一月除隊昭和十一年三月歩兵少尉に任ぜられた。氏は性快活磊落にして世人の愛敬を受けて居た。殊に學生時代は運動を好み且級友の人氣者であつたが水産講習所入所以來は特に水泳部に入り相當の手腕を發揮した。氏は文學にも趣味を有し話題が豊富で話術にも長じ談論風發自ら諸人の傾聽する所となつた。北支事變起るや昭和十二年七月二十一日召集令狀に接し鳥取歩

兵聯隊に應召勇躍征途に就いた。斯くて九月七日より同月十二日迄馬廠附近の戦闘に参加し當初大隊は豫備隊として控置されたが第一線部隊の突入後は附近殘敵の掃蕩を命ぜられ氏は部下小隊を適確機敏に指揮し特に左翼の攻撃を擔當し所屬中隊の任務達成に貢献せる所大であつた。

九月十七日姚庄子附近の攻撃に方りて氏の所屬たる第四中隊は右搜索隊左第一線中隊として石家樓附近に在りて攻撃の目的を以て運河左岸地區の敵情地形を搜索中であつた。時に右搜索隊右第一線中隊たりし第三中隊は大満子營に位置し岡村將校斥候を以て早林庄姚庄子間の道路偵察の爲該地區を行動中であつたが姚庄子附近の敵より狙撃を受け死傷者を出し之が收容不可能となつた。そこで屍體收容に關し氏の所屬中隊に援助を乞ふた。氏は所屬中隊長の命に依り屍體收容に任じ且積極的に敵情地形を偵察し姚庄子攻撃に方りては第一線小隊を指揮し膝を沒する濕地を意とせず敵の警戒不十分なる方面より敵陣地に突入して之に大打撃を與へ敵陣地瓦解の動機を作つた。



所屬隊は又同年九月十三日より同月二十六日迄甞縣附近の敵陣地を攻撃した。此攻撃に方り氏は左搜索隊の李家樓攻撃の機運を醸成し其攻撃實行を一日早からしめた。即ち九月十八日午後一時を期し右搜索隊を以て早林庄姚庄子を左搜索隊を以て李家樓を攻撃する如く計畫せられてあつたが氏の所屬中隊の攻撃成功に依り九月十七日より攻撃を開始するを得たのである。九月十八日午後六時より氏の所屬聯隊は高官屯附近に於て北部李家樓の敵陣地を攻撃中であつたが南部及北部魏庄の中間地區の運河堤防に構築しありし敵の掩蓋機關銃座よりする側防火に依り攻撃意の如く進捗せず苦戦状態となつた。氏の所屬大隊長は同掩蓋機關銃座及森林中の敵を撃滅すべき事を氏の所屬中隊に下令した。當日午後五時四十分所屬中隊は魏庄子に位置し其前方約七百米に散在する諸部落の敵情搜索中であつたが氏は部下七名を指揮して將校斥候となり約百米前方に位置せる友軍歩兵砲の掩護部隊とも連絡し運河堤防に沿ひ前進中其行手約七十米前方にありし獨立家屋に設けある銃眼より俄然敵の小銃及チェツコ機銃の猛射を受けた。氏は速に前方堆土を利用して一時敵弾を避け部下に指示を與へ次の行動に移らんとする一刹那憎くヤチェツコ機銃の一弾は氏の右肩より左側胸部を貫通しドット許りに打倒れた。部下等は敵の亂射の中に氏を凹地に運び手當を施し小隊長殿と呼べば只莞爾として背き僅に兩手を舉げんとしつゝ絶え入る聲で萬歳を唱へ瞑目した。時に九月十八日午後六時三十八分暮色暗然半月淡く宏寥の野を照らし所屬大隊長を初めとし慈父と慕ひし部下等哀愁の裡に護國の神と化した。氏を失ひし所屬中隊は此憎むべき敵に對し憤恨息み難く獅子奮迅の勢を以て之を撃破したが意外にも中隊當面の敵兵力は五六百名の多數に及んで居た。氏は李家樓攻撃の半ばたりし南部魏庄子附近の偵察戰に於て殉難の華と散つたが聖戰に参加以來部下及上官の信望を擔ひ常に沈勇果斷卒先範を垂れ以て一隊の士氣を作興し戰捷の大なる礎石となつた。

即日歩兵中尉に任じ從七位勳六等に叙し旭日章並に功五級金鷄勳章を授け賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功四級 佐藤 武文

氏は大分縣宇佐郡宇佐町の人大正二年十月二日生れである。父を求己母をキヨと云ひ氏は未だ獨身であつた。氏は家庭の人としては孝悌至らざるなく軍人としては勸諭を深く厚く奉戴し盡忠報國の信念眞に燃ゆるが如きものがあつた。曾て陸軍士官學校本科卒業式の分列行進に於て顔色蒼白となりし故當時式を拜觀せる父が歸宅後其理由を尋ねたる所氏は大元帥陛下臨御の下に卒業の光榮に浴し咫尺に龍顏を拜し奉り心底深く一死奉公を期しましたので多少顔色も變つたかも知れませんが答へた一事を以ても其一端を知る事が出来やうと思ふ。

氏は大正十五年四月埼玉縣立川越中學校へ入校昭和四年四月朝鮮平壤中學校へ轉校昭和六年同校卒業昭和七年四月陸軍士官學校豫科へ入校昭和十一年六月同校本科を卒業し同年十月歩兵少尉に任じ歩兵第五十九聯隊附に補せられた。昭和十二年八月二十六日同聯隊旗手として出征聖戰に参加するに至つた。

氏は軍旗の尊嚴保持と之に依る將兵の精神教育には絶大なる努力を拂つた。如何なる困難な行軍時でも軍旗に對し敬禮を怠り或は不作法な態度をなす者あらんか氏は大聲叱呼之が矯正を怠らなかつた。之が爲師團内の將兵就中輻重特務兵の軍旗に對する態度が一變した。北京榆堡鎮間の炎天下の強行軍に於て落伍者續出路側に群をなし倒れある状態を目撃せる氏は軍旗に後るゝ奴があるかと勵聲一番志氣を振作した。氏は豫て足關節を痛め疼痛を感じて居たが常に英氣潑刺一隊元氣の樞軸となつて居た。でも夜毎に痛いと言ひ翌朝之を告ぐるや不覺なりとて爾來寢言にも口にせなかつた。其意氣や秋霜烈日の慨ありと云ふべきである。内地出發時氏は兩親の現住所に近き大官驛を通過したが列車通過の時刻をも秘し遂に家族の誰も見送るを得なかつた。蓋し氏は人一倍情に脆く涙なしには別れ得ぬ性格であるから人に見られて誤解

を招くを恐れた爲である。

昭和十二年九月十三、四日檢査鎮南方永定河の渡河戦闘に於ては聯隊旗手として参加し敵彈雨飛の中を威風堂々として渡河し軍旗の森嚴を保持した。同月十六日の兩日は拒馬河畔楊家屯附近の戦闘に参加した。渡河に方り近距離より猛烈なる側射を受けたが氏は毅然として軍旗を奉じ部隊長と共に折疊舟に搭乘して渡河した。折しもあれ渡河掩護隊たりし第



二大隊は敵の近距離よりする猛射と逆襲を受け苦戦に陥つたが第六中隊長成島中尉戦死するや同中隊の將兵の士氣衰へ氣味となつた。之を目撃した氏は即時第六中隊長を命ぜられん事を懇請した。而かも聲淚共に下り先輩の仇を討たん事を嘆願したのである。部隊長も氏の赤誠と友情を汲み第六中隊長代理を命じた。氏は勇躍其任に就き先づ自ら堤防上に仁王立となり大聲叱咤敵の彈丸など命中はせぬぞと士氣を鼓舞した。次で單身敵中に入り名刀兼定の一閃するや忽ち敵兵八名を血祭りにした。之を眺めた部下中隊は大早に夕立を得たるが如く蘇生し氏を中心忽ち強固なる團結が出来戦力を挽回した。近代戦に仁王立と笑はゞ笑へ戰場心理は机上の空論を以て律し得べきものではない。士氣阻喪した部下を生かす爲に氏の探つた當時の行動こそは崇高無比の垂範示教でもありカンフル注射でもあつたのだ。

同年九月十八日平漢線西側關利莊の殘敵掃蕩戦に於て氏は尖兵中隊長となり殘敵の關利莊に蟻集しあるを知るや直に之を攻撃した。敵は土壁に據り手榴彈を投擲して頑強に抵抗したが氏は率先部落に突入し勇猛果敢鬼神の如く奮闘し一兵を

も餘さず捕獲殲滅し以て本隊の前進に毫も滯滞なからしむるを得た。氏は剣道にも練達し當日の如きは戸毎に敵を求め自ら殘敵を斬倒したと云ふ事である。氏は本戦闘に於て初めて三名の部下を戦死させたが悄然として其傍に立ち涙ぐみつゝ鄭重に弔らうてやつた。部下皆其徳に感泣し良隊長を得たと喜んだ。爾來數日間砲兵隊の掩護に任じ九月二十一日より大冊河の渡河戦に入つた。敵は右岸に堅固なる陣地を構築し防備到らぬ隈もなく我が軍を河中に撃滅すべく企圖して居た。所屬部隊長は二十二日午前二時より敵陣地を夜襲せんと欲し第一大隊に之を命じ氏の中隊は第一大隊に跟随して渡河し渡河點の確保を命ぜられた。氏は渡河前河岸に中隊を集結し任務に基く覺悟を示し渡河後の各小隊の部署を明示した。陰曆八月十八日の皎々たる明月は中天に懸りて晝をも欺く明るさ、所詮夜襲に適せぬ夜である。だが躊躇逡巡しては戦機を逸する此場合、將兵は成島前中隊長の弔合戦は此時と許りに意氣將に天を衝き命令一下河中に躍り込んだ。氏は陣頭に立ち後れるなど激勵し勇敢なる渡河を開始した。我が企圖を察知せる敵は果然猛烈なる十字火を浴せかけた。河中に斃れる者も刻一刻に増加して来る、最初は左程でもなき水深が敵岸に近づくに従ひ深さを増し遂に頸に及びやがて足が河底にとどかぬ處も出來て來た。氏は大聲叱咤部下を勵まし河岸に取りついた。河岸より約五十米許り進出して右第一線に第二小隊を、左第一線に第三小隊を配置し散兵壕を掘開させた。敵は小銃機關銃迫撃砲を以て我を猛射し見渡す限り前面は銃火の光、附近の地形は平坦な砂地彼我中間地區には僅に疎散な黍畑が見ゆるのみであつた。敵彈は全く急霰の如く轉た凄慘の光景を呈した。其中に氏は嚴然仁王立となつて指揮を執つて居た。部下は心配して中隊長殿！ 姿勢を低くと諫言すれば俺は斷じて躡まないのだ、お前等は大事を取れよと情をかけ千秋雪を頂く高峯の颯爽として夏空に聳ゆるにも似て神々しかった。刻一刻損害を増す許りではあるが敵は我中隊の氣勢に吞まれてか將た兵力を過大に見て取つたか、逆襲さへ敢行し得なかつた。氏は本來の任務が渡河掩護で本隊の渡河完了迄は敵陣地に突入も出來ずモウ少し前進せやうかなと獨語し

つゝ前地の偵察でも思立ちしか前地へ進出した。間もなくオーイ誰か来いと云ふ聲が聞えた。聲に應じて二三の部下が走り寄つて見れば腰股の邊を撃たれて鮮血淋漓となつて居た。氏は部下の渡邊准尉を認め渡邊々々一歩も退るなと力強く要望し中隊は遂に夜明迄頑張つた。大隊主力は積々渡河して敵陣地を攻撃し完全に之を攻略した。氏は下腹部より兩股にかけ無数の機關銃弾を受けて出血甚しく拳銃を捜がす模様であつたが次第に昏睡状態となり擧手の禮をなしたるまゝ絶命した。本戦闘は保定戰最初の戦にして又最後の戦でもあつた。僅かに二個大隊の兵力を以て保定陣地の左翼鎮鎗たる王谷莊堡の堅固なる設堡陣を奪取し得保定全線の瓦解を誘致したものである。氏の中隊が翌朝敵陣地奪取後中隊附曹長の許に集る者斥候を除き僅に十二名と云ふ大激戦であつた。斯程までに中隊の團結を鞏固にし全軍戰勝の途を拓き得たるは實に氏の忠誠義膽の賜であつて眞に軍人の龜鑑として戦史に異彩を放つべきものである。氏の中隊が拔群の武功に依り時の軍司令官より感状を授與せられて居るのは誠に尤ものである。

氏は即日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し旭日單光章並に破格の功四級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳五等功五級 櫻井晴吉

氏は群馬縣佐波郡采女村の人にして明治廿五年三月十六日生れである。亡父は山口三代吉亡母を同ひさと云ひ養父を和三郎養母をつたと稱し妻むめとの間に一男四女の愛子がある。資性沈着寡黙にして言行一致難局に當り益々勇往邁進の氣概を持つて居つた。明治四十年三月新里小學校高等科を卒業後直に山田郡大間町立普通學校へ入校し明治四十三年三月同校を卒業した。同校は後に乙種農業學校と改稱されて居る。氏は平素酒煙草を用わず讀書好學の士であつた。

大正元年十二月現役志願兵として高崎歩兵聯隊へ入營し爾後下士官を志願し大正三年十二年歩兵伍長に任官し精勵恪勤の結果昭和四年十一月歩兵少尉に異進し待命歸郷となつた。在職間大正四年乃至九年戰役の功に依り勳七等青色桐葉章を賜はり昭和四年濟南事變の功に依り勳六等單光旭日章を賜はつた。歸郷後は采女村役場書記に就任し同村在郷軍人分會副長或は分會長に歴任し又同村實業補習學校囑託等を兼務し同村の公共事業に貢献する所甚大であつた。



支那事變勃發するや森田部隊に應召し勇躍江南戰線へ出動した。

出征に方り部下に訓示して曰く諸士！遺言せんと欲せば今日認めよ一旦戰場に臨まば生還を期すべからずと述べ又陣中より長女久子に宛て弟姉と共に母へ孝行を盡し國民としての務を全うせよと書き送り一死報國の決意を醇々子女に訓ゆるのであつた。昭和十一年十一月十四日乃至十六日の廣陳鎮及吉字圩附近の戰闘に於ては戰傷者の護送を命ぜられ道路泥濘膝を没し且屢々敗殘兵の狙撃を受けたるに拘らず克く部下を掌握し自ら先頭に立ちて歩兵部隊の傷者七名を吉字圩より在大平橋第二野戰病院に故障なく擔送し十一月下旬金山衛より嘉興までの追撃に於ては旬日の降雨に言語に絶する泥濘の惡路と敗殘兵の狙撃とに依り前進意の如くならざりしが氏は克く部下を掌握激勵し連日の強行軍を續行し以て軍全般の要求に即應せしめた。十一月二十五日乃至十二月七日の嘉興より南京間の追撃戰闘に於ては漂水に於て歩兵部隊の傷者を擔送し又部下小隊の南京攻略の諸準備を適切に指導し十二月八日將軍山附近の戰闘に於ては擔架第二中隊に屬し擔架五組を指揮し歩兵部隊の傷者收容に任じたが朝來彼我の銃砲聲

熾にして敵砲は時々所屬中隊所在の附近に落達炸裂した。午前八時半頃商家庄に編帶所を開設せらるゝや氏は部下要員と共に決死衛生隊となり商家庄東方約一軒の高地に進出し更に敵彈雨飛の下を率先挺進して第一線歩兵の傷者收容を指揮中午前十時半頃不幸にして敵彈飛來腹部に數彈を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏は曩に西比利亞出兵に際し浦鹽ハバロフスク、ブラコエチエンスク、黒河に駐屯して警備の重任を果たし又滿洲駐劄間北支の時局に關聯し旅順青島濟南に駐屯して忠勤を擧んで今次事變には衛生隊小隊長として江南に活躍し以て極東平和建設の尊き犠牲となつた。氏の功績や亦廣汎なりと云ふべきである。而して氏の信念たる一死報國の至誠は到る處に困苦缺乏に堪え彈丸雨飛の下克く部下の師範となり衆心を打つて一丸となし偉大なる功績を残した。寔に是れ軍人の龜鑑であり芳名は其名の如く千古の大和櫻と咲き匂ふべく其英靈は不滅に生き皇國及一家の守護神として活躍すべく殊に五人の愛子が胸には深くも盡忠報國の魂を植ゑつけ遺族の各々に福祉を授け與ふるであらう。

氏は即日歩兵中尉に進級し次で從七位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 三笠 茂

氏は神戸市兵庫區羽坂通三丁目の人にして明治四十四年四月生である。父を高部若太郎母を同ちそと云ひ養父を小三郎養母をさくと稱し妻裕世との間に侑一滋子の二愛子がある。資性明朗快活にして責任觀念強烈實父母並に養父母に仕へて孝心厚く弟妹に接して亦慈愛を垂れ自ら修養を積みて豊かなる人格を涵養し知己朋友無言の裡に其徳に感化せらるゝの風格を具備して居つた。大正十三年三月甲府尋常小學校を卒へ昭和四年三月縣立甲府中學校を卒業し三笠家の養子となつ

た。其の在學間は成績常に優秀にして運動を好みフクビー選手として名高く又文學にも趣味を有し古書古畫の氣品あるものを賞美し自ら俳句をも詠し書にも亦堪能であつた。而して妻帯後に在りては益々家庭圓滿、衆の模範となり舊友を善導する所多かつた。次で昭和八年六月以降神戸合同運送會社に勤務して居た間に同年十二月幹部候補生として平壤歩兵聯隊へ入隊翌九年十二月除隊昭和十二年三月歩兵少尉に任官次で正八位に叙せられた。



支那事變勃發するや森本部隊へ應召し昭和十二年八月下旬勇躍北支戦線へ出動した。所屬部隊は十月中旬石家莊より正太線に沿ひ前進したが氏は梶原中隊第三小隊長として娘子關の戦闘に参加するに至つた。即ち十月二十三日午後六時第一線敵陣地の奪取を命ぜらるゝや薄暮を利用し且部下を激勵掌握し敵の猛射を意とせず率先敵陣地に近迫し遂に壯烈なる突撃を敢行して敵を粉碎し第一線陣地を占領した。此勇敢機敏なる陣地攻略はやがて大隊の駱駝灣への進出を迅速ならしめ以て敵の翼を包圍し部隊主力の戦闘を著しく有利ならしむるに至つた。斯くて天嶮娘子關の堅陣を突破し石門に陽泉平等の山岳地帯を踏破し同月廿五日には駱駝山を占領し二十日には平定南方の北陽勝に進出した。十一月二日氏の所屬大隊は左縱隊となり太原附近敵の背後に向ひ前進し所屬部隊は其尖兵中隊として大隊主力の前方約三百米に位置し北陽勝を出發したが正午頃家村西南方高地に達するや前面に敵陣地あるを知り攻撃に決し午後一時二十分より攻撃を開始した。氏の小隊は當初第二線小隊であつたが地形は谷地深くして所屬中隊の戦闘地域は恰も敵陣地の正面なりし爲敵彈の飛來烈しく



前進意の如くならず爲に中隊長代理荒巻少尉は氏の小隊を中央に増加し一意攻撃を續行した。氏は勇躍第一線に進出し敵彈雨注の中を物ともせず大聲部下を叱咤激勵率先敵陣地に肉薄し午後四時二十分頃各小隊は連繫を保持し敵陣地至近の距離に接近するを得た。氏は陣地直前の死角を利用して部下を集結して態勢を整へ突撃を準備した。此時敵は頻りに手榴彈を投擲し氏の身邊は濛々白煙に蔽はれたが氏は平然として午後四時三十分抜き放ちたる軍刀に夕陽を受けつゝ吉田軍曹と先陣を争ひ敵陣に突入した。突如足許に炸裂せる手榴彈の爲其破片に依り胸部を貫通され氏はどつと打倒れた。直後を進みし臨一等兵が抱き起せば敵陣地は取れたかとのみ連呼し尙も部下を指揮せんと起たんとしたが力及ばず僅に唇を動かして陛下の萬歳を唱へ午後五時頃戦場の華と散去つた。部下一同は小隊長を討れて怒髪天を衝き仇敵とばかり獅子奮迅の勢を以て敵兵を粉砕し氏の絶命時には第二陣地に突入し之を潰走せしめた。此勇猛果敢なる攻撃と其戦果はやがて所屬大隊の光輝ある戦勝の主因となつた。

氏は第五次補充として石家莊出發前に着任せる者であつたが氏の人格は忽ち小隊全員崇敬の的となり氏の壯烈勇敢の行動は所屬中隊の志氣振作の中堅であつた。あゝ氏の偉大なる功績、崇高なる其犠牲的精神は眞に是れ皇軍青年將校のみならず又一般軍人の範疇であつた。今や風發叱咤の英姿に接する能はずと雖も其功績は皇軍山西戦史に異彩を放つべく其名は大和櫻と共に千古に瀾はるゝであらう。而して氏が英靈は永世に生き護國の神となり又一家の守護神として其繁榮を加護すべく殊には愛子の胸に生前同様限りなき慈愛を注ぎ純忠報國の魂を刻みつけるであらう。

氏は即日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵中尉從七位勳五等功五級 島田茂助

氏は埼玉縣比企郡松山町の人にして明治三十八年八月十五日生である。父を多市郎亡母をつると云ひ妻きんとの間には未だ愛子がなかつた。大正三年三月村立官前小學校高等科を卒業し大正八年三月村立官前實業補習學校を卒業した。資性

正純剛毅にして體軀堂々如何なる難局をも克服すると云ふ風格であつた。又明朗快活にして友情に厚く義侠心に富み出征に當りては母校官前小學校に校旗一旗を寄贈せるが如き氏の性情の一端を物語るものである。大正九年十二月現役兵として騎兵第十八聯隊へ入營し逐年其英俊を認められ累進して昭和十二年八月騎兵少尉に任ぜられた。

支那事變勃發するや氏は安田部隊に屬し勇躍北支戦線へ出動した。斯くて昭和十二年九月中旬永定河々畔中公田附近の戦闘に於ては小野大尉の指揮下に第三小隊長として尖兵中隊に屬し午後三時四十分尖兵小隊が公田の敵を攻撃中なるを目撃するや機を失せず疾風の如く其左翼方面より敵の退路に進出し敵に多大なる損害を與へ之を潰走せしめた。其勇敢機敏なる行動は本戦勝獲得に至大なる素因を與へたものである。平漢線松林店驛附近の戦闘に於ては九月十六日松林店驛破壊に方り中隊の第一線中央小隊として暗夜地理不明の中を停車場に向ひ敵守備兵を奇襲し之を掃蕩したる後同地を確保し破壊班の作業を掩護した。此際氏の豪膽沈着にして果敢なる行動は克く掩護隊の



任務を達成し延いて所屬部隊の任務達成の主因となつた。翌十七日は松林店附近の敵陣地に對し第一線小隊として午後二時より攻撃を開始したが氏は勇猛果敢に敵に肉薄し交戦僅かに三十分にして之を潰走せしめた。爾後平漢線西側地區東西劉附近の敵を撃破し九月二十一日大冊河小曲城附近の戦闘に参加するに至つた。

當日氏の小隊は安田部隊長の直轄指揮となり氏は將校斥候長として大冊河の河川偵察及對岸の敵情搜索を命ぜられ欣然として午前十時五十分出發第一線部隊の掩護下に敵彈雨飛の中を豪膽沈着に或は叢に伏し或は水中に匍匐潜行して對岸に達し具さに所要の偵察を完了し歸還の途偶々敵の狙撃する所となり腹部首貫銃創を負ひ一時顛倒せるも豪氣なる氏は露出せる腸を自ら抑へ部下に扶けられつゝ安田部隊長の許に至り詳細報告を終り萬歳を三唱遂に瞑目した。此報告は部隊の任務達成上極めて貴重なる情報となりしのみならず更に上級部隊主力の運用を適切ならしむる素因ともなつた。氏の慧眼は克く敵機を捕捉し氏の豪膽機敏の行動は克く難局を打開して毎戦殆ど殊勳を奏した。而して其絶命直前の言動たるや陣中稀に見る豪勇壯烈なる最後にして鬼神も三舍を避くる絶倫の氣力であつた。氏は昭和七年習志野の馬術大會に於て一等を獲得し劍道に於ても實力三段の劍豪であつたと云ふ事である。而して天津より夫人宛の最後の書簡には「之から汽車で出かけるが何處へ行くかわからぬ有り丈の力で御國の爲に働く」と書き送つて居る。忠勇武烈とは氏の全貌そのまゝに當嵌るべき言葉で其勳功たるや皇軍戦史に特筆すべき光華であり天晴皇軍將校の魁傑である。前途有爲の青年將校を聖戦の半に喪ひしは國軍の爲痛惜するを靜觀せば生きても天地は我等の住家である。氏の英靈こそは正に永世の大生命を新に授かつたもので國を護り家を守り又郷土を淨化すべき偉大なる靈に生くべきは勿論氏の芳名は千載に傳へ大和櫻と咲き匂ふであらう。

氏は即日騎兵中尉に進級し次で從七位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級

生形藤太郎

氏は栃木縣上都賀郡足尾町の人にして實父を庄次郎實母をヂウと稱し明治三十年六月十七日を以て生れ後ち生形トクの養子となり妻ミシとの間に愛兒美代子を擧げた。氏は資性濃厚篤實修學の志深く明治三十九年四月群馬縣山田郡梅田村小學校に入學爾後學術優秀の故を以て前後三回に亘りて賞状を授與され同四十四年三月同校卒業後は家庭に在つて農業の手助けをなし同四十五年足尾銅山工作課電氣科技術見習として採用せられ電話に關する勤務を擔當し斯くて大正六年十二月徴兵として歩兵第二十七聯隊留守隊に入營直ちに西比利亞に出動翌七年十一月一等卒八年八月上等兵に進み下士志願をなし合格して同年十二月伍長に同九年十二月軍曹に進級し大正四年乃至九年戦役の功に依り勳八等に叙せられ次で同十一年七月より翌十二年八月まで陸軍歩兵學校に分遣せられ歸隊後十一月聯隊本部附次で十三年五月第二大隊本部附を命ぜられ同十四年四月曹長に任じ機關銃隊附となり昭和四年八月准尉に任官同六年六月退職同八年十一月以降足尾銅山實業學校に教諭として服務して居た。

氏は皇室尊崇、敬神の念篤く殊に郷土古峯神社を深く信仰し又克く軍人たるの本分を守り心中常に一死の奉公を口に居た程であつた。

今次支那事變勃發するや氏は昭和十二年八月を以て應召坂西部隊に屬し欣然として北支方面の征途に就いた。やがて九月十三日より十四日に亘る永定河畔胡林南方地區の戦闘に於ては氏の所屬中隊は第二線として敵の火制下に永定河を渡河し後第一線として勇敢なる攻撃を行つたが、氏は當時中隊の指揮班長として熱心中隊長を輔佐し其命令意圖を各小隊に徹底せしめ大に中隊長の指揮を容易ならしめ翌十五日より十六日に亘る拒馬河河畔北相附近の戦闘に大隊長酒井少佐の指揮

下に屬し中隊の人事掛及指揮班長として之に参加し先づ十五日午前十時より敵陣地の攻撃に移り氏の中隊は左第一線となり攻撃した。當時敵の重機銃及迫撃砲は猛烈であつたが氏は指揮班長として克く中隊長輔佐の任を盡くし就中午後四時より全中隊の強行渡河に際しては砲兵の援護未だ充分ならざりしに拘らず僅少の發煙彈を巧みに利用して中隊の渡河を容易にし、渡河困難なる状況下に各小隊間の連絡を確保し攻撃間敵の掩蓋機銃位置を看破し之が破壊に關する意見を



中隊長に具申し中隊長の戰闘指揮を容易ならしめた其功績は偉大なるものであつた。斯くて中隊第一線は着々攻撃進捗したが敵に近迫するに従ひ敵の火力は愈々熾烈となり中隊の右第一線小隊は一時攻撃意の如くならず、之を見た氏は第一線小隊間を疾驅し其連繫を圖り以て該小隊の前進を誘起し中隊は死傷續出せしも各小隊克く連繫し勇猛果敢に攻撃し敵に近迫して其火力を最高度に發揚した。此時氏は目敏くも敵兵動搖の色あるを看破し中隊長に報告し中隊は全力を擧げ午後四時五十分敵陣に突撃し尙も敵に追尾して北相東側に進出せんとした。然るに其際不幸氏は一度に敵の數彈を受け遂に壯烈

なる戦死を遂げた。

噫氏今事變に出征し北支に其足跡を印して僅かに三旬にして拒馬河々畔の花と散る、誠に痛惜に堪へず然れども此の一戦たるや大勝克く涿州平野の敵死命を制する素因を作したるものにして氏が左第一戦中隊の指揮班長として熱心中隊長を輔佐し各小隊の連繫を確保し中隊長の指揮を容易ならしめた力與つて多きに居り其の功績や頗る偉大にして永く聖戰史上

に輝くものと謂ふべし。

今や再び氏の英姿に接せる能はずと雖も尊皇敬神の念敦厚なりし氏の英靈や永く護國の神座に鎮まり東亞恒久の平和並に遺族の福祉に對して祐を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に任じ正八位に叙し次で勳六等單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵少尉正八位勳六等功五級 池田正夫

氏は岡崎市連尺の人にして父を銀太郎母をなかと稱し大正四年四月二十九日を以て生れ未だ獨身であつた。資性濃厚而も進取の氣象に富み亦孝順克く父母に仕へ悌愛克く弟妹を指導し誠に善良なる末頼もしき青年であつた。大正十一年四月三重縣宇治山田第三尋常高等小學校に入り昭和三年三月卒業次で宇治山田中學校に入學同五年十月家事の都合に依り愛知縣岡崎中學校に轉校同八年三月同校卒業半歳を経て同年九月愛知縣廳土木部道路課高岡直營所に勤務し十年十二月現役兵として騎兵第三聯隊留守隊に入營することゝなつた。斯くて氏は同聯隊第一中隊に編入同月直ちに滿洲駐屯の爲め渡航し翌十一年三月騎兵科幹部候補生を命ぜられ同年五月滿洲より歸還し八月伍長に次で十月軍曹の階級に進められ十一月幹部候補生終末試験に合格の上退營し再び愛知縣廳土木部道路課に勤務し十二年一月名古屋電氣局經理課に轉勤同年七月見習士官として勤務演習召集に應じ八月除隊せしが幾何くもなくして九月支那事變の爲召集せられ十月星部隊に屬して上海方面の征途に上つた。

昭和十二年十月十九日より二十七日に亘るかの大場鎮附近の戰闘は實に氏の初陣であつたが當初氏は嚴家巷附近に在つ

て各種の警戒勤務に従ひ十月二十七日蔡家橋附近に於ては左第一線第三小隊長の指揮下に屬して午後一時揚家橋出發同二時戰鬪を開始し午後九時三十分當面の敵を撃退し無名タリク南岸の線に進出し得たるを以て部隊は一先づ死傷者の處置を済ませ更に陳衛巷に兵力を集結した。氏の所屬小隊は初めは豫備隊であつたが中隊の主力が敵前二〇〇米附近に進出せし時第一線に増加を命ぜられ氏は彈丸雨注の下克く部下を掌握指揮して迅速果敢に揚家橋南端に進出した。此頃より敵火は愈々熾烈となり死傷者續出し中隊主力の前進困難に陥らんとしたが氏の小隊は剛膽にも頑強に抵抗する敵陣地を一舉撃破して無名タリク南岸に進出し中隊主力の攻撃を容易ならしめ更に十一月九日より十五日に亘る除經鎮、韓家橋、青浦、崑山附近の戰鬪に於ては中隊は九日大吳橋出發蘇州河を渡り敵を追撃した。此時氏は第三小隊長として之に當り十日除經鎮附近の戰鬪の際は右第一線小隊長として適切に部下を指揮し勇敢に攻撃前進し中隊の戰鬪を有利に進捗せしめ爾後續いて敵を追撃し更に十一月十六日より二十六日に亘る支塘鎮、梅李鎮、揚舍附近の追撃戰に在りては降雨連日泥濘乘馬の四肢を埋没し馬腹屢々地面に達し而かも幅而狭小なる惡路を強行した。此間氏は克く部下小隊員を適切に指揮して途中事故を生ずるも速に之を處理し遲滞なく前進し以て中隊長の指揮を容易ならしめ又十一月二十五日揚舍營附近の戰鬪に於ては氏の小隊は敵陣地左翼方面に進出し敵火を冒して當面の敵陣地の情況を搜索する等適切なる指揮を以て奮戦克く善處し斯くて中隊は周莊鎮附近に位置し定山附近の敵情地形偵察に當りしが此間氏の小隊は將候斥候として活躍し又江陰南方より攻撃に當りつゝありし歩兵部隊との連絡に任じ敵火の下勇猛果敢而も判斷適切にして最も迅速に連絡の目的を達成した。越えて十二月四日より十三日に亘る南京を目指しての追撃戰及南京攻撃に當つて中隊は六日江陰東方王村附近出發五日間の強行軍により常州天王寺を経て岔路口に到り當面の敵情を搜索し十一日午後六時現地出發敵の退路を遮斷する目的を以て紫金山北側を過ぎ下關に向ひ前進したが此間氏は依然第三小隊長として中隊長山野大尉の指揮下に屬し愈々十

三日仙鶴門附近の戰鬪となるや午前一時三十分行動を開始し夜襲し來る敵の一線隊を撃退して仙鶴門西方三叉路附近を確保し黎明を待つて攻撃前進午前七時三十分其西方高地に據る敵を撃退し同地を占領尙も附近の掃蕩を行ひ午前九時全く敵影を認めざるまでに奮闘を續けた。而して氏は最初中隊長より徒歩集結を命ぜらるゝや小隊を適切に部署し迅速に諸準備を整へ豫定の地點に集結しやがて前進に移るや左第一線小隊長として抜刀勇姿堂々部下の士氣を鼓舞しつゝ敵を近く引つけ次で中隊長より突撃の號令あるや挺身先頭に立ち敵中に突入奮戦格闘遂に敵を撃退し尙も續いて追撃せんとしたる際不幸頭部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏や年齢僅かに二十三歳大場鎮より長驅追撃南京攻略戰開始に至るまで不屈不撓の意氣を以て終始奮戦力闘を續け其の最後仙鶴門の激戰には寡兵克く衆敵に對し率先勇敢なる突撃を敢行し部下の志氣を鼓舞すると共に中隊突撃奏功の因を作したること其の功績眞に拔群と謂ふべし。悼しいかな既に城門に迫りつゝ其の目指せる南京城完全攻略の日をも待たずして江寧の花と散りしや。

憶ふ昔大阪夏の陣に於て伊井、藤堂の大軍を阻止し激闘終に若江村に最期の遺蹟を留めたる若將木村長門守を。彼亦當年二十三歳其の花々しさに於て正に古今の双壁と爲すに足らん。

星部隊長後ち書を實父振太郎氏に送り慰藉の辭を陳べて曰はく「此日午前一時半より午前八時に亘る戰鬪に於て聯隊は遂に敵を四散せしめ大勝を博し名聲を擧げ候。是れ偏に正夫君等の活躍の賜と感佩致候。せめても私の正夫君に對する慰めとして南京入城の際は部下の首に御遺骨を掛け堂々と入城致させ候。南京も遠くより眺めたる許りなりしこと心外に堪え申さず候云々」と氏の英靈も定めし會心の微笑を洩らせしことであらう。

氏は即日騎兵少尉に進級次で勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級 武居重雄

氏は長野縣諏訪郡下諏訪町の人にして亡父を弘義母をかくと稱し明治三十四年十一月二十八日を以て生れ家庭には妻いそ江がある。資性温順而かも尙武の氣象に富み劍道の如き三段の腕前であつた。氏は幼時郷土の小學校を卒へ大正十年十二月現役兵として歩兵第五十聯隊に入營し同十一年十二月歩兵上等兵となり同十二年十二月歩兵伍長に同十四年歩兵軍曹に任じ同十五年九月陸軍戸山學校に體操科學生として入校昭和二年一月卒業歸隊し三月滿洲駐劄を命ぜられ六月第二大隊本部附となり同三年三月山東方面に出動功により金七拾圓を賜はり同五年八月松本聯隊區司令部附に補せられ八月歩兵曹長九年四月歩兵特務曹長に進級し再び第五十聯隊附となり又滿洲事變の功に依り勳七等に叙せられ同十二年支那事變勃發するや八月遼山部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。

斯くて同年九月十五日より十六日に亘る瑪頭鎮附近の戰鬪に於ては大隊長谷島少佐の指揮下に第一線中隊たる第六中隊小隊長として十六日所屬隊が瑪頭鎮附近既設陣地の敵を攻撃するの目的を以て先づ狼家庄の敵を攻撃するや克く中隊長の意圖を體し迅速に火線を構成して攻撃前進せしが途中氏は瑪頭鎮西北側より數十名の敵出撃し來るを發見し直に機を失せず先づ擲彈筒を以て之を制壓せしめ尙機關銃隊に通報して之を撃攘し次いで狼家庄の敵が動搖の兆あるを察知し中隊長に報告すると共に敵機關銃の猛火を冒し率先陣に立つて突進し當時苦境に在た隣接隊の前進をも誘起せしめ共に狼家庄部落に突入潰走する敵に甚大の損害を與へた。其功績は偉大なるものであつた。更に九月二十一日より二十二日に亘る大冊河畔黃村附近の戰鬪に在りては同じく第一線中隊第三小隊長として二十一日黃村敵陣地攻撃に當つた。當時敵の一部は我が右側背より出撃して來たが氏は之に關せず分隊長を叱咤激勵して一意黃村の敵に向ひ攻撃を續け遂に敵陣に突撃し自ら陣

頭に軍刀を揮つて當るを得手と雖も倒し各分隊長をして之に倣はしめ勇猛果敢に約一軒に亘る敵陣地を突破した。然るに敵は其後方陣地に據り頑強に抵抗し而かも日没し部下の死傷亦相當多數に上り前進稍々困難となりしが氏は勇敢にも單身各分隊長の位置に轉々馳驅し激勵之れ努め克く小隊を掌握して更に突撃を敢行し遂に敵陣地後端に突進して敵を潰走せしめた。次いで翌二十三日富昌屯附近攻撃の際に氏の所屬中隊は尖兵中隊として石莊より富昌屯に向ひ前進し其途中退却する敵機關銃隊を發見するや氏は第一線小隊長として疲勞困憊せる部下を激勵して急追猛撃遂に之を殲滅し續いて翌二十四日には保定附近の殘敵を掃蕩した。次で九月二十五日より二十八日保定集結間に於ける追撃準備中氏は將校斥候長として進路偵察及大隊の馬匹發等に活躍し其の後滹沱河渡河準備に際し氏は將校斥候として渡河點の偵察を命ぜらるゝや勇躍危険を冒し巧に地形を利用し部下と共に河川を偵察し重要な資料を提供し愈々十月八日より十日に亘る滹沱河渡河戰鬪に於ては困難なる渡渉を敢行し小隊長として克く部下を掌握して奮戦し續いて十月十一日より十五日に亘り石家莊元氏



及順徳を攻略し更に十月十七日瑪頭鎮附近の戰鬪の際には右第一線小隊長として午後五時三十分鐵道橋附近の敵を攻撃した。此際敵が鐵橋破壊中なる事を偵知した氏は中隊長に其破壊に先ち迅速に之を占領すべき意見を具申し中隊長は猛烈なる敵機關銃火を冒して遂に鐵道橋並に其北岸を占領し近く敵と相對峙して夜に入つた。敵は月明を利用し射撃を續行しありしが偶々我が裝甲車到着砲撃を開始し爲に敵機關銃沈黙せる瞬間氏は獨斷を以て突撃を敢行し茲に中隊主力の突撃を誘起

し遂に敵陣を奪取した。其功績は誠に偉大なるものであつた。更に十月十八日磁懸附近の戦闘に於ては追撃隊として尖兵長次では第一線小隊長として敵敗残兵を急追之を潰滅に陥らしめ十月二十日より二十二日に亘る漳河河畔西保障附近の戦闘に際しては二十日深更中隊が西保障高地に進出陣地占領に當り氏の小隊は中隊の右支點として機關銃小隊と連繫しA台地を占領した。敵は我軍がA台地占領を知るや銃砲火を集中したが氏は部下を激勵指導し迅速機敏に陣地構築を完了した。然るに翌拂曉に至り我に十數倍せる敵兵は我が大隊陣地の鎖鑰地たる小隊の陣地向つて山砲迫撃砲火を集中すると共に攻撃前進し來り爲に我が死傷續出苦戦に陥つたが氏は部下を激勵して敵を猛射し我が歩兵砲射撃に對する意見具申をなす等沈着冷靜勇敢に指揮を續けた。偶々隣接機關銃小隊長敵彈の爲重傷を負ふや氏は直ちに其機關銃隊を併せ指揮し我が火力を最大に發揚して敵に甚大なる損害を與へた。然れども執拗なる敵は棉畑の間を匍匐近迫し來り遂に手榴彈戰を交ゆるに至つた。時既に氏の小隊死傷者は全員の約半數に達し氏は今や出撃逆襲の外なしと決意し「此陣地が破れたら大隊は全滅するから今より突撃する俺に續け」と大音聲に叫びつゝ突撃を令して逆襲に轉じ軍刀を揮つて突撃すること數歩不幸頭部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏や沈着克く機を察し豪膽克く至難の舉を敢行す。就中保障附近戦闘に於て大隊の鎖鑰地たるA台地を占領し雲霞の如き敵の猛攻に對し奮戦之努め敵に甚大なる損害を與へ以て中隊主力の出撃を容易ならしめ大隊をして赫々たる戦勝を獲得せしむるの素因を作せしは一に適切なる氏の指揮によるものにして中隊長關大尉の遺族に寄せたる書中にも「塲頭鎖の戰闘以來六回の激戦に加はり其都度第一線小隊長として率先陣頭に立たれ勇敢沈着彈雨の中に在りて冷靜神の如き指揮振は克く部下をして中隊長の意圖の如く行動せしめ常に偉功を樹て其の高潔なる人格は典型的武人として上司の信望厚く又部下の敬慕を一身に集め云々」と。更に最期の戦況に關しては「武居君は例の如く極めて冷靜沈着陣地構築を指揮せられ小

官其陣地を一巡せる時相變らずの元氣にて「中隊長殿小癪の敵ですわ。夜が明けたら思ふ存分叩き付けます當方面は御引受しましたから御安心下さい」と誠に心強き必勝の信念に燃る言葉を洩し居候」と認めらる。是に由て之を觀るも其の人と爲りや察知するを得べし。

噫、今次聖戦の前途尙遠なる今日忠勇義烈眞に皇國軍人の龜鑑とも謂うべき氏を鋒鏑に斃れしめしことは痛惜に堪へず、然れども人生限りあり武士は其死所を得るを難しとす、氏や北支戦線の花と散りしも其戦場に於ける忠烈奮戦の最後は軍人の龜鑑として譔はれ、其武勳は赫々として青史に輝き永へに語り傳へられ其忠魂は不滅に生き護國の神として皇國を守護し遺族に祐を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に任ぜられ正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉從七位勳五等功六級 大場松二郎

氏は秋田市茶町梅之丁の人にして母を田口ヒサと云ひ庫之助ヒサの婿養子となり妻イチとの間に四男二女の愛子がある。氏は明治三十年十二月二十五日の出生にして同四十五年三月横澤尋常高等小學校高等科を卒業し爾後家にあつて農業に従事して居た、性温順にして熱心事に當れば寢食を忘れ又友情に篤く人を救護すること十數回である。大正五年現役志願として秋田歩兵聯隊に入營大正七年十二月伍長に任官累進して昭和三年三月准尉に進んだ。此間大正十年十月には西伯利亞に出動し赤軍武装解除のためワシリコフカ附近の戦闘に参加し大正十一年十月内地に歸還し大正十四年十二月には勳八等に昭和六年十二月には勳七等に叙せられた。越えて昭和七年四月には滿洲に出動し滿州子省及び遼西警備等に服務し

翌八年四月には熱河省南天門附近並に新聞嶺附近の戦闘に参加し其際右臂部及び左大腿部に貫通銃創を受け奉天衛戍病院にて治療の上更に熱河省の警備に任じ昭和九年三月内地に歸還し同年九月二十七日依願豫備役を命ぜられ同年四月には功により勳六等單光旭日章を賜はつた。



昭和十二年七月支那事變勃發するや應召赤間部隊に編入せられ八月北支方面の征途に就き深谷大尉の指揮に屬し迫撃砲中隊段列長として先づ九月十四日より永定河附近の戦闘及び徐水に至る追撃に参加した。當時は道路不良然も敗殘兵各所に出沒して車馬部隊の行動頗る困難であつたが氏は克く部下を掌握して其任務を完うした。次いで九月二十二日より同二十四日に至る保定附近の戦闘に於ては放列線に遺憾なく彈藥補充を爲し殊に二十四日は敵彈飛來甚だしかりしに拘らず勇敢に活躍し中隊の戦闘威力を發揚せしめた。更に又九月二十九日より十月二十三日に亘る石家莊及び滏陽河附近の戦闘に於ては十月八日より同十八日に至る間一時大隊主力より離れ歩兵部隊に配屬せられ滹陀河の渡河戦井陘附近の戦闘及核桃園附近の戦闘に参加しよく彈藥補充を全うし歩兵部隊との協力射撃を全からしめ十月十九日大隊主力に復歸し十月二十一日二十二日には核桃園に於て殘置されたる所屬中隊の車馬部隊の指揮官であつたが此兩日共敵の夜襲を受けた。然るに氏は隣接部隊と協力殊に中隊が殘置せる迫撃砲を利用し遂に敵を撃退敗走せしめ翌二十三日中隊主力と合した。而して中隊の警備主任を命ぜらるゝや警戒を嚴にし勞苦を顧みず再三警戒線を巡察し居たが午後九時頃下士哨附近に銃聲甚だしき

爲め直に數名の兵を率ひ下士哨に急行し襲來せる敵斥候十數名を撃退した。然かし此際胸部に盲管銃創を受け遺憾にも壯烈なる戦死を遂げた。核桃園に於て夜襲を撃退し中隊車馬及彈藥を危地より脱せしめたるは氏の適切なる戦闘指揮の賜であり又二十三日に於ける下士哨の危急を救ひたるは同時に中隊警備を宗全せるものにして其功績は中隊戦力の維持に多大なる貢獻となつた。

氏や襄には西比利亞に將た滿洲に活躍して皇軍の威武を中外に宣揚し、更に今次聖戰に参加して赫々たる武勳を奏し以て東洋平和の鴻業に偉大なる礎石となつてくれた。氏が周到綿密なる着意熱誠横溢せる執務而して勇猛果斷なる奮闘は正に皇軍幹部の龜鑑である。今や風發叱咤の雄姿に接すべからずと雖氏が英靈は尙も皇軍に加護を與ふべく又其高邁なる軍人精神は數多の愛子の胸に深く刻みつけらるゝであらう。噫氏が高き勳は皇軍戰史に光彩を放つべく其芳名は千古に傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵少尉に進級し次で勳五等に叙し双光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳七等功六級 松岡角次郎

氏は群馬縣群馬郡桃井村の人にして明治二十二年八月三十一日生れである。亡父を五郎平亡母をミセと云ひ妻つるとの間には子實を恵まれなかつた。性誠實にして勤勉力行、交際極めて圓満にして公共團體の集合には必ず出席し至つて世話好きであつた。娯樂としては圍碁撞球を好み又毎日定期の散歩を行はざれば氣が済まぬと云ふ如き獨特の氣風があつた。明治三十三年三月桃井尋常小學校を卒業し明治四十二年現役兵として高崎歩兵聯隊へ入營し同四十四年十二月歩兵伍長に

任官累進して歩兵特務曹長に任ぜられ大正十四年六月現役を退き翌十五年七月より前橋市役所の書記となり昭和九年三月以來は東京市中島商事株式會社宮崎縣岩戸嶺山延岡事務所勤務となつた。

支那事變起るや森田部隊に召集せられ勇躍北支戰線へ出動した。斯くて昭和十二年十月中旬以降磁縣及漳河々畔の戰闘に参加し第二小隊長代理として克く部下を掌握激勵し漳河々畔に向ふ連日の追撃に従事した。十月二十四日より卅一日に



互る豐安附近の戰闘に於ては茫庄部落を占領中所属中隊は十月卅日に於て二回の敵襲を受けた。當時氏は豫備隊たる第二小隊を指揮し敵の壓迫するに伴ひ獨斷一部を以て附近の望樓を占領して敵を射撃せしめ中隊の防禦戰闘に貢獻する處多大であつた。十一月一日以來の西梁村附近の戰闘に在りては氏は中隊指揮機關に屬し彈丸雨飛の下終始中隊長の許に在つて積極的に中隊長を輔佐し以て其戰闘指揮を容易ならしめた。十一月三日所属中隊は午後三時三十分大坡部落に據る敵に對し戰闘を開始午後五時之を占領し其夜十二時車人里庄を占領した。此間氏は中隊長の許に在りて或は敵情搜索に或は暗夜各小隊との連絡掌握に克く中隊長の戰闘指揮を輔佐した。所属中隊は午後五時大坡の敵陣地突破後三家庄に向ひ前進中東八里庄附近に有力なる敵陣地を占領しあるを知り之を夜襲を以て奪取するに決し午後九時東八里庄西北方無名部落の敵を奇襲し次で一部を以て東八里西庄端に主力を以て南方より敵の側背に向ひ攻撃すべく前進した。氏は主力方面に屬し前進中敵前四五十米に達するや偶々敵の發見する所となり猛烈なる射撃を受くるに至つた。然れども今や一刻も猶豫すべき

時機にあらざるを以て斷乎突撃を敢行するに決するや氏は敢然として率先白刃を振ひ敵の手榴彈下を奪進し將に敵陣地に突入せんとする一刹那頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。此夜襲は至短時間に決行せるものであつたが當時敵の側背を包圍し克く中隊の團結威力を發揚し敵に多大の損害を與へ遂に敵を潰走せしめ該部落を占領し得たるは實に當時の中隊指揮班長たりし氏の指揮班掌握の適確にして中隊長に對する輔佐亦適切なりしと且積極果敢なる氏の行動に俟つもの甚だ大なる爲であつた。

氏は一家の柱石たる身にして且社會的地位にも漸く安定しありしに拘らず自ら野戰部隊の從軍を志願して出陣し中途病を得て後送されたが快方に向ふや切に第一線參加を懇請し快復未だ十分ならざる病後の身を押し本戰闘に加入せるものにして其至誠奉公燃ゆるが如き熱血に對しては所屬丸山中隊將兵一同の齊しく感嘆する所であつた。氏は齡既に五十歳に垂々として意氣壯者を凌ぎ最も滑く身を皇國に捧げ其名を百世に留むるを得た。換言すれば護國の神として永遠の世界に生くる事が出來たのである。必ずや一家の守護神としても將來其多幸繁榮を加護する事であらう。又後世氏の純忠報國の高き志を仰ぎ以て不朽の師範となすであらう。

氏は即日歩兵少尉に進級し正八位勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級 小林時三郎

氏は茨城縣眞壁郡長讀村大字猫島の人にして父を啓作母をたかと稱し明治三十二年七月二十八日を以て生れ妻靜との間に長男正光以下四名の愛兒がある。氏は明治三十九年四月長讀尋常高等小學校に入り同四十五年三月同校を卒業し次で眞

壁郡立農學校に入學大正四年卒業其後二ケ年は家庭に在つて農業の手助けをなして居たが大正六年十二月現役志願兵として歩兵第二聯隊に入營翌七年十二月歩兵上等兵に更に同九年四月歩兵伍長に任官し八年四月より九年十月にかけては西伯利亞に出動し功に依り勳七等青色桐葉章を授けられ同十年十月軍曹に任じ同十二年三月第一大隊本部附次で九月水戸聯隊區司令部附を命ぜられ同十三年十月曹長に進級昭和四年八月歩兵第二聯隊附に轉じ同時に特務曹長に任じ同六年六月二十



八日を以て豫備役に編入せられた。資性沈毅果敢、明敏闊達、精悍敢爲等凡そ武人に貴重なる要素は殆ど之を具備し事に臨んでは常に自信を以て成さずんば休まず達せずんば憩はざるの氣概を以て之に當り一面又は機智に富み屢々人を驚かさす様な手腕を發揮することもあつた。氏は昭和七年四月より同九年三月まで郷里長讚村の帝國在郷軍人會分會長に推され同九年五月より茨城縣立眞壁農學校の講師に就任したが其生徒に臨むや身を以て軍律の正しさを示し峻厳苟も假借せぬといふ風であつた。然し平素生徒との應對には聊かも障壁を設けず赤心を披瀝して談笑し一見舊知の如き感があるので生徒はよく悦服し恩威並び行はれ同校教練科の成績は爲めに長足の進歩を現はし縣下第一との講評を博した程だつた。

斯くて支那事變の勃發するや昭和十二年八月應召石黒部隊に屬して欣然北支方面の征途に就いたのである。やがて同年九月二十一日より二十二日に亘る大冊何々呼石頭村附近の戰鬪に於て氏は第一線中央中隊たる第九中隊に屬し中隊指揮班長として參加したが當初大冊河々呼の敵陣地夜襲の際中隊長の意圖が全員一丸となり先づ一角を占領せんとするに在るを

知り其意に副ふが如く氏は自ら各小隊長に之を傳へ中隊の先頭に在つて活躍熱心中隊長を輔佐し漸く敵陣地前至近距離に迫るや大なる水壕に遭遇し敵は此處ぞとばかり猛烈に射撃を浴せ出したので中隊長は一聲高く前進を令するや氏は逸早く該水壕に躍り込み迅速機敏に足場の堀開作業を指導しやがて果敢に前岸に上り中隊長の突撃の號令と共に中隊長に従ひ突撃し遂に敵陣の一角を奪取した。氏は其處で直ちに敵の手榴彈及小銃機關銃火を冒しつゝ自らも手榴彈を投じ或は軍刀を揮ひ一歩一歩敵を斃しつゝ攻撃し遂に敵をして退却の己むなきに至らしめ大隊主力の戰果擴張を容易にした。更に十月十一日より十二日に亘る石家莊及元氏附近の戰鬪は實に氏の最期の戰ひであつたが此の時氏は第一線中隊たる第九中隊の第一小隊長として參加したのである、而して中隊が郝村附近夜襲を決行するや氏は克く小隊を掌握して前進し鐵道線路東側地區に於て不意に敵と衝突するや一舉機敏に之を擊退して中隊の夜襲を成功せしめ更に十二日午前十時黃堡村より進撃前進に於ては尖兵長として克く其任務を遂行し殊に孟村附近の攻撃に於ては速かに敵情地形を偵察して中隊長の攻撃部署に有力なる憑據を提出した。やがて午後零時四十分愈々中隊が攻撃前進を起すや氏は小隊を率ひ敵火を物ともせず一進一止孟村の東角に向ひ肉薄し我が歩兵砲の最後の一彈と共に先頭に立ちて突撃し遂に敵軍部落の一角を占領し續いて陣地内各所に抵抗する敵を或は軍刀を以て或は手榴彈拳銃を以て掃蕩しつゝ南端に向つて前進した。然かし敗殘の敵は部落内より屢々逆襲し來り又趙係村方面より大逆襲に轉じ來りし小隊は腹背敵を受け健闘すること三時間餘終に無念にも氏は敵彈の爲め胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

噫、氏の人格、郷里に於ての活動更に戰場に在りての赫々たる武動唯々敬仰感激に堪へず中隊長伊藤大尉の書中にも「誠に軍人の龜鑑」と嘆美し後には言葉がない。是れ蓋し讚美の極此時聲無きは聲有るに優るものと謂ふべきである。

氏の葬儀は昭和十二年十二月三十一日村葬を以て長讚小學校の校庭でいとも嚴かに行はれ眞壁農學校生徒總代の切々た

る情緒を吐露したのを始め多数の弔詞が供へられた。
あたら有爲の材、其颯爽たる勇姿に再び接する山もないが氏の忠魂義魄は皇國の守護神となり更に其郷土と子孫に慶福を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に任じ正八位に叙し曩に滿洲事變の功により勳七等を授けられて居たが此度は勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵准尉勳七等功六級 和田 秀雄

氏は神奈川縣愛甲郡煤ヶ谷の人にして父を金太郎母をキヨと云ひ明治四十三年五月十一日に生れ大正十四年三月煤ヶ谷小學校高等科を卒業し續いて實業補習學校並に青年訓練所に學び卒業後は家庭にあつて農業に従事した性温順にして正直然も勇氣に滿ち父母に仕へて孝行であつた。

昭和六年一月徴兵として習志野騎兵聯隊に入營下士官を志願し下士候補者の首席にて昭和七年十二月騎兵伍長に任官翌八年十二月軍曹に進級し氏は馬術劍術及び射撃に堪能で馬術徽章下士官小銃及劍術の各徽章又は賞状を授與せられ更に同十一年北支駐屯騎兵隊に編入せられ該地の守備に任じ而して同十二年四月には騎兵曹長に昇級し同年七月蘆溝橋事變の突發するや野口部隊に屬して直に出動した。

所屬部隊は七月二十六日より同二十九日に亘る戦闘に於て最初先づ西五里店附近を占領し八寶山蘆溝橋方面の敵に對し河邊部隊の背後を警戒する任務を受け其の主力は西五里店を又一部を以ては一文字山を占領した。二十八日午前八時三十

分頃より蘆溝橋の敵は部隊の占領せる陣地に砲火を集中し猶正午頃輕機銃を有する歩兵約五六百名平漢線北側より一文字山に攻撃して來た之が爲部隊主力は一文字山に増援し敵を攻撃したが此間氏は猛烈なる彈雨を冒し勇敢に命令の傳達及び連絡に任じ熱心隊長を輔佐した。

更に八月八日より同二十五日に亘りては南苑附近の警備に服し且馬駒橋の敗殘兵の掃蕩に参加し又九月三日より同十七日に亘り平綏線警備に服したが該地附近には兵匪出沒せし爲め屢々之が掃蕩に従ひ、終始命令傳達及び連絡に任じて其功績は優秀であつた。



置に命中炸裂し爲に氏は左右兩上肢及び腹部に砲彈破片創を受けた。然かし氏は之に屈せず尙も任務の遂行に當らんとしが出血甚だしき爲め隊長の命により後方に收容せられ爾後原平鎮野戰豫備病院第十七班第二半部病院に於て加療中二十六日午後二時五十分惜しくも北支の華と散つた。

氏や天賦英資技能優秀にして嶄然夙に頭角を見はす而かも旺盛なる責任觀念を有して陣中常に匪躬の努力を致す誠に武

人の範と謂ふべし。かの命令傳達連絡確保の大任を受くるや未だ發動せざるに敵砲彈の炸裂により身に重傷を負ひ鮮血淋漓尙も毅然として所命に邁死せんとす其の壯烈驚れて猶已まざるの氣魄は部隊全員の士氣を昂揚鼓舞せしめたるに於て既に功績の偉大なるを見る。此赫々たる武勳は永へに聖戰史上其芳を放つであらう。

氏は即日騎兵准尉に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍主計准尉勳七等功六級 横田久雄

氏は和歌山縣日高郡西内原村大字池田の人にして亡父を嘉次郎亡母をタミエと云ひ明治四十五年四月二十二日を以て生れ未だ獨身者であつた。幼時より朝鮮にあつて大正十四年三月平壤山手尋常小學校を卒業同年五月朝鮮東洋拓殖會社に事務員として入社し入營に及んだ。資性濃厚にして謹直在營中衆の模範であつた。昭和六年六月現役兵として龍山歩兵聯隊に入營昭和七年六月上等兵に進み同八年六月三等計手に同十二月二等計手に進み翌九年十二月一等計手に任ぜられ昭和十二年七月〇〇經理部勤務として北支方面の征途に就いた。斯くて七月中旬には天津に到着し直に戰闘資料の調辨糧秣其他軍需品の交付に或は各部隊の給養に任じ後黃村に移り同地糧秣交付所に於て補給業務に従事し或時は殘敵出沒の間を第一線に糧秣及加給品の前送交付に任じた。當時大行李及び臨時輜重は未だ到着せず各部隊は僅に携帶糧秣の殘餘を以て給養する以外道なく將兵の飢渴に瀕せんとする状態なる時氏の敏活機宜に適應する活動は各部隊の給養を持續するに大なる貢獻を爲した。續いて北平周邊の掃蕩戰、八月一日より十四日に至る良郷附近の戰闘、九月十五日より同二十六日に至る涿州保定の會戰續いて石家莊及び滄陽河附近の會戰等に於ては能く上官の指示に従ひ物資の調辨蒐集部隊への補給業務に服し

たが或は道路泥濘にして集積又は輸送意の如くならず或は追擊急にして部隊の給養頗る困難なる場合粉骨碎身不眠不休時に殘敵徘徊の地區を行動し野戰衣糧廠と連繫する等あらゆる困難を排して給養を確保し以て戦力保持に貢獻する事偉大で在つた。越へて十月十三日より同三十一日に亘る娘子關附近の戰闘に於ては戰場は峻險なる山嶽重疊し第一線は敵に近迫し且追擊急にして補給甚だ困難なる状況に於て氏の機宜に適應する處置はよく第一線部隊の補給を容易ならしめた。更に又十一月月上旬大原平地攻略戰に際しては十一月五日所屬部隊主力は張淨鎮を出發し壽陽—白家河—青坪鎮—大安驛道を檢次に向ひ追擊の際氏は白家河より大安驛に先行して物資を蒐集すべき命を受け高田少佐の指揮下に先發隊總員二十二名中に加はり白家河—路家河—大安驛の新道を前進し午後七時その先頭路家河南方約三百米の地點に達せし時突如敵正規兵約二百と遭遇し其距離僅かに數米にして茲に彼我の銃火を交ゆるに至り敵の輕機關銃は右方約十米の地點より我が先頭附近を猛射した。氏は先頭より六七番目にあつたが味方は僅かに小銃十一挺を有するのみ爲に氏は非戰闘員の身ながら單身密かに地隙に降り敵輕機關銃に接近拳銃を以て先づその射手を斃し次で抜刀肉薄之を奪取せんとしたが此時遺憾にも小銃彈を左胸部に受け壯烈なる戦死を遂げた。然れども之が爲敵輕機關銃は射撃を中止し一方我先發隊の士氣を鼓舞し遂に該敵を擊退するに至つた。

噫皇軍の迅速果敢なる作戰に伴ふ軍の補給は縱令良好なる交通網ありとも蓋し容易の業ではない。然るに道路泥濘山岳又峻險なる北支戰線加ふるに所在に敗殘軍の出沒する状況に於ける補給に至りては其苦心努力や察するに餘ありと云ふべきである。氏は其間に處し常に献身的の努力を以て第一線部隊への給與を圓滑ならしめ以て戦力を培養したるは眞に隠れたる偉大なる功績であつた。而して最後に於ける戰闘加入の決意並に勇猛果敢なる行動に至りては天晴皇軍々人の武威を遺憾なく發揮せるもので一般軍人の龜鑑たるべきものである。今や聖戰の尊き犠牲となつたが其武功は皇軍戰史に輝き其

名は千載の下芳ばしく譲はるゝであらう。

氏は即日主計准尉に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた

陸軍歩兵准尉勳七等功六級 佐藤 徳藏

氏は新潟縣刈羽郡柏崎町港の人にして明治四十二年十一月二日生れである。父は仲治母をヒナと云ひ氏は未だ獨身で在つた。性快活明朗の人で小學校卒業後柏崎中學校に入學したがその成績は常に優秀であつた。殊に剣道は其の長技で在學中初段を勝ち得た程であつた。大正十五年八月四學年の時都合在りて中途退學し爾後同町海産物商の店員となつた。

昭和五年一月徴兵として歩兵第三十聯隊に入營下士官志願をして同年十二月一日仙臺陸軍教導學校に入校した。六年十月一日歩兵伍長に任じ爾後累進して十一年十二月一日歩兵曹長となつた。その間無線電信特業教育を受け又剣道は前記の如く特技で在つた爲軍隊に於ても銃劍術軍刀術共に初段の證を授與せられて居た。

昭和十二年四月十日在滿部隊に派遣せられたが支那事變勃發するや猪鹿倉部隊に屬して征途に就いた。

かくて九月六日天鎮附近の戰跡に於て氏の屬して居た石原中隊は大隊の左第一線として同日午後七時十分一二三〇高地敵陣地の攻撃に移るや俄然敵銃砲火の連續猛射を受け當時中隊は大隊本部並に配屬せられた機關銃隊との連絡絶えその協力意の如くならず爲に攻撃前進頗る困難となつた。此の時氏は敵射撃の間斷と薄暮とを利用して其連絡を完うし機關銃隊の協力を得たのみならず中隊として大隊長の意圖の如く行動するを得爲めに我が攻撃進捗し遂に午後八時敵陣地を奪取する事が出来た。續て收退する敵の追撃に當つては暗夜而かも峻峻なる山岳重疊して前進頗る困難加ふるに收殘兵出沒して

危殆極。なき中を氏は挺身先頭に立て常に中隊の教導となつた。氏の之等勇敢なる献身的行動と殊に大隊本部及機關銃隊との連絡は實に本戦捷の因を爲したものでその武功偉大と謂はなければならない。

九月八日より十一日に至る鎮邊附近の戰跡に於ては氏は石原中隊の指揮機關の長として参加し中隊は連日連夜殆ど水なく食なく而かも不眠不休敵を掃蕩しつゝ前進したが氏は克く指揮機關の長として部下を指導激勵して上下の連絡に任じ

恰も中隊長の手足の如く活動した。又十日午前十時黄土溝附近の敵を攻撃するに當つても常に先頭にあつて敵情監視に任じ敵動搖の徴を認めるや逸早く之を中隊長に報告し爲に中隊をして機を失せず有利なる追撃を爲し敵に多大の損害を與へた事は氏の功に俟つ所頗る大なるものが在つた次第である。



十月三日氏は機關銃小隊長大類少尉の指揮に屬し本隊に追及申午後八時山西省崞縣城東北方二軒の地點に達した時左前方より十數發の射撃を受くると同時に約五六十名の敵歩兵襲撃し來るや氏は機を失せず直ちに先頭にありし輕機關銃を以て敵を猛射し爲に敵の氣勢

稍衰へたと見るや殘餘の分隊を率ひて右側方より之を擊退し以て五日朝本隊に追及し得た事は氏の機宜に適した處置の結果である。

蓋機關銃に對し輕機關銃を以て猛射を浴せ敵火力の稍々衰へたと見るや機を逸せず敢然部下を提げて突撃前進に移つたが敵前四十米に至るや突如右胸部に貫通銃創を受け鮮血爲に附近を染め凄惨を極めた。然れども剛膽そのものの如き氏は毫も屈せず尙前進したが敵前二十米に於て再び右側頸部に貫通銃創を受けこゝに壯烈なる戦死を遂げたのであつた。氏や俊敏果敢處置常に機宜に適し毎戰適切の指揮を以て克く偉功を奏す。其の最期に於ける勇猛阿修羅の如き奮闘振り將兵の齊しく驚嘆刮目せし所更に其の壯烈なる戦死に對しては痛恨哀惜陣中一人として感涙を流さざるものなかつたとの事である。

噫、氏挺身原平鎮城攻撃の華と散りしも其魂魄は尙も到る所皇軍に副ふて其の勝運を守護するであらう。即日氏は歩兵准尉に任じ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳六等功六級 宮崎 實

氏は熊本縣玉名郡大原村字豊永の人にして父を政藏母をハヤと稱し明治四十二年五月四日を以て生れ未だ獨身であつた。大正五年四月大原村尋常高等小學校に入り同十三年三月卒業同年四月南關、岱北中等實務學校に入學翌十四年三月同校を卒業し其翌十五年四月大原青年訓練所に入り昭和四年十二月同所終了爾後家庭に在つて農業の手助けをなして居た。資性濃厚篤實無口の方であつたが實行力に於ては誠に氣味々々したものがあつた。昭和五年一月現役兵として歩兵第十三聯隊に入營其年の七月一等兵に進み十二月第四期學生として熊本陸軍教導學校に入り同時に上等兵となり翌六年十一月同校卒業原隊に復歸し十二月歩兵伍長に任じ同七年十二月より八年九月に亘り滿洲事變の爲め出征功に依り勳七等青色桐葉

章を授けられ更に八年五月軍曹に進級し翌九年三月無線情報隊委員として電信第二聯隊に分遣十一月原隊に復歸同十一年四月歩兵第三聯隊附となり五月第一師團通信隊に轉勤續いて滿洲に派遣された。以上の期間氏は或は學術優秀或は無缺席等の爲めに褒賞狀や賞詞を受けたこと前後十一回の多きに達した程であつた。



やがて昭和十二年七月支那事變の勃發するや氏は小林部隊に屬して出動し七月三十日より八月十六日に亘り天津附近の掃蕩及警備に中隊指揮班長として克く中隊長を輔佐し續いて新城揚惠莊小站附近の殘敵を掃蕩し又八月十七日より二十一日に至る外長城線附近の戰闘に在りて中隊は兵團豫備として司令部並に砲兵隊等の直接警備に任せられ氏は此時も指揮班長として中隊の任務達成に大に貢献した。次で八月二十二日より二十三日に亘る萬全附近の戰闘に於ては中隊長田邊大尉の指揮下に屬し二十二日夜中隊が萬全縣北側隘路の強行通過の際敵の猛射を受けたるも氏は沈着勇敢衆を激勵して率先敵を猛攻し主力の強行通過を容易にし、更に敵が最後の陣地として固守せる萬全北側高地攻撃には敵の猛射を物ともせず鬼神の如く迅速果敢に突入格闘を交へ遂に敵を撃滅し更に續いて左方の高地を攻撃せんとしたる際不幸左頸軟部に貫通銃創を受け後送せられた。然かし承德野戰病院に於て加療全癒の上九月中旬再び原隊に復歸し九月二十四日より二十九日の下社村附近の戰闘には地理不明の山岳戰に於て數日間連戰遂に糧食缺乏を告ぐるや氏は指揮班長兼給與掛として危険を冒し之が調補補充に努め以て第一線の戰闘力を保持し中隊の攻撃續行を容易にし遂に敵を撃滅するに至らしめた。更に十月五

日輝縣城西北部落の敵を攻撃し午後五時頃第三小隊長小久保准尉が敵弾に斃るるや氏は直ちに其後を嗣いで小隊長となり克く部下を掌握指揮して同地に突入し終夜交戦を續けた。而して翌六日午後三時頃尙も頑強に抵抗せる敵に對し突撃を行はんとせる際中隊の左側面に向ひ約六百の敵兵逆襲し來つた。之を發見した氏は迅速機敏に之に猛射を浴せ遂に潰滅に陥らしめ午後六時五十分全小隊悲壯の決心を以て更に前方敵陣地に向け一舉に突撃を斷行し氏は勇躍部下を叱咤激勵し眞つ先きに進んだ。然るに敵火は益々猛烈加ふるに地上に敷設せる手榴彈の爆音物凄く我が死傷續出頗る苦境に陥つたが氏は愈々部下を激勵し鬼神の如く敵陣目がけて前進し其の際無念にも敵の投擲せる手榴彈に因り顔部に破片創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や眞に人格優秀の武人にして氏の上官たりし廣川少佐が遺族に宛てたる書簡中にも「軍人精神充實し常に衆の模範として上下の信頼殊に深く不言實行熱心着實積極的であり又部下を見ること親の子に對するが如きものがありました云々」と賞讃の限りを盡くし又部下の一人が遺族に寄せた手紙中にも「實に熊本男兒の典型と私等の心を刺すものがあります。私等の到らなかつた爲に實に惜しい指揮官を死なせてしまいました何とも申上様のない程口惜しく思ひます云々」と涕語して居る。以て其の人と成りの一斑が窺はれると思ふ。

噫、有爲氏の如き武人を喪ふ痛惜極まりないが八紘一字の天業翬贊に一命が役立つたことを平素至誠奉公の念に燃えて居つた氏としては寧ろ本懐の至として護國の神座に鎮まり就いたことであらう。

氏の功績や誠に拔群即日歩兵准尉に進級し勳六等に叙せらるる單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳七等功六級 日高末太郎

氏は明治三十九年七月二十五日蔭田家に生れ後島根縣邑知郡井原村日高家に入り養父を清太養母をミヨ妻をすが子と云ふ。實家には母キワ尙健在である。性頗る明朗快活で大正十一年三月高等小學を卒業し別に關西高等簿記學校に學び卒業後下の關赤松商會に勤務してゐた。昭和二年一月十日濱田歩兵聯隊に入營し下士官志願をして同年七月熊本教導學校に入校翌三年卒業伍長に任官し原隊に於て勤務中同四年四月軍曹に昇級し越えて昭和六年十二月二十日滿洲事變に出征し。同九年十二月曹長に進級し同十一年四月聯隊の一部が北支駐屯軍に派遣せらるるや該部隊に編入せられて渡支し各地に移駐して精勵其服務成績は良好であつた。

昭和十二年七月蘆溝橋事件の突發するや所屬隊は直に北進の命を受けた時百二十度の酷暑の下連日連夜の猛行軍に將兵一同の疲勞と困苦は容易のものでなかつたが皆克く其困苦缺乏に打勝ち殊に氏は其間中隊指揮班の指導及び中隊長の命令傳達に任じ涙ぐましまでに其任務を全うした。斯くして通州に到着し至嚴なる警備に任じたが當時氏は中隊附曹長として事務多端殆んど不眠不休で中隊長を輔佐し警備勤務に遺憾なからしめた。其功績は優秀なるものであつた。

七月二十六日夜通州にあつた所屬寬島部隊が南苑に向て前進するに際し通州南門外支那軍一營(約七百名)の武裝解除をする爲午後十一時五十分通州師範學校の宿營地を出發する事となり中隊は尖兵として南門に向つた。氏は中隊長の命に従ひ倉惶の間細心の注意を以て戦闘資材を整備携行したため拂曉に於ける住民地の戦闘に中隊は偉功を奏することを得たのであつた。

通州新南門に到着後は中隊の上田小隊が門外約百五十米三叉路附近に位置して當面の敵兵營監視並に第一機關銃隊主力

の掩護として先遣され氏は中隊命令により前記上田小隊と中隊間の連絡及び敵情監視に任じて居たが氏は機微なる敵情を洞察判断し二十七日午前三時二十分頃敵は武装解除に應ずる模様なき旨を報告し且意見を具申し部隊長の決心に適切なる資料を提供した。斯くて午前三時五十分敵を攻撃する準備を命令せられ中隊主力は新門外獨立家屋に位置し上田小隊への増援準備並に敵情偵察中氏は中隊長に上田小隊の状況を報告し又黎明時を利用して自ら圍壁脚まで前進偵察した結果三義廟西北角には望樓があつて銃眼を設けた自動火器を備へ監視嚴重にして上田小隊の位置より敵の圍壁迄は距離近きも開濶で其の上望樓の壁脚は懸崖をなし携行梯では攀登超越困難なる計りでなく敵の側防火に暴露するを詳細に報告したので中隊の突撃に有爲の資料となつた。



午前七時十分大隊の攻撃命令により中隊は左第一線として敵前至近距離迄蔭蔽近接し突撃準備を爲し敵前二十五米の地點に進出して當面の敵情地形偵察中にも氏は熱心中隊長を輔佐して居たが此時氏は中隊長より擲彈筒分隊と湯川分隊を指揮し中隊主力が左側方へ機動するのを掩護する事を命ぜられ直に其區署に就き敵の注意を自己の正面に吸収し其の結果敵の射撃愈々猛烈となるや自ら火線に銃を執つて奮闘し以て中隊の行動を容易にした。次で中隊主力方面の突撃に先だち左前方突角望樓の敵を撲滅する爲率先突撃發起の位置につきたる時偶々正面圍壁内より投げた敵の手榴彈は顔前に炸裂し氏は頭部に爆創を受け惜しくも午前八時壯烈なる戦死を遂げた。

氏や剛膽不屈義には滿洲事變に従軍功に依つて勳七等に叙せられ今大事變に於ては常に敵情其の他に關し適切なる判断をなし貴重なる資料を提供して克く所屬部隊長を輔佐し又愈々戰闘に移るや常に全面の戦果を考察し時に從容自ら危地に立つて態勢を有利に導き其最期の奮闘の如き克く氏が崇高なる犠牲的精神に終始せしものなることを物語つて餘りありと謂ふべし。

噫、聖戦の劈頭に於てあたられ此の有爲の士を喪ふ痛恨極まりなしと雖も氏の英名や其の赫々たる功績と共に永く青史に輝き千載武人の範として喧傳せらるゝであらう。

氏は即日歩兵准尉に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

下士官之部

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 石田正芳

氏は岡山縣勝田郡公文村の人にして大正二年十一月三日生れである。亡父を耕太郎亡母をシゲノと云ひ養母を於登彌と稱し氏は未だ獨身者であつた。資性温順勤勉にして幼時より極めて親孝行であつた。昭和三年三月郷里の小學校高等科を卒業後昭和六年三月勝間田農林學校林科を卒業し農業に従事し入營時に至つた。

昭和八年一月岡山歩兵聯隊へ入營し同年三月滿洲事變に従軍し勳功を以て勳八等に叙し白色桐葉章並に従軍記章を賜はり又建國功勞章を授けられた。氏は下士官候補者に採用せられ昭和八年十二月熊本陸軍教導學校に分遣翌九年十二月卒業歸隊後選ばれて千葉陸軍歩兵學校へ分遣せられ翌十年五月卒業歸隊した。

昭和十二年支那事變勃發するや氏は赤柴部隊末永隊に屬し勇躍征途に就いた。斯くて氏の所屬大隊は八月二十一日津浦線沿線良王莊を出發し泥濘膝を没する高粱畑の中を雜行軍し午後三時畢庄子の敵約百名を攻撃して之を撃破し更に薄暮より徐庄子の敵陣地を攻撃し午後七時四十分之を奪取し引續き同部落の殘敵を掃蕩した。此夜十二時迫撃砲三門を有する敵約三百名は同部落に向ひ逆襲して來たが大隊は之を撃退した。此間氏は大隊本部書記として彈丸雨飛の下に於て克く隊長を輔佐し或は第一線中隊との連絡に任じ沈着機敏の行動を以て大隊戰團に貢獻せる所甚だ大であつた。

八月二十二日所屬大隊は東邊庄の敵陣地を攻撃する目的を以て午前八時行動を開始した。戰場一般の地形は見渡す限り高粱畑の連続であり依然として膝を没する泥水濘土であつた。從て大隊の行動は極めて困難にして第一線中隊及重機關

銃隊との指揮連絡は頗る困難なる状態であつた。斯かる中にも敵は十數挺の機關銃及迫撃砲野砲を以て亂射亂撃を加ふるので大隊は死傷者續出し刻一刻悲壯慘烈の修羅場と化した。斯る難戰苦闘の中に氏は全く勞苦も危険も眼中になきもの如く克く大隊長の意圖を奉じ屢々前線を馳驅して連絡命令傳達に任じ以て大隊長の戰團指揮を容易ならしめた。殊に大隊副官が名譽の戦死を遂ぐるや特に積極的に大隊長を輔佐し益々勇敢機敏に行動し拂曉攻撃再興の諸準備に貢獻し攻撃再興となるや克く本部傳令を督勵して第一線諸部隊との間に往來し以て指揮連絡を緊密ならしめた。斯くて大隊長以下愈々敵陣地に突入したが氏は敵前十五米に於て惜くも敵彈の爲胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。されど大隊は氏の勇敢なる行動に依り二十三日午前七時五十分頭敵を粉碎して東邊庄を占領するを得た。

氏の献身的努力難局に處して益々英氣激刺たる奮闘たるや正に盤根錯節に利刀を試みたる概がある。熾烈なる十字の銃砲火を浴びつゝも唯一筋に己が本分に向ひ邁進し死を懼れざりし氏の戰場心理たるや正に聖旨奉體の極致と謂ふべく眞に皇軍の精華軍人の龜鑑であつた。氏の芳名は皇軍戰史を飾るべく氏の功績は永世に高く仰がるゝであらう。

氏は即日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 西脇逸治

氏は兵庫縣多紀郡畑村奥畑の人で父を徳松と謂ひ實母だけは既に没し繼母を愛子と謂ふ。大正四年十二月二十二日生れで昭和五年三月畑高等小學校を卒業し續いて村立農業公民學校に入り更に三田農林學校專修生として傍ら農事に精勵克く父母の業を扶けつゝ只管勉學に勉め學校よりは四年間年々學術素行優良の爲め優等賞を授與された程の模範青年であつ

た。性温厚謙談にして一而又運動競技の選手として拔群の技能を持つて居た。長ずるに及び父の軍人たりし事を思ひ起し
 自分も又軍人たらん事を決意し現役志願兵として昭和九年六月十日十八歳で歩兵第七十七聯隊に入營し茲に年來の宿望叶
 ひ一意軍務に精勵した。翌十年五月には豊橋陸軍教導學校に入校十一年五月卒業原隊に復歸し六月一日歩兵伍長に同年十
 二月一日歩兵軍曹に進級した。其昇進は實に早いがそれだけ氏の成績の優良を物語るものであつた。



昭和十二年七月七日北支蘆溝橋に事變突發するや當時我軍は隠忍
 自重以て其平和的解決に努めたのであるが漸次風雲急を告ぐるに及
 び氏は五ノ井部隊第一小隊の先任分隊長として北支に出動した。斯
 くて同月二十五日五ノ井部隊は北寧鐵道及軍用電線保護の任務を以
 て廊坊に派遣せられ午後四時半該地に到着廊坊驛及其附近に位置し
 て警備する事となり將兵一同必死の努力を以て午後十一時半頃大體
 の工事は完了せんとした。其際突如敵の不法射撃を受け當初隠忍せ
 し五ノ井部隊も敵の攻撃愈々猛烈となり遂に應戦の止むなきに至つ
 た。當時第一小隊は驛の南角を守備しありしが敵は終夜小銃機關銃
 及び迫撃砲を猛射し我亦必死に應戦し遂に天明に至るや我は決然敵陣めがけて突撃し其第一線を突破した。此間氏は克く
 部下を掌握し常に先頭に立つて勇猛果敢に奮戦し次で中隊は更に敵の第二線陣地に突撃を敢行すべく準備し中隊長は先づ
 第一小隊に前進を命じた。此時氏は小隊の先頭に立つて敵陣近く迫り自ら手榴彈を携へ部下分隊を率ひ道路兩側の土壁を
 利用し敵前五米に迄迫り自ら手榴彈を投擲し猛然突入せんとした時突如敵の一彈は氏の鐵帽を貫通し續いて他の一彈は前

總部に命中せつゝ其場に倒れしが氣丈なる氏は倒れながらも尙手榴彈を投擲しつゝ部下を激勵したのであつた。此時五ノ
 井中尉は馳せ寄て激勵しつゝ自ら恩賜の煙草を氏の口に含ませし處今は呼吸も絶へたる裡に口を動かし恰も聖恩に感
 激するものゝ如く莞爾として瞑目せられたのである。

思へば氏の如き堅忍不拔忠勇そのものゝ如き有爲の士を喪つた事は誠に惜しみても尙餘りある次第であるが廊坊附近戰
 闘に於ける氏の勇敢なる活動、適切なる指揮は如何に五ノ井部隊の志氣を振起し其突撃を容易ならしめしか、其武功は正
 に拔群と謂ふべく又其壯烈なる最後の狀は皇國軍人の鑑として千載の下懦夫をして立たしむるものがある。

氏は前記の如く幼少より軍人たらん事を希ひ十八歳にして現役志願をして入營し而して此一大聖戰に赫々たる武動を奏
 して壯烈なる戦死を遂げられた事は氏が死の間際に恩賜の煙草を含みつゝ聖恩を感謝し莞爾として瞑目せられた事と照し
 合せて多分満足して昇天せられた事と思ふ、而して其忠魂は不滅に生き護國の神となりて更に皇運を扶翼し奉り亦遺族の
 各々を守護するであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級せしめられ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 山田 欽一

氏は埼玉縣大里郡小原村字板井の人にして父を鐵造母をとみと云ひ大正三年二月二十日を以て生れ未だ獨身であつた。
 大正十年四月大里郡小原小學校に入學昭和三年三月同校高等科を卒業し昭和八年一月東京歩兵聯隊に入營し下士官を志願
 し其年十二月上等兵に進級して仙臺陸軍教導學校に入校翌九年十一月同校卒業の上十二月歩兵伍長に任官し翌十年十二月

は沈着剛膽部下を激勵し率先陣頭に立ち鉢剣を振ひつゝ疾風迅雷の勢を以て群る敵中に突入し瞬く間に敵兵二三名を刺殺した敵は之に恐をなし北方に敗走した。然るに敵は新手を以て第二次攻撃を試みたが氏は勇氣益々凛々として奮戦力闘の結果之れ亦美事に撃退するを得た。執拗なる敵は更に新手を替へ第三次の攻撃を反覆して来た。此時部下は既に大半斃れたるを以て氏は今は是れ迄と決死の覚悟を定め群る敵中に躍り込み縦横無盡に薙ぎ立て敵兵數名を斃したが不幸頭部に刀創を受け 天皇陛下萬歳を奉唱して遂に壯烈無比の戦死を遂げた。斯くて監視隊は黒戦苦闘數時間の後裝甲列車に救援せられ辛くも虎口を脱するを得たが之れ氏が健闘に俟つ所甚だ大にして壯絶爲に鬼神哭き忠烈爲に一隊將兵の袖を絞らしめた。

氏の功績は聖戦初期の皇軍戦史に異彩を放つべく其の芳名は大和櫻と咲き競ふであらう。氏や廊坊一夜の嵐に散つたが其英靈は萬世に生き皇國を護り又一家の守護神として其多幸繁榮を加護すべく又後世永く清く氣高き光を大和民族の上に投げ與へるであらう。

氏は即日歩兵曹長に進級し次で功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵曹長勳七等功六級 佐々木勝見

氏は岡山縣久米郡大井東村の出身にして父を隆母を玉野と云ひ大正二年六月十五日を以て生れ未だ獨身であつた。性温順にして體育に關心を持ち好きこそ物の上手として青年競技の選手となり其名を博した。小學校卒業の後昭和五年格致青年學校に入學同七年一月同校を卒業し當時上海事變滿洲事變等の刺激を受け十九歳にして現役を志願し昭和七年一月姫路

騎兵聯隊に入營同年七月一等兵に進み其輕捷にて秀でたる馬術を認められ千葉騎兵教導學校に入校を命ぜられ十二月伍長勤務上等兵となり翌年八月同校を卒業し特に馬術優秀により賞状を受けたのである。而して八年十一月滿洲事變の爲め出勤し九年五月伍長に任官滿洲事變の功により勳八等に叙せられ同年十二月には軍曹に進級した。

昭和十二年七月支那事變の爲桑田部隊に屬して北支方面の征途に上り八月二十五日より津浦沿線の戦闘には主として中

井支隊に屬し子牙河々畔に行動したのであるが打撃ける降雨後の泥濘惡路を前進し或は須山將校斥候に加はり敵前距離に於て剛膽積極的なる行動によりて有益なる敵情報告を呈し九月十五日中絶挾附近の戦闘に於ては部隊の豫備として須山小隊長不在中小隊の残部を指揮しよく軍旗護衛の任を全うした。

又滄縣附近の攻撃に際しては第二小隊故參分隊長として常に小隊長を輔佐し搜索警戒に従事し部隊の行動をして適切迅速ならしめ次いで九月二十七日より德縣に向つての追撃には尙敗殘兵隨所に横行し頗る危險なる地域に於て搜索勤務に従事せるのみならず九月二十九日姚家口附近の戦闘に方つては須山少尉の指揮に屬し尖兵小隊右翼分隊長として第一線に奮闘該敵を撃滅し翌三十日山東省最北端桑園城を占領した。續いて十月一日趙庄附近の戦闘に於ては所屬せる稻葉隊は尖兵として前進中千庄に轉進を命ぜられ同地近くに達せし所千庄には少くも二百の敵占領しあるを知り稻葉隊は午後一時三十分より之を攻撃した。此時氏は稻葉隊左第一線小隊の右翼分隊長として前進を起すや敵の堅固に構築せる陣地に據り小銃機關銃迫撃砲を以て敵なが



ら勇敢に應戦した。然かし攻撃精神横溢せる氏は部下を激勵以て前進を繼續せしが敵の火力は刻一刻熾盛となり加之我は利用すべき地物もなく敵火に暴露しつゝ勇敢に前進又前進遂に敵前百五十米の地點に達し茲に突撃を準備し敵に猛射を浴せ又敵陣地状況を小隊長に報告せんとした時惜しくも敵彈の集中を受け壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏の分隊が猛烈果敢なる攻撃前進により敵は動搖を來たし遂に午後五時稍葉隊は千庄を奪取するに至つた其功績實に偉大なるものと謂ふべきである。

氏は上陸以來泥濘なる道路と稀有の洪水のため頗る行動を阻まれたるにも拘らず優秀なる馬術を以て北支の廣野を縱横馬蹄にかけ終始騎兵本來の任務たる搜索警戒に従事し毎に有利なる報告を呈し指揮官に作戰の馮據を供したる而已ならず戦闘に際して勇猛果敢に行動し津浦沿線に於ける我作戰の進展に偉大なる貢獻をなし遂に河北の華と散つたがその偉大なる功績は煥然として永く皇軍戦史に輝くであらう。

氏は即日騎兵曹長に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 稻原芳一

氏は栃木縣安蘇郡葛生の人にして大正五年二月一日生れである。父母は既に歿し氏は未だ獨身であつた。性質温厚にして篤實而かも反面氣力旺盛進んで難局に當るの氣概があつた。又頭腦明晰にして小學在學中は常に首席を占め昭和四年三月葛生尋常高等小學校を卒業し次で同地青年訓練所へ入所し能く指導員の教示を守りて精勵し成績優良を以て昭和七年所定の課程を修了した。昭和十一年一月十日現役志願兵として歩兵第五十九聯隊へ入營し成績優良なるに依り同年七月歩兵

一等兵を命ぜられ同年十二月下士候補者の選に入りて仙臺陸軍教導學校に入校を命ぜられ下士官たるに必要な學術教育と共に心身の鍛練を経同十二年八月同校卒業原隊に復歸した。時恰も支那事變勃發の直後にて氏は坂西部隊に屬し同月二十六日出發勇躍して征途に上つた。

同年九月上旬北支那地方に到着するや海陸長途の輸送並に行軍に依り累積せる疲勞を醫すべき寸暇もなく直に灤縣附近の警備に當りて日夜の別なく繁劇なる勤務に當り九月下旬には聯隊主力に合して小朱寨保定附近の戦闘並に十月中古滹沱河、石家莊元氏附近の戦闘に参加し次で順德邯鄲及石橋を経て臨蹄に向て敵を追撃した。この間氏は分隊長として克く部下を掌握督勵し又率先勇敢に行動して部隊に垂範し常に優良なる戦績を收め各地に於て多大の戦功を立て十月歩兵伍長に任ぜられた。以下主なる武勳を記すれば次の通りである。

同年十一月八日院堤集附近の戦闘に際しては第一小隊第三分隊長として之に参加し十一月十日より同月十二迄は第一小隊長として能く部下を督勵し極めて明確適切なる指揮に依り部下分隊及小隊の戦闘力を遺憾なく發揮せしめ敵に大打撃を加へた。十二月十二日十三日范家堤及龍王廟附近の戦闘に於ては斥候長となり選拔せる少數の部下を提げ夜暗を利用して范家堤附近に前進し刻苦奮勵幾多の困難を排し危険を冒して漸く敵陣地に近接するや敵監視部隊の急射撃を受けた。然かし巧に行動して死地を脱し有利なる偵察の結果を收めて歸還復命した。之れが所屬部隊長をして攻撃計畫立案の基礎を得しめたるは正



に武功抜群と稱すべきである。

同年十二月二十四日蘇范村附近の戦闘に於ては第三小隊長の指揮下に右第一線分隊長として参加した。所屬中隊は午前十時より戦闘を開始し霍范村より前進し敵に猛撃を加へて蘇范村を奪取し次で劉范集村に向て攻撃した。氏は克く部下を激勵して有効なる射撃を以て敵を制壓しつゝ一進一止敵に近迫し敵の側防火器を制壓して前進を繼續したが忽ち劉范集東北角附近より敵の猛射を受けた。氏は直に部下を伏せしめ沈着この方面の敵情を視察し上記の一角附近に敵の輕機關銃あるを發見した。此に於て分隊の全火力を以て之に急射撃を浴せ臨時に之を撲滅し益々部下を叱咤激勵しつゝ猛進を續けたる所數方面より敵の集中火を受け飛彈雨の如くたま／＼其の一弾は氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の適切なる射撃指揮に依り敵の輕機關銃を沈黙せしめ又その勇敢なる動作により大に小隊將兵の志氣を鼓舞して常に躍進の動機を與へ延ひては中隊戦勝の因を作りたるものにして氏の功績は正に抜群と謂うべく永く戦史に輝であらう。

氏は戦死の日歩軍曹に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 池尾 至

氏は兵庫縣城崎郡豐岡町の人にして大正二年十月八日生である。父を由藏亡母をさくと云ひ未だ獨身であつた。性温順にして寡黙至て親孝行者であつた。昭和六年三月豐岡中學校を卒業し昭和八年十二月歩兵第四十聯隊へ入隊し滿洲事變の爲渡滿各地の警備並に匪賊討伐に従事し功を以て勳八等瑞寶章従軍記章並建國功勞章を賜はつた。又在隊間銃劍術競技會に於て優勝し賞状を授けられ昭和九年十一月幹部候補生として歩兵伍長に任じ善行證書を附與せられ除隊となつた。

斯くて支那事變勃發するや長野部隊に應召し勇躍征途に就き昭和十二年八月中旬北支戰場に到着した。やがて十月七日より九月十二日に亘る馬廠附近の攻撃に於ては丁莊に進出し敵陣下に克く警戒の任を完うし又青縣に向ひ敵を急追して○の進出を容易ならしめた。其間氏は常に先任分隊長として克く小隊長を輔佐し率先勇敢機敏なる行動に依り部下分隊の志氣を振作した。



昭和十二年九月十三日乃至同月二十四日に於ける滄縣附近の戦闘に於ては第六中隊第二小隊第一分隊長として之に参加した。即ち前段は人合庄の戦闘後段は姚官屯の戦闘であつたが所屬中隊は二十一日午後六時より人合庄の攻撃を開始した。氏は克く部下分隊を掌握し指揮亦適切にして自ら先頭に立ち小隊長の意圖の如く分隊を誘導し水濼を超え勇敢に鐵條網を突破し率先敵陣地に突入して敵を粉碎し之を奪取した。而して尙も引續き部落の土壁に據て抵抗する頑敵を屠り大に戦果を擴張し更に豪膽不敵にも部落内に侵入して殘敵掃蕩に夜を徹し翌二十三日午前九時遂に人合庄の陣地を完全に奪取した。越へて翌二十三日は敵の主陣地たる姚官屯の陣地に對し攻撃を準備し同日午後六時より攻撃を開始した。豫め周到に設備せられたる敵陣地より各種火器の射注ぐ敵火は至猛を極め凄慘目を掩はしむるものがあつた。氏は嚴然として部下を激勵し常に分隊全員の狀態や隣接分隊の行動に氣を配り又敵の動靜に注意を拂ひ且地物を利用しつゝ逐次敵陣地に肉薄した。二十四日午前四時中隊が突撃に移るや小隊長に従ひ猛烈なる敵火を冒し分隊の先頭に立ちて敵陣地に壯烈なる突撃を

行ひ遂に之を奪取し更に頑強に抵抗する殘敵と奮戦格闘して之を撃滅し息つく暇もなく逐次後方陣地に突入を反覆し技に全線深陣地を奪取し之を確保中不幸にして敵の投擲せる手榴彈の爲重傷を負ひ遂に北支戦線の華と散つた。

氏は閑暇を得れば常に戦闘經過の概要就中部下の功績身上に關する事項を我が手帖に記述し假令劍電彈雨下にありても寸暇を得れば之等の記載は決して怠らなかつた。是れ蓋し部下を思ふ至情至愛の人ならでは不可能な事で氏の性格修養の凡ならざりしを證明するものである。噓壯烈鬼神を哭かじめ其慈愛や神に通じ克く一隊將兵の志氣を鼓舞し以て敵が津浦線沿線の最後の抵抗線と恃める堅陣を屠りし氏は惜くも聖戰の尊き犠牲となつたが天晴れ皇軍の精華軍人の綱鑑として仰がるべく其英靈は千古に生き其芳名は皇軍戰史に清き光を放つであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 稻葉 一男

氏は栃木郡下都賀郡分寺村の人にして大正三年十二月十一日生である。父を要一母をキセと謂ひ妻ハツとの間に長女和子と云ふ愛子がある。資性温良にして寡言責任觀念旺盛にして實踐躬行の人であつた。昭和四年三月郷里の小學校を卒業後栃木縣立栃木農學校へ入校昭和九年三月同校を卒業し家事に従事し郷里の青年團地方幹事在郷軍人分會第八班會計防空防護團第八班防毒班長及栃農射撃俱樂部幹事等の名譽職に就任し郷黨青年の中堅となつて居つた。氏は又柔道に熟達し講道館より初段の免狀を授けられた。小學校在學間御大禮記念上都賀郡小學校兒童成績品展覽會に於て成績優良に付褒狀を受領し昭和八年には夏期柔道講習會に皆勤し大日本武徳會栃木縣支部長より賞狀を又神宮體育大會射撃にて賞牌を昭和

九年には武道賽稽古に皆勤して栃農校友會長より賞狀を附與せられ農學校在學間は品行方正實習成績優秀に付又五ヶ年間は精勤に付校長より各々褒賞狀を授與せられて居る。昭和十年一月現役志願として宇都宮歩兵聯隊に入營し歩兵科幹部候補生に採用せられ翌十一年一月歩兵伍長に進級し滿期除隊となつた。

支那事變勃發するや召集令に接し坂西部隊大根田隊へ應召し昭和十二年八月下旬勇躍北支戦線へ出動する事になつた。

氏は兩親の一粒種であつたが出征に當り元氣で活動するが萬一戦死の場合は祖母さんは非萬歳を唱へて下さいと云ひ残り別れを告げた。

斯くて昭和十二年九月十六日より二日間婁桑舖附近の戰闘に参加し坂西部隊大根田中隊第二小隊第一分隊長として婁桑舖東南端に陣地を占領し爾後の攻撃を準備中であつた。中隊當面の敵は機關銃三挺機關銃二を有する約百名の兵力であつたが新なる敵は十六日午前五時頃より我左翼を包圍攻撃をなさんとする態勢に在つた。當時氏は第一線小隊左分隊長として能く部隊を掌握しありしが本情況を察知するや機先を制し包圍運動中の敵に對し猛烈なる射撃を指向し其包圍の企圖を挫折せしめ中隊主力をして豫定の攻撃に専念するを得しめた。是れ全く氏が戰機の看破適功にして神速機敏なる處置の賜であつた。

九月二十一日より二日間は大冊河畔王谷莊堡の戰闘であつたが所屬中隊は大隊の右第一線中隊として敵の十字火内而かも水深胸に及ぶ大冊河を強行渡河した。氏は右第一線小隊の左第一線分隊長として部下を叱咤激勵し積極的に小隊長を輔



佐し殊に斜左方向の敵の側防火を制壓すべく命令に接するや氏は敢然部下を督勵して之が制壓の任務を全うして其結果中隊の突撃動作は著しく容易となつた。

十月十一日より同月十五日に亘る間は氏にとりては最期の戰場たりし元氏附近瀧龍河の戦闘であつた。所屬中隊は大隊の左第一線中隊となり十二日午前五時半より北白樓北端に陣地を占領しありし敵を攻撃した。氏は右第一線小隊の第一線分隊長として戦闘に参加した。敵は衆を恃み頑強に抵抗し而かも其目視困難なりし爲友軍の攻撃容易ならざりしが氏は自ら目標の發見及射彈觀測をなさんと愆し率先勇猛果敢なる攻撃を續行した。敵は我分隊火力の熾烈なる制壓に堪えかね動搖の徴を認むるや氏は機を失せず部下分隊と共に敢然敵陣地に突入し接戦格闘中不幸にして敵彈の爲壯烈なる戦死を遂げた。

氏は出征後數回に亘り家族に通信して居るがお家の皆様！一男は幾多の苦戦と死線を越しましたが只今は元氣で保定に休養してゐます。神の御守護と皆様熱誠を込めた御祈願の賜と只々感謝の日を送つて居ります。尙愛妻に對しては別に云ふ事はない體を大切にして軍人の妻として耻ない様にして呉れ唯其れ丈だと書き送つて居る。

氏の祖父は鹿兒島戦争後の軍人であり父要一は近衛歩兵一等卒であつた。三代續いて軍職に身を奉じ義勇奉公の一念凝つて一家の信念となり氏の名譽の戦死を公報せらるゝや祖母は愛孫の遺言の通り萬歳を唱へたと云ふ事である。妻女は氏の出征時既に妊娠中であつたとの事だが出生すべき愛子は必ずや氏の英靈の守護に依り又家人の愛育に依り立派な日本人たり得べきは信じて疑はざる所である。氏や洵に皇軍歩兵の精華であり其偉大なる勳功は軍民の齊しく敬仰する所其芳名は萬古に語り傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章と且破格にも功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 井上松次郎

氏は名古屋市千種區田代町の人にして父を金松母をかねと稱し妻みわのとの間に三男一女を擧ぐ。明治四十年一月七日生れで人と爲り義務心強く殊に公共の爲めには骨身を惜まず盡力した。大正十年三月田代尋常高等小學校を卒業し同年十二月愛知速算學校に入り學ぶこと一年にして卒業和算の蘊奥を極め又一方十一年四月千種商業學校に入學十三年三月卒業し後ち家にあつて家業を手傳ひ青年團幹事などの要職を引受け社會公共の爲め努力し昭和二年六月には熱田神宮御神田奉耕者の囑託を命ぜられ其の名譽に感激し拮据勉勵奉耕を捧げた。

昭和三年一月現役兵として野戦重砲兵第二聯隊に入營し七月一等兵に更に同年十二月砲兵上等兵に進級伍長勤務を命ぜられ昭和四年十一月下士適任證書を附與せられ滿期除隊となり昭和九年勤務演習召集に應じ成績良好にして七月砲兵伍長に任官した。現役滿期後或在郷軍人會末森分會長或は青年團役員として公共の爲献身的に努力せし而已ならず身を持つること謹嚴として世人の信望を受け時の帝國在郷軍人會長鈴木大將を初め名古屋支部長又は青年團長等より賞狀及善行證書を受くること數度であつた。

昭和十二年九月支那事變のため應召するや長谷川部隊に編入せられ勇躍江南方面の征途に就き大隊本部書記として十月三日より大場鎮附近の戦闘に参加し此間藤田部隊の攻撃に協力更に劉家行に轉進して郭家宅攻撃の際は敵前約四百米の線にありて敵彈の下或は敵情監視に或は命令傳達に任じ熱心副官を補助して部隊の攻撃威力を發揚するに貢献する處偉大であつた。續いて十月九日以後瀧波部隊の副官長谷川少尉の指揮下に大隊書記として藤田部隊の右直接協力砲兵群に屬し攻撃を續行したが瀧波部隊本部は田都より妻家宅に觀測所を推進し敵迫撃砲彈の猛射を受くるに至りたるも氏は克く電話を

以てする報告の蒐集命令の傳達に任じ沈着且正確に其任務に精勵した。斯くて翌十一日には瀧波部隊長と共に前進觀測所たる孫家池に挺進したが同所は敵前三四百米の所にして敵の射撃熾烈を極め前方及び左右の三方向より飛來する彈雨は悽慘なるものであつた。氏は此の彈雨下に勇敢に其任務を完うし大隊の戰鬪に至大の效果あらしめ日既に没し射撃も亦休止せらるゝに及んでは戰時報告或は陣中日誌の記載に不眠不休よく副官を輔佐して事務の整理に任じ些の遺憾なからしめた。



斯くて翌十二日には早朝敵の機關銃射撃を受け時刻の推移するに従ひ益々劇烈となり、觀測所は敵の重要な目標として射撃の集中を被りたるも氏は終始よく副官を輔佐して積極的に活動し大隊の戰鬪を有功適切ならしめたる功績は甚大である。やがて秋の日の短かく黄昏に近き午後六時頃執務の最中飛來した敵の小銃彈に氏は左下腿に貫通銃創を受けたが尙も毅然として任務を繼續せんとした。然かし出血甚だしき爲め命ぜられて後退の已むなきに至り藤田部隊第一野戰病院に收容手當を受けたが傷部の經過良好ならず遂に同月十

九日を以て江南の花と散つた。

氏や緻密の頭腦を以て大隊書記の適職に當り執務格別勉勵社會に於ける豊富の經驗に徴し和算に於ける特有の妙技を揮ひ所掌の要務を迅速確實に處理せし不斷の功績甚大なりしのみならず戰時に際して敵銃砲彈下の裡勇敢に活動し大隊の戰果發揚に努め堅固なる敵陣地の粉碎に寄與したるの功績は拔群と謂ふべきである。

噫、皇軍の初期に於ける苦戰にのみ終始し其爾後に於ける大捷に對し氏をして快哉を叫ばしむる能はざりしかへすがへすも遺憾とする所なれども氏の英名や上海攻撃の激戰と共に永く青史の上に輝くであらう。

氏は即日砲兵軍曹に進級次で勳六等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 長谷川峰幸

氏は鳥取縣西伯郡五千石村大字諏訪の人にして父を重貞母をくらと云ひ明治四十四年八月三日を以て生れ未だ獨身であつた。大正十五年三月五千石尋常高等小學校を卒業翌昭和二年四月米子商學學校に入學昭和五年三月同校を卒業した。資性快活沈着にして豪膽且頗る几帳面であつた。昭和七年一月現役兵として松江歩兵聯隊に入營同年四月滿洲に派遣せられ各地の警備に或は匪賊討伐に従ひ昭和九年四月二十九日附を以て昭和六年乃至九年事變の功により勳八等白色桐葉章を賜はり同年五月歩兵伍長に任ぜられ善行證書を附與されて滿期除隊となつた。昭和十二年七月應召福榮部隊に編入せられ北支方面の征途に就き八月下旬二機附近の攻撃に於ては降雨のため道路及畑地は泥濘浸水して前進困難であつたが隊長として部下を掌握し勇敢に前進次いで至嚴なる警戒に任じ敵をして逆襲の機を得せしめずよく其任務を完うし次で八月三十一日王公嶺附近の攻撃に於て第一線分隊長として適切に部下を指導し彈雨の間勇敢に行動し以て小隊の戰鬪を容易ならしめた。更に九月四日東子牙嶺附近の攻撃に於ては中隊長村山少佐の指揮に屬し第二小隊輕機第六分隊長として午前七時行動を起し同十時小隊の敵に對し攻撃を開始したが第六分隊は堤防下の低地を前進する關係上敵陣地より瞰下せられ從て敵彈は第六分隊に集中し前進最も困難にして且又地質軟弱なりし爲め輕機射撃は甚だ困難なりしも氏は沈着萬難を排し或

は脚頭に黍殼又は高粱殼を敷くなどあらゆる工夫を凝らして射撃を續行敵自動火器或は迫撃砲を制壓しその射撃を不能ならしめ又屢々身を危険にさらして敵陣地を偵察し其の状況を小隊長に詳に報告し敵の配備重點を指摘し小隊の攻撃方向に關し意見を具申し以て小隊の攻撃を有利ならしむる等一意小隊長を輔佐し又時に中隊長との連絡絶ゆる場合あるや危険を冒して迅速に之が連絡を保持することに努めつゝも一進一止攻撃を



報國の鑑と仰がるゝであらう。
氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 西堀正道



氏は大正二年七月六日茨城縣東茨城郡吉田村吉田に生る。父を爲壽母をいよと謂ひ氏は未だ獨身であつた。資性温良意思極めて強烈にして至極親孝行で弟妹に對する慈愛亦濃かであつた。昭和三年三月水戸尋常高等小學校高等科を卒業し次で縣立水戸商業學校に入學昭和八年同校を第三位を以て卒業した。在學間皆勤賞狀三回學業優秀に依る賞狀二回を附與せられた。氏は講道館柔道部へ入部し昭和十年には三段を允許され三井鑛業所へ入所後も同柔道部の指導員として熱心指導に努め大に同所の武を向上發達せしめた。昭和八年四月より三井鑛山株式會社に入社し北海道上砂川三井鑛業所に勤務した。同年十二月現役兵として水戸歩兵聯隊に入營し間もなく滿洲事變のため同地派遣部隊に加はりて北滿各地に活躍し、翌九年四月内地に歸還し功に依り勳八等に叙せられ同年十一月歩兵伍長に任ぜられて除隊となつたが同十二年八月再び召集せられ石黒部隊に屬して八月二十七日勇躍征途に就いた。

昭和十二年十月一日より十日に亘る溱沱河々畔陳村附近の戰闘に際しては伊藤隊第一小隊第四分隊長として之に参加し同九日拂曉渡渉場偵察の任務を有する大黒曹長の指揮する將校斥候に加はりて出發した。當日は溱沱河は霧深く咫尺を辨ぜざる情況であつたが斥候長の指示に依り一切の武裝を脱し全裸となり河幅約千米を渡渉し敵前約八十米に近接し渡渉場を發見貴重なる報告資料を得て歸還した。翌日夜更に前記斥候を輔佐し渡河點の再確認及前岸の敵情偵察の爲再び同所に至り寒冷の水の中にあること約二時間敵情地形を詳細に偵察し殊に敵の警戒稍々疎なることを看破して之を報告し上級指揮官の決心を爲

すに有力なる資料を提供した。氏は勇敢積極的の行動と貴重なる報告提出とに依り石黒部隊長は特に賞詞を與へられた。同年十月十一日石家莊元氏附近の戦訓に當りては中隊の右第一線小隊の分隊長として午後零時三十分より孟村附近の敵を攻撃し敵機關銃等の猛射を物ともせず部下を激勵しつゝ躍進した。當時敵は土壁に據り銃眼を設け抵抗頗る頑強であつた。然かし我歩兵砲並に擲彈筒の支援射撃の下に前進を繼續し敵前七八十米に肉薄し小隊長の「突撃」の號令に應じ分隊を提げて將に敵中に突入せんとする一刹那不幸にして氏は敵機關銃弾に依り頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の剛膽勇猛なる氣魄は部下分隊を驅つて果敢なる突撃を實施せしめ遂に孟村の頑敵を粉碎して同陣地を確實に占領せしめた。

噫氏は永定河畔の戦訓以來拒馬河畔の敵を一蹴し不眠不休の急追撃に参加し常に率先部下を激勵して保定を占領し石家莊滹沱河畔の頑敵を屠りて志氣益々旺盛彈丸雨飛の下勇猛果敢拔群の武勳を奏し常に中隊戦力の中堅となり益々皇軍の武威を中外に發揚せんとする中道に孟村の一戦に玉碎せるは惜みても尙餘ありと謂ふべきである。されど氏が赫々たる武勳は不滅に輝き其英靈は護國の神と祀られ、出征以來父や妹に寄せたる信書は遺族の爲貴重なる精神資料ともなりて我家の守神と仰がるゝであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。尙講道館柔道部よりは四段を追贈せられた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 本郷幸太郎

氏は鳥取縣鳥取市西品治の人にして父を留吉母をとしと云ひ明治四十四年一月十八日を以て生れ其後故武弘の養嗣子として本郷家に入り家庭には養祖母かめの外妻清子との間に儲けし一女がある。大正十四年高等小學校を卒業直に鳥取農業倉庫の書記に就職し夜間は鳥取市夕松青年學校に通學して二年の後同校を卒業した。性温厚父母に孝にして品行方正、職務には殊に忠實にして農業倉庫勤務中にも善行を表彰せられ銀盃を一再ならず受領した。昭和七年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營四月滿洲駐劄の爲め渡航し十二月上等兵に進み翌八年三月十八日界嶺口附近の戦訓に於て跳彈擦過傷を受け爾後滿洲の警備に服し功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜り九年五月歩兵伍長に任官して退營した。

昭和十二年八月支那事變の爲め應召長野部隊中隊第一小隊に屬し北支方面に出征し九月十三日より滄縣附近攻撃に參與し九月二十一日夜所屬隊の人合庄東側敵陣地を攻撃するに方りては氏は左第一線小隊右分隊長として鐵道線路に沿ふ地區より敵の猛火を冒して勇敢に前進し遂に鐵道線路上の敵を驅逐した。而して翌二十二日拂曉攻撃に方りては豫備隊となり高梁畑附近に在りしが敵陣地よりする銃砲火の爲め第一線殊に左小隊正面は負傷者續出したので攻撃頗る困難であつた。之が爲氏の所屬小隊は右第一線として増加を命ぜられ勇躍第一線に進出した。此時氏の指揮する輕機關銃第五分隊は小隊の右翼に位置し敵の側防機關銃を制壓すべき任務を以て隣接杉本分隊と密接に連繫し敵が側防の爲設けたる掩蓋機關銃に對し迅速に射撃を開始した。然るに正面よりの敵火又熾烈を極めたが氏は毫も意とせず益々



勇敢に射撃を繼續し其の正確なる射撃は遂に敵側防火を制壓沈黙せしむるに至り以て小隊の攻撃前進を容易にし續いて突撃を執行するに至らしめた。而して小隊が將に敵陣に突入せんとするや機を失せず氏も亦分隊を率ひ勇敢に前進せしが水深前三米の地點に於て敵の一弾は氏の右腰部より左腰部を貫通した。然かし氏は屈せず尙も前進せんとするを衛生兵に收容せられ手當の上後送せられしが翌二十三日野戰病院に於て遂に惜しくも華北の花と散つた。

氏や恪勤精勵奮には滿洲事變の功に依り勳八等に叙せられ今次又北支の聖戰に従ひ每戰勇闘其の職分を完うす。殊に其の最期に在りては沈着克く適切なる射撃指揮を以て敵側防火を制壓し全員の士氣を鼓舞し遂に小隊突撃敢行の動機を作る其の功績誠に拔群にして其赫々たる武勳は永く芳を青史の上に留むるであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 富田寅男

氏は姫路市大和町の人にして父を熊吉母をしをと云ひ大正三年四月二十九日の生れで未だ獨身であつた。性着實沈勇にして寡言父母に仕へて孝心厚く世人の風評も良好であつた。昭和四年三月水上小學校高等科を卒業後姫路市内に於て指物大工見習として弟子入し入營時に至つた。氏は學業操行共に優等にして各學級を通じ級長を命ぜられて居た。

昭和十年一月歩兵第三十九聯隊へ入營日夜軍務に精勵し特に銃劍術に熟達し前後三回に亘り賞狀を附與せられ十年十二月には上等兵を命ぜられ翌十一年十一月歸休除隊に方りては下士適任證書並善行證書を附與せられ除隊後は神戸市川崎航空機株式會社へ機械工として入社した。

昭和十二年七月廿七日召集令狀に接し沼田部隊へ應召し勇躍津浦戰線に赴いた。

八月二十五日乃至九月十四日の間は馬廠附近の戰闘に於て分隊長として三間房附近の警備に任じ其間森下將校斥候の要員として馬廠河堤防附近の陣地偵察に従事した。



を撃退した。

九月二十七日より十月五日迄は德州に向ふ追撃戰闘であつたが干庄、劉八里、小屯附近の戰闘に參與し常に部下を適確に掌握し率先勇敢に奮闘し克く其任務を盡した。

斯くて十月六日より廿九日迄は津浦線に沿ひ南進し二十里舖附近の警備に任じ爾後黃河北岸に於て掃蕩戰に従事した。

九月十五日乃至同二十六日の間に滄州附近の戰闘に従事した。氏の所屬部隊は二十三日午後十一時行動を開始し午前零時三十分攻撃前進二十五日拂曉に亘り張新庄を攻撃した。當時敵は數線に亘り陣地を占領し氏の中隊は大隊の右第一線となり攻撃を敢行し張新庄占領後は數回に亘る敵の逆襲に對し重要正面を擔當し之を撃退した。氏は本戰闘間分隊長として敵主陣地に突入するや所屬中隊の中央正面に於て猛威を振ひありし敵の迫撃砲陣地に突入して奮戦力闘其二門を奪取し次で分隊を掌握して逐次敵線を突破し遂に張新庄の部落東端を確實に占領した。敵は要員を失ひ無念に堪えざるもの如く我に數倍せる兵力を以て執拗なる逆襲を反覆したが氏は沈着凜然として部下を指揮し死傷續出にも屈せず率先奮闘遂に之

其後所屬中隊は大隊の右第一線となり十一月八日午前五時行動開始午前九時攻撃前進に移り九日午前五時三十分苗家を占領した。所屬大隊は張家を占領したる後引續き苗家の敵陣地を攻略せんと欲し八日薄暮敵前至近の距離に近迫したが主陣地には勿論村落の周壁外に設けたる敵の掩蓋機關銃より猛射を受け突撃は遺憾乍ら不成功に終つた。氏は此戦間敵の掩蓋機關銃に對する肉薄攻撃を志願し敵の十字火を物ともせず之に接近し背後及蓋口より手榴弾を投じて之を覆滅し且敗走中の敵二名を刺殺し完全に目的を達成した。其豪勇機敏の動作は獨り友軍の志氣を鼓舞したるに止まらず敵膽を寒からしめた事も當然であつた。併し敵は無念に堪えかねてや圍壁外に出撃し來り手榴弾を猛投した。之が爲氏は腹部腰部及大腿部に數創を受けた併し氏はそれにも屈せず大聲を以て 天皇陛下萬歳を三唱し更に軍人に賜はりし勅諭の二項目迄奉唱した。將兵は暫し無量の感激に打たれたが氏を救はんとして壕内に引入れんとすれば氏は銃を確かと握り締め富田は死すとも此處を去らずと聞入れなかつた。戰友等は涙と共に氏を慰めつゝ壕内に運び手厚き看護を加へたが英魂を戰場に止め遂に護國の華と散つた。果然將兵の敵愾心は天を衝き猛攻に次ぐに猛攻を以てし堅壘を屠つて高く日章旗を翻へすに至つたのも氏の尊き犠牲が其礎石を爲したものである。

氏の豪勇に就き尙特筆すべきものがある。それは將校斥候要員として九月五日の行動である。小王莊附近の敵は頑強に抵抗し八月廿五日以來の戦況更に進展せず且敵は馬廐河の堤防を決潰して附近一帯を氾濫させた。而して小王莊に通ずる唯一の道路は各所に於て切斷され軍隊の近接困難となり敵情地形の偵察は殆ど不能となつた。茲に於て歩兵砲小隊長は獨斷之を偵察すべく九月五日午後一時頃小王莊の北方約八百米に到りし時、同地に於て敵情監視中なる氏は如何なる危険をも忍ぶべきに付是非偵察に隨行し度しと願ひ出た。其決意牢固なるものあるので氏の小隊長より認可を受け兩名は丸裸となり氏は銃剣のみを携行し敵の嚴重なる監視下に濁水に飛び込んだ。濁水は滔々たり。泥濘は腰を没する而かも時々狙

撃を受けると云ふ有様で氏は泥土上を匍匐しつゝ半ば水に浸された高粱畑に身を潜め前後三時間を費して敵前四、五十米に接近し詳細に敵情地形を偵察して之を報告し翌六日の敵陣地破壊射撃並に大隊爾後の前進計畫に緊要無二の資料を提供した。

氏は十月一日附を以て下士官補充として歩兵伍長に任ぜられたが更に拔群の功に依り歩兵軍曹に任じ勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 織田 三重

氏は長野縣諏訪郡玉川村の人にして父を類藏母をとよ次と云ひ大正三年六月七日を以て生れ未だ獨身者であつた。昭和四年玉川尋常高等小學校を卒業し續いて諏訪中學に入學昭和九年三月同校を卒業の後上京某會社社員となつた。性質温良にして少年期より深く文學を好み日常生活は多く沈黙考して居たが一度物に感ずれば意氣昂然たるものがあつた。昭和九年十二月幹部候補生要員として名古屋歩兵聯隊に入營同月北滿守備兵として派遣せられ滿洲の警備に或は土匪討伐に任じ翌十年十一月歩兵伍長に任官除隊となつたが功により勳八等瑞寶章を賜はり除隊後再び上京瀧野川區田端清水商會に勤務中昭和十二年八月應召遠山部隊に編入せられ北支方面の征途に就き九月十六日には久保隊第三小隊長官下准尉の指揮下にあつて分隊長として南泊附近の攻撃に參與し續いて九月十七、十八日大石橋派縣附近の戦闘に於ては前記職務を以て當初は豫備隊となり大石橋を警戒しありしが翌十八日には左第一線小隊に屬して敵を攻撃し派縣を占領した。更に九月二十一、二十二日に亘る大世河々畔黃村附近の戦闘に於ては二十一日午後十一時黃村北側陣地向ひ右第一線小隊の分隊長と

して先頭に立ちて攻撃前進し大冊河を渡渉し翌二十二日午前零時三十分敵の第一線陣地に突入引續き第二線陣地に向ひ先頭にあつて分隊を激勵しつゝ猛進したが鐵條網の爲前進阻碍せらるゝや更に分隊を激勵して敵前二十米に達した。而して敵の熾烈なる十字火を受くるも意とせず率先鐵條網に近接圓匙を以て之を破壊せんとしたるも容易に目的を達せず致に於て剛膽にも身體を杭柱に衝撃破壊せんとしたる時右胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。氏は突撃の度毎に先頭に立ちて分隊を指導激勵し以て陣地奪取を容易ならしめたる功績は正に拔群であつた。

氏や旬日に亘り不眠不休且給養の補給思ふに任かせず僅に粟甘藷を附近の畑に求めつゝ北支五十餘里を席捲し疲勞困憊の部下分隊員を受撫し激勵特に大冊河渡河に當りては月明の下に水深胸に及び掩蓋機關銃の猛十字火を浴びつゝ渡河を敢行し遂に堅陣に突入した。

部下皆感激激衆心打て一丸となり流石の頑敵を粉砕せるは實に氏の犠牲的奮闘の賜であつた。定に是れ聖戦の尊き人柱であり軍人の勳鑑である。其芳名や永く皇軍戦史を飾るであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。



陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 岡田直

氏は茨城縣久慈郡太田町の人にして大正三年五月十六日生である。亡父を熊太郎母をあぐりと云ひ氏は未だ獨身者であつた。資性温順にして友愛の情厚く品行方正にして風評良好であつた。運動に趣味を有し學生時代には萬能選手の名ありて庭球野球ランニング排球往くとして可ならざるなく各種競技に出場してカップメタル等實に數十個の賞與を受けて居た。昭和三年三月郷里の小學校高等科一年を修了したる後縣立水戸商業學校に入學し後東京府立第一商業學校へ轉校昭和八年三月同校を卒業した。昭和十年一月水戸歩兵第二聯隊に入營し

翌十一年七月十九日歩兵伍長を以て歸隊となつた。



支那事變勃發するや石黒部隊へ召集せられ勇躍北支戦線へ出動九月下旬大冊河畔石頭附近の戦闘に於ては九月二十二日大隊豫備隊として大冊河渡渉後午前十時三十分より三谷莊部落の堅固なる陣地攻撃の爲第一線小隊に屬し前進中敵の自動火器より猛射を受けたが氏は泰然自若力戰奮闘し遂に敵陣地に突入するや氏は小隊の最先頭に立ち得意の銃劍術の精練を以て頑敵を刺殺し以て中隊突撃に異彩を放つた。

十月十一日元氏附近、陳村の戦闘に於て午後七時三十分夜間突撃に當りては小隊の先頭に立ち第一及第二次突撃には第一小隊の左分隊長として奮闘し特に第一回の突撃に當りては小隊主力と稍離隔せる分隊を指揮し敵の右側背に迫り猛然として群る敵中に突入し縦横無盡に敵兵と格闘し其數名を刺殺し以て小隊の突撃を最有効ならしめ小隊將兵の激賞を受けた。翌十二日午前十一時所屬中隊は陳村附近に於ける戦死傷者蒐集の目的を以て前進中有力なる敵部隊と遭遇し陳村及其

西方無名部落より猛烈なる射撃を受けた。氏は右第一線小隊の右分隊を指揮し陳村部落西南端の敵情搜索の爲斥候として挺進し鐵道線路に迫りつき更に單身部下兵員の前方約五十米に前進して偵察中傍らの部落より我に迫り來りし敵數名を射殺又は刺殺し該部落内に進入して敵狀を詳かに搜索し適確なる報告を呈出した。其豪膽不敵の行動は小隊全員の驚嘆する處であつた。氏の貴重なる報告はやがて中隊の戰鬪を最も有利ならしめたる素因となつた。其後氏は中隊の最右翼を攻撃前進中西方無名部落よりする敵射弾の爲不幸にして右側胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。當時所屬部隊の正面には敵軍約二萬の大兵を以て必死の抵抗を試みたる由であるが寡兵克く衆敵を撃破し之を潰走せしめたる所以のものは是れ全く氏の如き忠勇武烈の將兵が死鬪を以て購ひ得たる貴重なる戰捷であつた中隊長は此戰鬪に於て足部貫通の負傷を受け飯島少尉が中隊長代理となつたが飯島少尉は氏の臨終を録して「氏は死に臨み人は一代名は末代と言ひ殘し天

皇陛下萬歳を唱へ瞑目したとある。あゝ年々歳々人生れ人死するや夥し而して萬代に芳名を殘すものは眞に曉天の星も同様である。縱令百歳の壽命を保ち得たりとも無爲徒食に終らんか。是れ皇國に生れ出で乍ら空しく土に還へるものにして貴き使命を果し得ざりしものと云ふべきである。氏や尙春秋に富みながら天垂翼贊の爲に皇猶扶翼の爲に各靈全身を捧げて仕舞つたが神皇より新たに悠久清淨の生命を與へられた。芳名は千古に芳ばしく英靈は護國の神として又遺族の守護神として絶間なく活躍し得るであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 勝 又 實

氏は明治四十五年五月十日宮城縣遠田郡涌谷町宇新町に生れ仙臺市六十人町に居住して居つた。父を掃部と云ひ母は數年前に歿し氏は未だ獨身者であつた。氏は性質温順にして沈勇親に仕へて孝心深かつた。母は氏の高等女學校教職に就任前後に歿したがその病臥中は晝夜不眠看護に當り衣服を脱せざること月餘細心周到至れり盡せりの世話をなし隣人皆嘆賞し合つたと云ふ事である。



大正四年四月宮城縣立石巻中學校に入學昭和五年三月同校を卒業次で日本體育會體操學校高等科に入學同八年同校を卒業して師範學校中學校高等女學校教練科教員免許狀を下附せられ同年四月より朝鮮の某道廳に奉職入營時に及んだ。昭和九年一月獨立山砲兵聯隊に入營して幹部候補生を命ぜられ十年一月砲兵伍長に任ぜられて滿期除隊となり同年四月より仙臺市吉田高等女學校教員を拜命した。昭和十二年九月支那事變の爲召集を受け間もなく宇野部隊に屬し征途に上つた。

昭和十二年九月二十八日より石家莊及滄陽河々畔の會戰に際しては中隊の指揮機關に屬して中隊長の許に在り各部隊との連絡命令報告の傳達に任じ勇敢機敏に動作し克く中隊長の戰鬪指揮を輔佐した。又十月二十五日は中隊長宇野大尉の指揮に屬し左追擊隊に加りて敵を猛追撃し歩兵部隊と山砲隊との間を屢々往復して兩隊の密接なる連絡を確保した。斯くてこの日午後四時頃山砲隊は左第一線たる森本部隊中の一隊に配屬の命令を受くるや機を失せず之を山砲隊長に傳達せんがため木曾西側高地に在りて敵と對戰中なる山砲隊の位置に到らん

として東回嶺を通過の際同部落内に於て突如敵と衝突し敵弾のため右腹部に貫通銃創を被りたるも氏は毫も屈せず下馬し拳銃を以て敵と對戦大奮闘して遂に敵を撃退したが更に又右胸部に盲管銃創を受けた。氏は鮮血淋漓たる身を以て尙も前進し遂に目的地に達して山砲隊長に命令を傳達し完全に其任務を終了して其場に昏倒失神状態に陥り後衛生隊に收容せられたるが二十七日午前三時野戦病院に於て惜くも華北戦線の華と散つた。

氏の機宜に適する確實なる通報傳達が雨後の歩砲協同に多大なる効果を齎したるは云ふまでもなく其参戦以來常に崇高なる責任觀念の發露と攻撃精神の旺盛なりしは天晴皇軍の精華であり軍人の錨鑑たるものである。今や威風凛々たる其雄姿に接する能はずと雖氏が動功は皇軍華北戦史に特筆せらるべく其芳名は千載の下大和櫻と謳はるゝであらう。而して氏が英靈は永世に生き皇運を扶翼し奉ると共に遺族の守護神として一家の繁榮を加護し又數多の教へ子の胸に深き感激を與へ純忠報國の赤誠を誦養させずには措かぬであらう。

氏は即日砲兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 谷川 佳雄

氏は兵庫縣美囊郡別所村石野の人にして大正元年九月十四日に生れ未だ獨身者であつた。父を佳治母をはると稱し大正十四年三月神戸市大關尋常小學校を卒業し直に村野工業學校に入學昭和六年三月同校を卒業爾後三井物産株式會社に入社し大阪支店埠頭事務に勤務してゐた。資性明朗快活にして辯舌亦流暢であつた。父母に仕へて孝隣人にも親切であつた。幼時佛徒として修行して居たが兄歿するに及び父母を養ふは我が責任なりとて斷乎として還俗實家に歸つた。又三井物産

に入社當時關西の大風水害に會つたが氏は埠頭事務所より單身濁流を冒して大阪支店に到り多數の人士を救ひ埠頭事務所長及大阪支店長より表彰されて居る。以上の例の如きは氏の識見及沈勇果斷の一端を物語るものである。

昭和六年十二月幹部候補生として歩兵第三十九聯隊へ入營し昭和八年十一月歩兵伍長に任官歸郷した。

昭和十二年八月支那事變のため應召して沼田部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に上つた。八月下旬より馬廠附近の

戦場に參加したが八月二十六日泥濘膝を没する悪路を踏破して部隊主力に追及し爾後所屬の淺野隊は豫備隊となるや分隊長として三間房北端道路上に掩體を構築して警戒に任じ能く糧秣の不足や惡水其他による困苦缺乏を克服して任務を完うし續いて八月三十一日以後淺野隊は胡連莊警備に任じたが其間も敵情監視として各小隊二日交代にて浸水腹部に達する地を経て刑家營監視所の勤務に當り其の間敵の迫撃砲及小銃輕機銃弾は終始飛來せしが此危地に於て下士官或は斥候長として立派に其の任務を完うした。

昭和十二年九月十五日より同二十四日に亘る滄州附近の戦場に於ては第一分隊長として大隊砲及び速射砲の掩護に任じ敵前二百米而かも雨下する敵火の下地物の據るべきものなき平坦地に各個の掩體を構築し以て三十時間の長きに亘り敵の小銃・自動火器或は迫撃砲弾を浴びながら沈着豪膽部下を掌握激勵し以て大隊砲及び速射砲をして安全ならしめた。次で張新庄附近の攻撃に當りては九月二十三日正午行動を開始し淺野隊左第一線小隊第一分隊長として小隊の最左翼を前進したが土地の泥濘と暗夜の行動なると且又敵の猛射とに依り動もすれ



ば連絡を失ひ部下の掌握亂れんとする状況に氏は克く部下を掌握して左翼を警戒しつつ水濠及び鐵條網を超えて前進した。然るに二十四日午前二時頃左側より喇叭を吹奏しながら我に向ひ前進し来る部隊あるも四面暗黒被我の識別困難なるため合ひ言葉を以て確めたるに「日本兵多々有」と連呼したる故之を小隊長に報告すると同時に獨斷之と對戦中小隊長來着谷河分隊は第六分隊と共に敵を阻止すべき事を命ぜられ奮戦此の時正而よりする敵の猛射と一方逆襲部隊よりの射撃により十字火を浴びながら泰然部下を激勵しつつ應接しありしが暫くして敵約百名は漸次近接しつつあるを目撃し勇敢にも「突撃に」と叫び率先散兵壕を超えんとする一刹那胸部に貫通銃創を受け其場に倒れた。然かし氏は自己の重傷にも拘らず部下井口上等兵に分隊の指揮を命じ又小隊長に「俺の戦死した旨を報告せよ」と告げたる後黎明頃遂に瞑目した。氏が敵の逆襲に際し採つた機宜に適する處置及分隊を掌握しての奮戦就中約百名に上る優勢なる敵を拒止し其の企圖を挫折せしめ以て中隊主力の攻撃を容易ならしめた功績は實に披群と謂ふべきである。又死に直面するも從容として後事を指示して遺算なからしめんとせしは崇高なる責任觀念に基くものにして武人の勳鑑である。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 宇野 高一

氏は愛知縣額田郡豐富村大字夏山寺平宮本實徳の出身で父榮治郎は既に歿し妻をいわと云ふ。明治三十七年七月二十七日を以て生れ大正六年夏山尋常小學校を卒業し續いて豐富小學校高等科に入り同八年三月卒業の後蒲郡熊熊商店に勤務してゐたが大正九年郷里に歸り農業に従事すること一年、明大時町千賀工場に入り勤務する内徴兵として大正十四年一月

三島野戰重砲兵聯隊に入營同年十二月上等兵に進み翌十五年十一月下士官任證書を授與せられ歸隊除隊した。爾後農業に従事し時に青年訓練指導員等に服し超えて昭和九年後備役召集の際成績良好にして十月十五日砲兵伍長に任官した。

昭和十二年七月支那事變の爲め應召上海方面の征途に就き十月三日より同月二十五日に至る大場鎮附近の戦闘には瀧波部隊の第四中隊第四砲車分隊長として劉家行、小陸宅、八房宅、西橋橋施宅等の陣地に於て攻撃に參與し敵陣地據點の破



壞に任したが射撃正確で敵に多大の損害を與へ我が歩兵の前進を容易ならしめた。特に八房宅の陣地より馬橋宅敵陣地に對する射撃は宇野分隊長の砲車の專任で二十一日に約七十發二十二日に百三十發の射撃は極めて正確に敵陣地の要部を破壊し之がため敵をして遂に抵抗を斷念せしむる素因をなしたものであつた。又馬橋宅李碩宅の陣地は大場鎮街道にある敵の最も重要な防禦據點で友軍歩砲兵を以て月餘に亘り攻撃したのであるが尙陥落せなかつた程の堅固なものであつたが氏の所屬中隊の射撃後は二日間にして破壊成功することを得た。其正確有効の射撃は主として氏の指揮する分隊の發

射したもので之が爲氏は瀧波部隊長より特に賞詞を與へられた。又十月二十六日以後蘇州河の渡河及南方浦東の封鎖戰に於ては藤田部隊右側砲兵群にありて陣地要點の破壊等に任じ大場鎮附近末期戦闘及び追撃戰に多大の貢獻を爲した。而して三十日所屬聯隊が藤田部隊右側砲兵群に屬し友軍歩兵に協力すべき任務を帯び錢家宅附近に陣地進入をなさんとするや氏は第一線砲車分隊長として午前七時宿營地たる眞如鎮を出發聯隊の最先頭にありて近距離に残存する敵前を前進し柔軟

なる畑中の小徑を改修しつゝ幾多の困難を排除して行程二軒を約二時間を費し漸く陣地に到着することを得た。茲に於て分隊長は率先部下を指揮し敵眼に暴露しながら掩體の構築作業及び射撃準備に従事してゐたが午後零時三十分偶々敵小銃弾は飛來し氏の頭部に命中して鐵兜を美事に貫通し頭腦内に侵入遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や瀧原水流縦横の地區を進撃し砲兵としての戦闘に終始す其の勞苦の尋常に非ざりしこと察知するに難からず而かも常に萬難を排し勇躍して所命の任務を達成す堅忍不撓の勇士と謂ふべし。殊に其の最期を於ける氏等分隊員の行動は沈着果敢實に聯隊全員の模範而かも氏が一死の節與かつて最も多きに居る其の功績や拔群亦永く青史の上に芳香を留むるものと謂ふべし。

氏は即日砲兵軍曹に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 黒崎佐太雄

氏は茨城縣東茨城郡河和田村の人にして大正三年五月十日生である。亡父を佐喜雄母をあさと云ひ氏は未だ獨身者であつた。資性正純にして氣概に富み幼時より軍人を好んで居つた。昭和三年三月河和田小學校を卒業し直に縣立農學校に入學し昭和七年三月同校卒業昭和九年一月現役兵として水戸歩兵聯隊に入營し同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられ十一年一月仙臺陸軍歩兵學校へ派遣せられ所要學術科を修得して同年十一月歸隊翌十二月伍長に任官した。

支那事變起るや石黒部隊に編入せられ勇躍北支戦線へ出動した。昭和十二年九月十二日より同月十五日に亘る永定河々畔北相各莊附近の戦闘に於ては中隊指揮軍に屬し十四日敵砲雨飛の中に永定河を渡河し連絡困難なる森林地帯に於て機敏

適切に敵砲下を攻撃し克く中隊長と各小隊長間の連絡に任じて中隊長の戦闘指揮を容易ならしめた。九月十五日及十六日に於ける北相附近の戦闘に於ては渡河後敵の退路遮断の爲行動したが氏は克く暗夜にも拘らず奮勵努力常に中隊長と小隊長間を連絡し中隊の任務達成上貢献する所甚だ大であつた。超えて同月二十一日乃至三十日の大冊河々畔石頭附近の戦闘に於ては二十一日の大冊河西方高地夜襲に際し中隊長と共に左側方より敵の對戰車壕に飛込み午前四時三十分遂に中央

突角陣地を占領し爾後追撃に方りては疲勞困憊の身を驅りて適切敏活に命令傳達に任じて中隊戦闘を有利に進展せしめた。

昭和十二年十一月十日及十一日の大名附近の戦闘に於ては中隊長栗原中尉の指揮に屬し中隊の命令受領者として第一大隊本部と共に接敵行軍中所屬中隊は前方に銃聲を聞きつゝ駆歩を以て急遽漳河東端に到着して居つた。此時所屬中隊は第一大隊に復歸し其右翼に増加すべき旨部隊命令に接せるを以て氏は大隊本部位置より所屬中隊方向に疾驅し大聲にて大隊命令、第四中隊は第一大隊の右へ増加敵の退路を遮断すべしと前後三回に亘り連呼すれば中隊長は兩手を舉

げ「宜し承知」と應答を與へたが哀れや氏は左側方より飛來せる敵弾のため頭部に重傷を受け壯烈なる戦死を遂げた。氏は熾烈なる敵砲下を冒し沈着勇敢に此重要命令を確實に傳達せる爲所屬中隊は適時敵の退路を遮断し赫々たる殲滅戰の効果を收め得た。

白刃を振つて敵陣に斬込むは素より壯烈であるが單身彈雨を冒して軍の命脈を繋ぐべき傳令勤務を正確迅速に遂行する



は其頭腦に於て其行動に於て人知れぬ苦勞を伴ふものである。氏は選ばれて指揮班要員となり參戰以來晝夜不眠不休の努力と決死的行動を以て各戰に其重要任務を完全に遂行した。今や聖戰の尊き犠牲となり所屬部隊をして赫々たる戰勝を獲得せしめたが所屬隊將兵の感謝感激は勿論皇國軍民は共に氏に感謝すべきである。其功績や皇軍の華北戰史に光彩を添ふべく其芳名や千古に語り傳へらるべく其英靈は護國の神と仰がるべからう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 窪田 嘉一

氏は長野縣下伊那郡龍丘村の人にして父を梅吉母をうしよと稱し大正四年十月一日生れで未だ獨身者であつた。人となり意志強固にして寡言實行力に富み一家の柱石となつて居た。昭和五年三月龍丘尋常高等小學校を卒業し補習學校に學びて二ヶ年の課程を修了又青年學校に入學し所定の課業を修習した。補習學校卒業後は家に在つて父母を助け農業に従事してゐた。

昭和十一年一月歩兵第五十聯隊に入營同四月下士候補者を命ぜられ七月一等兵に進み同年十二月仙臺教導學校に入校上等兵に進級すると共に伍長勤務を命ぜられ日夜學術に精進中であつたが支那事變勃發により原隊に復歸し遼山部隊に編入せられ勇團北支方面の征途に就いた。氏は關隊第三小隊第四隊長として先づ九月十六日馮頭嶺より出撃したる敵部隊に對し擲彈筒を以て有効適切に阻止射撃を行ひ遂に敵を潰走せしめた。越えて九月二十日より大冊河々畔黃村附近の頭敵を攻撃しよく小隊長を輔佐して敵彈雨飛の間沈着勇敢に奮戰擲彈筒の全威力を發揮し小隊の黃村突破を容易ならしめ又潰走

する敵中深く突入して敵を刺殺し或は射殺し以て戰捷の勳機を興へ爾後保定附近の殘敵を掃蕩し九月二十五日以降屬々道路偵察或は敵情地形の偵察として斥候長となりよく其任務を達成し適時指揮官に戰團指導上貴重なる資料を提供した。十月十日困難なる渾沱河の徒渉を敢行して敵を追撃し更に石家莊元氏及順德附近の戰團には列車により迅速果敢なる追撃を以て敵の心膽を寒からしめた。

十月十七日馬頭鎮附近の敵を攻撃するに方りては其有効なる擲彈を以て敵の縱深陣地を適切に制壓し之に大なる損害を興へ遂に敵をして抵抗を斷念せしめ中隊戰捷の素因を作り翌十八日列車追撃隊として磁縣驛に突進し敗殘部隊の抵抗を排除し之を潰滅に陥らしむる等其功績は甚大であつた。

十月二十日夜漳河を涉りて敵中深く挺進せる田鎮隊は優勢なる敵に乗せられ苦戰中なりしたため氏の所屬大隊は之に増援し午前二時敵を驅逐して其要地たる東南高地を占領したが拂曉前より十數倍の敵は奪回のため猛烈に攻戦し來り該高地は敵の山砲迫撃砲の集中火を受け光景轉た悽愴を極めた。此時氏は武井小隊長の指揮に屬し南方高地に陣地を構築中であつたが敵は拂曉間際より棉畑を匍ひ地隙に添ひ我陣地直前に肉薄して來た。我は重機關銃を以て之に絶大なる損害を興へたるも敵は幾度か新手を加へ多勢を頼んで前進し遂に手榴彈戰を演ずるに至り我亦死傷續出せしも氏は沈着克分隊員を掌握激勵して自ら手榴彈を投擲して奮戦し又適時敵情を小隊長に報告する等小隊長の戰團指揮を容易ならしめた。やがて小隊長の突撃號令一下勇躍



敵中に突入せんとせし刹那頸部に貫通銃創を受け其場に昏倒したが確と銃を握り締め突撃の氣勢を示しつゝ名譽の戦死を遂げたのであつた。

氏の隊長關大尉より遺族に寄せたる弔慰文に「(前略)窪田君とは小官深き宿縁あり昨秋同君仙臺教導學校入校時小官區隊長として君を訓育したる次第従つて小官の信念氣風は能く君に徹し今秋動員に際し學校より歸隊後分隊長として小官の意圖の如く活躍し中堅幹部として誠に心強く其人格と識見と相俟て將來期待せし次第に有之候然る處戦の半に君を失ふは誠に痛惜に堪へず云々」とありて師弟の情義は亦格別であつたに違ひない。

嗚呼氏や沈勇剛膽既に敵を呑み慧眼機敏克く戦機を看破し而して卓越せる射撃技能を發揮して戦勝の途を拓いた。寔に是れ皇軍歩兵の精華であつた。今や聖戰の尊き犠牲となつたが其功績は天晴皇軍の華北戦史を飾り其名は千古に芳ばしく其英靈は萬世に生き護國の神として又一家の守護神として不斷の加護を與ふる事であらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し、次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 楠戸孫太郎

氏は岡山縣都窪郡豐洲村の人で大正五年三月十六日生れである。實父は萬龜治實母はきんと云ひ氏は未だ獨身者であつた。實直剛毅進取の氣象に富み孝心厚く且勤儉を旨とし入營中も屢々種々の物品を送つて父母を慰めて居た。又友情頗る厚く友人の困窮を見ては必ず盡力して之を救ひ助け如何なる犠牲をも惜まなかつた。昭和五年三月郷里の高等小學校を卒業同七年四月岡山支武館中央道場に入り柔道を學び二段の技術に進み又一方青年團員、消防組員等として郷黨の信頼を

受けた。同十年六月現役志願として歩兵第七十七聯隊に入營し在隊間は終始軍務に精勵殊に射撃及銃劍術の成績優秀にして屢々賞狀賞品を附與された。

昭和十二年支那事變勃發するや間もなく應召森本部隊に屬し勇躍征途に就いた。八月十九日揚子崗の戦闘に於ては豫備隊に屬し分隊長として日夜の別なく警戒に任じ克く部隊戰闘司令所を安全ならしむるを得た。斯くて九月十五日より翌十



六日に亘る寶店鎮附近の陣地攻撃に於ては深野部隊の第一線小隊第一分隊長として参加し十五日寶店鎮を占領し引續き望嶺攻撃に方りては迂回隊として敵の左側背より攻撃すべき獨立任務を帯び行動するや克く中隊長の意圖を體し適切に部下を指揮掌握し且勇猛果敢に敵の背後を衝き敵に多大の損害を與へ之れを敗走せしめた。此時俄然左後方に優勢なる敵部隊現はれ我れに向ひ逆襲し來りしが氏は冷静沈着輕機銃手をして即時之を猛射せしめ美事に此敵を撃退した。之が爲中隊は望嶺占領の端緒を開き得爾後の攻撃は大に容易となつた。引續き寶店鎮攻撃には左第一線小隊の右分隊長として参加前進

中敵前百五十米の地點に達するや敵の射撃は頗る猛烈を極め我が死傷續出前進愈々困難となり中隊長が已むなく掩體の構築を命ずるや氏は單身匍匐前進して敵情及障礙物の位置を偵知し之れを小隊長に報告すると共に機を失せず輕機銃手をして猛威を振ひありし敵據點陣地を制壓し遂に之を沈黙せしめた。之が爲中隊は態勢を挽回し着々突撃準備を完了し午後三時愈々突撃の機熟するや氏は部下分隊を提げて突撃を敢行すべく將に前進を起さんとする一刹那不幸敵の一彈は飛來胸部

を貫通し茲に壯烈なる戦死を遂げた。

氏の戦場に於ける態度は實に剛膽にして而も沈著、其の行動は積極的にして常に敵の意表に出で難局を打開し以て終始中隊の戦闘を有利に導いた。宜なる哉部下亦氏に絶大なる信頼を置き必勝の信念の下に活躍するを得た。就中共最後の戦闘たる優勢なる頑敵に對するや彈丸雨飛の中毫も屈せず部下を叱咤激勵し遺憾なく歩兵の本領を發揮したるは是れ正に磐根錯節に利刀を試みたものと謂ふべきである。惜しい哉突入の直前戦場の華と散つたが併し氏の剛勇無双の行動は部下を奮起せしめ間もなく敵を粉碎して光輝ある戦勝を得しめたのである。嗚呼や氏が風發叱咤の雄姿を見る能はずと雖氏が忠勇武烈の精神は萬古に生き天晴軍人の勳鑑として永く皇國の青史を飾るであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 山根修一

氏は兵庫縣城崎郡田鶴野村の人にして大正三年二月十五日生れである。父を和三郎母をコトと稱し母は故人となり氏は未だ獨身であつた。性温良にして堅忍不拔責任觀念亦旺盛であつた。田鶴野小學校を卒業後同村立農業補習學校に入學し昭和七年三月卒業爾後家庭に於て農業に従事し又青年訓練所に入所し精勵格勳良好なる成績を擧げ青訓自治會長通信班長として活躍し昭和七年には熊谷大佐より昭和八年には後藤中佐より各賞詞を與へられて居る以て氏の人と爲りの一般を窺ふ事が出来やうと思ふ。

昭和十年一月徴兵として歩兵第四十聯隊へ入營同年十二月豊橋陸軍歩兵教導學校へ入校翌十一年十一月同校卒業。在學

間輕機關銃射撃優等に付校長常岡少將より賞狀を附與せられ昭和十二年二月には劍術競技會に於ける成績優秀に付所屬大隊長井上少佐より賞狀を附與されて居る。

昭和十二年八月九日征途に就き九月十三日乃至九月二十四日の滄縣附近の戦闘に参加した。左に氏の任務及勇戦の概要を述べれば、二十一日人合庄北端を攻撃するに方り氏は第一小隊との連絡長として猛火の間を勇敢敏速に行動して連絡を



確保し以て中隊長を適切に輔佐した。其突撃の機熟するや中隊長と共に猛進水濺を超え鐵條網を突破して敵陣地を奪取し夜に入るも寸時も連絡を失ふ事なく克く中隊長の意圖の如く小隊を誘導して部落を奪取せしめ更に前方一軒家の線に進出するや暗夜未踏の地なるにも拘らず豪膽不敵任務の遂行に邁進した。二十三日姚官屯附近の戦闘に於ては敵は各種火器の威力を最高度に發揚し眞に是れ文字通り砲彈彈雨の中を氏は神色自若として連絡勤務に任じ或は小隊の誘導に或は大隊本部との連絡に勇敢なる行動を以て之を遂行し所屬中隊長を輔佐した。斯くて午前四時中隊は敵陣地の一角に突入して之を

奪取し次で尙頑強に抵抗する敵を制壓しつゝ各小隊長に突撃命令を傳達し將に獅子奮迅の勢を以て該陣地に突入せんとする一刹那槍や敵の一手榴彈は氏の身邊に炸烈し顔面部に爆傷を受け茲に壯烈なる最後を遂げた。

氏の部下たりし西浦氏は當時の戦況を涙と共に書き綴り氏の遺族に發信して曰く班長殿も堅い決心を肚に秘め着類も全部新らしきものを着替へ六時を期して攻撃前進、敵もそれと察してか射注ぐ彈丸は雨霰、中隊長以下皆必死の面持、班長

殿は第一小隊との連絡に専任して前進又前進不幸にして私は負傷致し聲を限りに班長殿を求めたれど軍律に依り私は遂にお目にかかれず後退しました。二十四日黎明の突撃中我班長殿は壯烈なる最後を遂げられしと聞き私の悲は一生涯忘るゝ事の出来ぬものでした日頃の御氣質を存分に發揮せられて名譽の御戦死流石は現役の下士官だと生き残つた戦友が軍人の勳鑑と仰いで居りますとの意を述べて居る。

同じく部下たりし田中氏は氏の豊かなる心境を序して曰く、玄海灘は浪高く人皆船酔して敵情監視が不能となつた。獨り我班長は此位の浪が何かと吾等に代つて敵情監視を全うして愈々敵前上陸、我班長は逸早くも分隊を指揮して炊事にかゝつた。後に中隊がどの位お蔭を蒙つたかわからぬ。馬廠攻撃の時の事だが初年兵時代に他中隊に編入された一兵卒は吾等の前方二十米で負傷したが助けに行く者はなかつた。之を見た我班長は是位の敵弾が何だ！ どうせ一度は死ぬべき吾等、田中來れと相共に挺身して彼を救ひ出したが男の中の男と思つた、次に滄州攻撃の開始九月二十一日は朝來第一線として前進彈雨の中の連絡は甚だ困難班長殿大丈夫かと言へば心配するなと飛鳥の如く飛出すのであつた。二十四日の突撃では敵前十五米で私が負傷した。之を見た班長殿は走り來たつて田中大丈夫だ傷は深くない後退して手當をして來い再び第一線に出るのを心待にして居るぞと力をつけてくれ自ら應急の手當をして下さつた。嗚呼突撃だ！ 親しい戦友は見る／＼斃れる、前方を凝視すると今しも吾を庇つて下さつた班長殿は朱に染つて斃れたではないか、吾を忘れ近き見れば哀れなるかな無念なるかな早や虫の息萬感去來男泣に泣いた。噫班長殿の軍人精神はいつまでも我等の一生に深い印象を與へて下されると云ふ意義である。氏の忠勇氏の義膽滿身是れ至誠の結晶であつた。宜なる哉即日歩兵軍曹に進められ次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 町田未類 二

氏は栃木縣栃木市泉町の人にして父を嘉子母をトミと云ひ大正三年十二月三十日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和七年三月栃木縣立栃木中學校を卒業し直に株式會社日本晝夜銀行に入社東京池袋支店に勤務することとなつた。資性沈着豪



膽而も温良實直にして友情に厚く殊に親に孝にして昭和十年以降中風症に罹れる母を常に憂慮看護し出征の際にも餞別金の大部は母の慰安に捧げた程であつた。昭和十一年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同年四月一日一等兵に進み七月乙種幹部候補生を命ぜられ上等兵に次で翌十二年一月歩兵伍長に任官し滿期退營した。昭和十二年支那事變起るや八月應召坂西部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。同部隊は九月十四日永定河々岸に達した所彼岸には敵陣地を占領しある爲酒井部隊長は敵前強行渡河の上夜襲を以て敵を撃破し渡河點を確保するに決した。同河は水深胸部に達し流速速く而も敵は長日月を費し堅固なる陣地を構築し其敵前渡河は頗る困難であつたが氏は中隊長の號令一下猛然部下分隊を率ひ河中に飛込み涉つた。敵は急襲の如く猛射し爲に我が死傷も尠からず生じたが一同之に屈せず遂に對岸に達し驀然敵陣に突入した。然るに敵は頑強に抵抗し遂に中隊長佐藤少尉は戦死し同時に敵は業を頼み逆襲に轉じて來た。此時氏は陣頭に部下を激勵叱咤し猛烈に敵逆襲部隊を射撃し且我左前方に敵重機關銃ありて我を側射しあるを發見し直に之を小隊長に報

告すると共に之を猛射制壓し爲に敵の逆襲は挫折するに至つたが惜むべし此時敵の一弾は氏の頭部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。

本戦闘に於ける同中隊の武勳は特筆賞揚に値するものであつて後軍司令官よりも感状を授與された程である。斯かる激戦裡に在つて前記氏の特性は遺憾なく發揮せられ沈着果斷身を挺して全隊猛進の魁けをなし偉大なる武勳を樹て遂に北支の華と散る皇國武人の姿態氏によつて愈々尊く且つ麗しきを覺ゆる。

大冊河畔恨み綿々として盡きずと雖も氏の赫々たる武勳は千古竹帛に存し其の英靈は護國の神として永へに敬祀せらる氏以て瞑すべきか。

氏が出征以來各地より父君に宛てたる信書は温情溢るゝが如く居常既に臣子の範たるを物語る誠に得難き人格者とも讃ふべきである。

氏は即日歩兵軍曹に進級勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 古浦繁悦

氏は島根縣松江市東本町の人にして父を傳三郎母を延子と云ひ大正三年五月一日に生れ未だ獨身であつた。昭和二年三月松江市母衣小學校を卒業同四月松江中學校に入學昭和七年三月同校を卒業し大阪に出で此花區西本政敏商店に入り勤務中昭和十年一月姫路歩兵聯隊に幹部候補生として入營十一年一月伍長に任官退營の上再び西本商店に復歸した。人となり責任感強く事に熱心であつた。昭和十二年七月應召中井部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。八月二十二日中隊は

砲兵大隊の掩護隊として七里堡附近に前進するや氏は不眠不休最も積極的に警戒の任を完うした。八月二十四日獨流鎮の攻撃に方り聯・大隊砲の掩護並に渡河點の掩護に任ずるや附近の堤防に進出して渡河を妨害する敵を求めて之を制壓し該隊の渡河行動を容易ならしめ以て積極的に任務を遂行した。八月二十五日より九月五日に亘る子牙河畔に於ける警備に於ては下士官長又は巡察長として至嚴なる警戒勤務に服し熱心精勵克く任務を全うし又其間二堡附近の攻撃に方りては支隊



本部に在りて側方警戒等に任じ熱心克く其任務を遂行した。八月三十一日王口鎮附近の攻撃に於ては左側衛たる第二小隊第二分隊長として敵の猛射を冒し子牙河右岸堤防を利用して接近部落一部を占領し敵彈雨飛の間に勇敢に敵を攻撃して之に多大なる損害を與へ午後二時頃瓦頭子兩端並に橋梁を確保し以て支隊の王口鎮占領を容易にした。次で九月三日より同六日に亘る子牙鎮附近の攻撃に於ては先づ九月三日東子牙鎮攻撃に方り尖兵中隊にあつて前進中午前九時三十分頃大邊鋪部落北端及び子牙河左岸より射撃を受くるや左第一線分隊長として奮戦し大邊鋪占領後中隊豫備となり同九月五日西子牙

鎮攻撃のため午前十時第二大隊の連絡し部落北端に據る敵を攻撃正午過殲滅的打撃を與、同地を確保した。次で翌九月六日劉莊の攻撃に方り中隊豫備隊にありて浸水膝を没し高粱繁茂し行動頗る困難なる地區 彈雨を冒して勇敢に前進し突撃に際しては部下を率ひ勇猛敵陣に突入し同部落を奪取した。更に九月十日より同十二日に亘る東辛莊附近の攻撃に於ては九月十日大次花の戦闘に中隊豫備隊として参加し次いで九月十二日北趙扶の攻撃に方つては中隊長永島中尉の指揮に屬し

右第一線小隊第二分隊長として午後二時二十分戦闘を開始し攻撃前進を起すや敵彈雨下の中を勇敢に力攻し遂に敵前五十米に接近したが水濺のため前進困難となつた。此時小隊長の命令に接し古浦分隊は現在地に於て前面の敵を射撃し以て小隊主力の右方よりする突撃を掩護することとなり敵火を自己分隊に引受け大に奮戦しありしが不幸敵彈に頭部を貫通せられ壯烈なる戦死を遂げた。氏や數多の職闘毎に志氣愈々旺盛にして常に分隊の先頭に立ちて突撃し、以て轉々たる戦勝の素因を與へ又重要時期に於ける警戒勤を擔任しては困苦缺乏を克服して常に積極的に任務を遂行し上下の信頼殊に厚かつた。噫澁判たる其意氣輕敏勇猛なる其動作滅私奉公の其崇高なる氣魄正に是れ皇軍歩兵の眞價であり又一般軍人の龜鑑である。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 不破寅三

氏は名古屋市東區前ノ町の人にして父を村山春吉母をすえと云ひ大正三年六月三日を以て生れ後不破家の養嗣子として養父秀吉養母たまに仕へて居た。性温順にして明朗責任感念強く人に接して好感を與へ特に目下に親切であつた。昭和二年三月上宿尋常小學校を卒業し次で愛知縣立明倫中學校に入學し昭和七年三月同校を卒業直に現役志願をなし翌八年一月濱松高射砲聯隊に入營七月一等兵に更に十二月上等兵に進み昭和九年十一月下士適任證書を授けられて除隊し翌十年一月三菱會社に入り設計課に勤務してゐた。然るに昭和十二年十月支那事變に應召三弓部隊に編入せられ北支方面に出征八月十二日を以て砲兵伍長に任官した。之より先天津附近の戦闘に於て七月二十九日未明敵の空襲を受くるや、直に砲隊陣地

を占領して之を撃攘し晝夜該地附近の警備に服した。次で九月二十四日保定に向ひ前進の際には觀測貨車故障のため該車と共に殘留を命ぜられしが其際近く十五汲村附近に敗殘兵約三十名現出した爲役隊長の指揮に依り氏は分隊長として勇敢に此敵を攻撃して退却せしめ以て附近にありし兵團司令部を掩護した。更に九月三十日保定對空戦闘に於ては觀測掛下士官として同日未明敵機との交戦に當り敏活適切に活動し觀測班長を輔佐して正確なる射撃諸元の測定査檢に任じ砲隊をして有効適切なる射撃を實施せしめ此間屢々敵の空襲を受け時に爆彈

近く十米附近に落下せし際の如きも氏は毅然として守地を離れず任務を續行しつゝありしが更に敵の一爆彈は陣地近く落下し氏は不幸其爆片に依り壯烈なる致命傷を受けて倒れ直に野戰豫備病院に擔送せられたるも午前十時頃遂に北支の華と散つた。



氏や孝順父母に任へ謹嚴身を持し而も寛恕人に對す而して殊に其の責任觀念の旺盛なる類々たる敵空爆の裡克く高射砲觀測掛下士官としての職分を盡し危難に怯まず嚴然として守地に終始す人格の美洵に歎賞に堪えず。

噫 高潔而も前途有爲の士今や永へに其壯容に接する能はずと雖も英靈や安らけく護國の神座に鎮まり勇名や聖戰史上千載に芳を放つであらう。

氏は即日砲兵軍曹に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 小堀武夫

氏は栃木縣芳賀郡遊川村大字天子の出身にして若林龜三郎同サワを兩親とし大正二年十一月十七日を以て生れ後小堀家に入り養父を眞一郎養母をトフと云ひ、妻琴子との間に一子勳を擧ぐ。昭和二年三月七井小學校高等科一年を修業し同年



四月縣立眞岡中學校に入學昭和七年三月同中學を卒業した。資性温厚篤實にして何人に對しても終始變らざる至情を以てし又産業組合事務員となり忠實勤勉組合員の信望亦極めて厚かつた。昭和八年十二月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營直に滿洲に派遣せられ警備に任ずること四ヶ月にして内地に歸還昭和九年十二月上等兵に進み伍長勤務を命ぜられ翌十年五月下士適任證及び善行證書を授けられて歸休し又昭和六年乃至九年事變の功により勳八等瑞寶章を賜はり再び郷里の産業組合事務員として活躍した。

昭和十二年八月應召坂西部隊に編入せられ北支戰線に赴き九月一日歩兵伍長に任官し十一月八日院堡集院近の戰鬪に於ては第一線の分隊長として敵火の下沈着して適切に部下を指揮し突撃直前敵が陣地を棄て退却を始むるを見るや機を失せず之を猛射し敵に大打撃を與へた。續いて同八日郭什望附近の攻撃に於ても第一線分隊長として熾烈なる敵の銃砲火の下仔細に敵情を觀察し以て射撃指揮及び部下分隊の前進を適切に指導し轉て突撃の機到るや分隊の先頭にあつて敵陣に突入して自ら敵名を刺殺し更に逃ぐるを追つて迅速に部落北端に進出し

潰走する敵の多數を殲した。次いで翌十一月九日舊觀音攻略戰に於ては豫備隊たる中隊の第二小隊分隊長として参加し續いて十一月十日十一日に亘る大名攻略戰に於ては中隊長齋藤大尉の指揮に屬し第二小隊第三分隊長として十一日正午戰鬪開始せらるゝや初め第二線分隊であつたが敵前五百米に於て第一線に増加を命ぜられ王庄の敵陣地に向ひ適確なる射撃指揮をなしつゝあつたが正面及び左前方よりする敵火は愈々熾烈を極めた。此時氏は猛然と率先先頭に起つて部下分隊を激勵し前進に努めた。而して午後三時半頃敵前約三百五十米に達した時遺憾にも氏は下腹部に盲管銃創を受け直に隊纒帶所に收容せられたが治療中午後四時半遂に護國の神とし神去つた。

顧みれば實に氏の適切なる射撃指揮により敵に多大の損害を與へ部下を確實に掌握して其攻撃前進を促進したる事は正に戰捷の因をなしたるものにして其の功績は拔群である。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 寺坂助

氏は兵庫縣赤穂郡高野村の出身にして父を市之助母をこしうと云ひ大正六年三月六日を以て生れ未だ獨身者であつた。性篤實にして義務心強く昭和五年三月高雄小學校を優等の成績にて卒業、續いて上郡農學校に入學昭和八年三月同校を卒業し爾後電話用達會社社員として阪神地方に出で勤務せしが精勵恪勤常に模範青年として稱せられてゐた。昭和十一年一月現役志願として姫路歩兵聯隊に入營將來永く軍務に従事し報公の至誠を致さんと下士志願をなし同年十一月熊本教導學校へ入校翌十二年支那事變のため原隊に復歸し沼田部隊に編入せられ八月十日勇躍北支方面の征途に就き九月二日より六

日に亘る津浦沿線に於ける緒戦次では九月七日より十二日に亘る馬廠附近の戦闘、更に又九月十三日より同二十六日に至る滄州附近の戦闘には中隊指揮班傳令として時に或は泥濘膝を没する地區に於て或は泥濘腰を没する水中に或は豪雨夜間の傳令等あらゆる困苦を凌ぎ中隊長の報告を確して上司に申達し或は謂はゆる兵馬倥傯の間彈丸雨飛を冒して命令傳達に服し以て中隊長をして部下の掌握を確實ならしめ中隊の戦闘をして毎に有利に發展するを得しめた其功績は偉大なるものがあつた。

九月二十七日より德州に向ふ追撃戦中十月一日歩兵伍長に任官の上中隊指揮班連絡長を命ぜられてその重責と名譽を痛感して益々奮勵し續いて十月三十日より十一月十三日に至る黃河北岸の掃蕩作戦に方りては安永部隊安武隊に於ける指揮班連絡長として晝夜粉骨碎身任務を遂行し、十一月十三日午後四時中隊は安永部隊の第一線として戦闘を開始し退却する敵を追撃しつゝ臨邑城目指して前進した。當時氏は常に中隊の先頭にありしが之より先南門占領を命ぜられたる第二小隊との連絡を命ぜらるゝや西門を距る約三百米の地點より未だ敵の掃蕩を終らざる道路を南門に向ひ單身連絡に赴き其任務終了して歸途の途中に所屬隊と逸ぐれし小銃一分隊を誘導して南門より城壁に沿ひつゝ中隊主力に復歸途中突如敵敗殘兵二十數名と遭遇した。氏は躊躇することなく率先頭に立ち分隊を激勵勇敢に之を撃攘したが其際不幸敵彈頭部に命中し遂に午後五時二十五分壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏の決死的行動により第二小隊との連絡は達成せられたる結果同小隊は南門を占領し其半部を同門に殘置し他の半部を以て城壁上より西門に向ひ掃蕩し來り以て中隊主力の西門附近に於ける攻撃及西門占領の目的を達し敵の砲八門を鹵獲するの素因をなしたもので中隊が率先臨邑城西門占領の一番乗の功名を擔ひ敵砲八門鹵獲の戦果を收め得たる功績は連絡長たる氏に負ふ所頗る大である。年齒僅に二十有一歳澁澗たる勇氣と燃ゆるが如き報國の精神を以て北支の郊野に縱横無盡の活動を續け朝日に映じて蕾の花と散つた。年は暮れて陽春廻り來た

時若武者の奮戦を偲びて沼田部隊長より遺族に寄せられた一首は左の通りである。

見よ君よ華北の野邊に春は來て

朝日輝く山東の山

今や氏の壯容に接する能はざるも其英魂は永へに生き護國の神となり靖國神社に鎮まり皇國を守護し遺族の多幸に加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 有賀龍衛

氏は長野縣諏訪郡本郷村の人にして明治四十三年七月十七日生である。父を有賀友太郎母を同まさと云ひ養父を林平養母をきりのと稱し妻きわとの間に一子龍を擧げた。性温厚篤實にして實行力旺盛上下の信頼も厚かつた。大正十四年三月本郷小學校高等科を卒業後家庭に在りて農業に従事し傍ら青年訓練所へ入所し誠意學術科の研鑽に務め之を終了し昭和六年一月歩兵第五十聯隊へ入營し同年七月一等兵に翌七年一月上等兵に進級し同年二月上海に派遣更に同年五月には滿洲へ轉進し呼海線沿線の戦闘及馬占山討伐安遠城附近の戦闘等累次の戦闘に参加して勳功を樹て昭和八年二月には伍長勳務上等兵を命ぜられて初年兵教育に従事し同年十二月内地歸還となり歩兵伍長に進級し現役満期となつた。功を以て勳七等に叙し青色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや遠山部隊に應召し見波隊に編入せられ勇躍北支戦線へ出動した。出征に當り氏は倉島軍醫を訪問し「自

分は有賀伍長で寸宜敷く御願致します」と挨拶した。軍醫はオ、輕機分隊長か一番よく狙はれるから充分氣をつけるがよいぞと述べれば氏は「村を出る時から生きて還らうとは思つて居りませぬ必ず軍醫殿の御厄介になる時が來ます其時は宜敷く御願致します」と既に一死報國の決意は牢固たるものがあつた。



九月十六日所屬隊は瑠璃河畔塙頭嶺附近の敵を攻撃すべき目的を以て氏の所屬中隊見波中隊を左第一線となし午前十一時五十分攻撃を開始した氏は右第一線小隊長増澤少尉の指揮に屬し第六分隊長として第一線に加入奮戦中午後二時四十分狼家庄の敵動搖の色あるを看破するや氏は部下輕機分隊を提げて同部落東方突角の敵を猛射すべく彈雨を肩して躍進し適切なる射撃位置を求め的確なる射撃指揮に依り之を猛射し多大なる損害を與へ突撃の動機を作爲した。やがて中隊主力が突撃に移るや氏は率先他分隊に先ち敵陣地に肉薄し射撃目標を指示し將に射撃號令を下さんとする一刹那敵の狙撃する所となり不幸腹部に貫通銃創を受け肝臟を損傷せられた。氏は倉島軍醫殿は居らぬかと叫んだが軍醫の駆けつけた頃には哀れや腦貧血の爲意識不明となり呼べども答はなかつた。だが無意識の中にも何回も 天皇陛下萬歳と奉唱し次第に聲も細りて息絶えた。氏の勇敢機宜に適する行動と卓越せる其射撃威力に依り所屬大隊の包翼攻撃は美事に成功し午後三時餘々たる戦勝を收むるを得た。

噫氏や眞には滿洲事變に辭々たる武勳を奏し今次事變には聖戰の目的貫徹の爲に當初より一死報國を期し遂に清く身命を捧げ終つた。其崇高なる犠牲其純忠の至誠には眞に鬼神も慟哭し皇國軍民の袖を絞らしむるであらう。氏の功績たるや皇軍華北戦史に輝き其名は大和櫻と咲き競ひ其英靈は不滅に生き天晴れ護國の神たるべく又一家の守護神となり世の鑑となるであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 坂田忠治郎

氏は埼玉縣大里郡明戸村の人にして亡父を松五郎亡母をカウと稱し其末子として大正五年一月二十一日に生て未だ獨身であつた。資性温良父母に孝にして進取の氣象に富み頗る勤勉者であつた。昭和五年三月明戸尋常高等小學校高等科を卒業し續いて明戸公民學校に入り成績優良にして那教育會長より表彰状を受け卒業の後同校研究科に於て研鑽一年昭和九年三月同科を卒業し青年訓練所に入所したが十八歳にして軍人を志し昭和十年一月現役志願として歩兵第三聯隊に入營し熱心勉勵成績良好にして下士官志願を爲し採用せられて同年十二月仙臺陸軍教導學校に入校し翌十一年十一月射撃の技倆優秀なる故を以て輕機關銃第一種射撃徽章を授與せられ卒業原隊に復歸し十二月歩兵伍長に任ぜられた。

原隊復歸後直に滿洲に派遣せられ新京に或は齊々哈爾に駐劄し治安維持に盡す所尠からず翌十二年七月支那事變の勃發するや小林部隊に屬し北支方面に出征新進氣鋭分隊長として七月十日以降新城楊惠莊華中橋附近の殘敵掃蕩に當り勇敢積極的に行動してよく其任務を達成し八月十七日より外長城線附近の戦闘には所屬中隊は兵團豫備として司令部の直接警戒に任じた。

八月二十二日萬全附近敵陣地攻撃を開始せらるゝや氏は田邊大尉の指揮下に午後八時十分敵の猛火を冒して萬全北方隘路を強行通過し敵の第一線たる右高地(イ)の敵陣地を一舉に撃破し次いで第二の(ロ)(ハ)敵陣地の攻撃に移るや敵は堅固なる機點より猛烈なる射撃を浴せ我が死傷者續出したが氏は部下分隊を激勵し小隊長と共に敵陣に突撃を敢行し奮戦格闘の後遂に該地を奪取した。然るに敵は漸次兵力を増加して奪回のため猛烈に攻撃し來たので爰に激烈なる争奪戦を

惹起した。此の時氏は克く分隊を指揮し多大の損害を敵に與へたが其の奮戦中右前方敵陣地より飛來せし射撃は遺憾氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。然れども氏の勇敢なる行動と適切なる戦闘指揮に依り敵に致命的の大損害を與へ遂に敵の恢復攻撃を挫折せしめた其功績は偉大なるものである。



氏は幼にして天賦の純情を父母に捧げて孝養至らざるなく末子であるに拘らず世上あり勝の我儘は少しもなく十五歳にして母を十七歳にして又父を失ひ人世最大の悲哀に遭遇したるも素直なる性情は却て他人に對する同情心を増かし分隊長としても部下に對する温情は殊に濃かで部下の信頼を受けて居た、一たび戰場に臨むや任務の命ずるところ水火尙辭せず勇往邁進奮戦力闘赫々たる武功を樹て二十二歳を最後として護國の神となつた。家にあつては孝子、軍に従つては忠勇寔に之軍民の龜鑑にして其功績は永く戦史を飾るであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鳩勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 坂田健兒

氏は兵庫縣美藪郡三木町の出身にして父を兼吉母をむつと云ひ大正三年十一月四日を以て生れ昭和四年三月三樹尋常高等小學校高等科を卒業直に三木町立商工實修學校に入校同年三月同校を卒業し尙青年訓練所に於て三年間修業同九年三月同所を修了した。資性温順にして父母に孝弟妹を慈み殊に父に對して「自分は上級に進まなくともその金で弟妹を上級學校にやつて欲しい」と申出たのでも其一斑を察することが出来る。氏は學業優秀にして勤勉品行方正特に師弟の情義に厚く曾て洪水時に我が家を父に頼み自己は受持先生の自宅に駆付け防水に従事したる等氏の篤行は學校職員の齊しく賞讃する處であつた。小學校八年間皆勳賞を受け軍隊に於ても除隊の際善行證書を附與せられた事などは其の片鱗を見るに足り尙又巨軀強健にして實に鬼に金棒の素質を有し世人は將來の進展に矚目した有爲模範の青年であつた。然るに無情にも天はその壽を奪ふ惜みても尙餘りあることである。

昭和九年十二月十日現役兵として近衛歩兵第三聯隊に入營翌十年二月滿洲に派遣せられ熱河省承德麥倉部隊所隊に屬し匪賊討伐に服し瀑河口・古北口・馬蘭峪・玉田・通州・平泉等に出動勳功を樹て昭和十二年三月内地歸還の上歩兵伍長に任官除隊となる。此間射撃大會に於て成績優良の廉を以て師團長より賞状を受け或は小銃第一種射撃徽章或は銃劍術第一種徽章及善行證書を附與せられた。斯くて歸郷後専心家業に勵み夜は青年學校指導員として藎蓋を傾倒した。昭和十二年七月二十九日應召沼田部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き三間房及四黨口の戦闘に参加し次いで馬廠附近の戦闘に於ては米澤隊の指揮班員として九月九日午後一時行動を起し指揮班長笠原准尉の指揮により終始第二小隊との連絡に任じ中隊長の命令傳達或は小隊報告の進達等を機を失せず傳達し殊に丁莊西端を進出するや斜左方高粱畑の敵より猛烈な

る側射を受け動もすれば連絡の断たれんとする時に方り最も勇敢に活躍して連絡の任務を遂行し又突撃に際しては第二小隊長に跟随突入し完全に敵陣地を占領した。本戦闘に於て中隊長の意圖の如く小隊の戦闘を指導して以て戦捷の結果を得るに至らしめたる功績は赫々たるものがある。續いて十九日午後四時三十分豆店の攻撃を開始するや第二小隊長との連絡を緊密に保持し殊に敵前百米間は高梁は刈り取られ利用すべき地物もなく猛烈なる集中火を受けたるも尙連絡及敵情監視

に全力を傾注したが敵第一線に動搖の徴あるを發見し直に之を中隊長に報告すると同時に猛然第一線と共に敵陣に突入完全に同地を占領した時に午後五時三十分である。



九月十三日以降濱州附近の戦闘に於ては米澤中尉の指揮する尖兵中隊たる第二中隊指揮班に屬し九月二十一日午後九時行動を起し午後十一時戦闘開始となるや中隊長と共に率先々頭にあつて前進し第二小隊との連絡長及敵情監視の任務を受け精勵し先づ二十數名の守備して居つた敵の展望哨陣地を屠り以後敵の猛烈なる亂射を受け死傷漸く繰出する状況なりしも敢然として先頭に起ちて前進を繼續し敵前百米突に達した時第一小隊の態勢及正面の敵情視察のため連絡を命ぜられ彈丸雨飛の中を物ともせず連絡のため躍進中不幸敵彈のため右大腿部に貫通銃創を受けさしも満身之れ膽たる氏も遂に立たず壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘に於ける氏の勇敢なる行動は常に中隊の志氣を鼓舞し攻撃進展に寄與したる處頗る大である。氏は曩に滿洲に於て活躍武勳を樹て今回の支那事變に於て亦數度戦闘に参加し其足跡は大陸に於て廣く且つ大にして東洋平和のため重要な役割を演じ到

る所に不朽の偉勳を奏した。嗚、入りては孝悌の鑑、出で、は皇軍の精華今や尊き、生を終へたが氏の芳名は水く青史と共に輝き渡るであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 清水 稔

氏は鳥取縣日野郡石見村の人にして父を喜美母を鶴子と稱し大正三年十月二十二日其長男として生れ家庭には兩親の外祖父母及弟があつて未だ獨身であつた。資性温良祖父母及兩親に對しては敬順克く之に仕へ弟に對しては慈愛克く之を導き爲めに家庭は常に春風融融の感があつた。而も他人に對しては亦親切で事に當り責任感非常に旺盛であつた爲め郷黨の信望厚く頗る將來を囑せられてゐた。昭和四年三月石見西小學校高等科を卒業石見青年訓練所に入所し同年一月石見農業公民學校を終了し三月操行善良學業優秀に付鳥取縣知事より池田侯爵賞を受領した程であつた。氏の石見村青年團に在るや旗手或は副支部長等責任の地位に推され社會公共生活に入りても天稟の優秀性は愈々練磨され漸次圓熟の域に進み一般の賞揚する處となつて居た。昭和十年一月現役兵として歩兵第六十三聯隊に入營勤務に教練に兪勉良好なる成績を擧げ其年十二月上等兵に進み伍長勤務を命ぜられ翌十一年七月善行證書及下士適任證書を附與せられ退營し歸郷後は青年學校指導員を命ぜられ上下の信望を受け青年の指導に全力を傾倒して居たのである。

支那事變の勃發するや氏は昭和十二年七月應召中井部隊松原隊に編入せられ北支方面の征途に就き八月二十五日より九月六日に亘る津浦沿線に於て大蔵庄・孫門口・夏庄・雙庄・燒窰盆附近の各戦闘に分隊長として参加し或は豪雨に全身濡

れ鼠となり或は弾雨を冒して出水地帯を跋渉し奮闘した其の功績は偉大なるものがあつた。次いで九月七日より十二日に亘る馬廠附近の戦闘には敵が長時日を費して構築せる頗る堅固なる防禦陣地に對し勇猛果敢に奮戦之を撃破し更に懇ふ暇もなく滄縣附近の攻撃戦に於て牛新庄附近の戦闘に是亦分隊長としてよく部下を掌握奮闘該地を奪取確保し十月一日歩兵伍長に任官後は益々其責任の重大なるを感じ十月五日に至る迄德縣に向つて行はれし追撃戦闘及德縣の攻撃に參與し或時は衛兵司令として又或時は敗殘兵に對し至嚴なる警戒の重任に服し



繁茂せる高粱の葉ずれの音にも耳を聳て注意周到よく其任務を完了した。更に又十月六日よりの小唐莊附近及び平原附近の攻撃には何日もながら積極的に活躍し克く小隊長を輔佐して其の戦捷に貢献する處多かつた。然るに大陸の十月秋風颯々晝夜の氣温激變さしも健氣の氏も終に急性氣管支炎に冒され一時戦線を退くの已むなきに至り德縣野戰病院にて病を養ひつゝあつたが旺盛なる責任觀念は永く病院に療養を欲せず在院僅かに數日にして十月十九日原隊に復歸し鳴鶴店附近の戦闘には懐しき部下を指揮して欣然奮戦を続け十一月

十日よりの黃河北岸の掃蕩戦に於ては先づ安仁街附近の攻撃に不眠不休の戦闘を続け敵を掃蕩した。

次で十一月十四日中隊が郭莊附近の敵を攻撃の目的を以て午後三時行動を起し續て戦闘開始せらるゝや氏は斥候長として選拔せられ趙牛河堤附近偵察の爲部下分隊を率ひ巧に敵眼に遮蔽しつゝ敵前四百米附近に達し敵情を偵察しありしが敵は正面約千五百米の廣きに亘り堤防に沿ひ陣地を構築し我が斥候を發見すると共に忽ち重輕機關銃小銃を以て我が斥

候を猛射し附近一帯は平坦開闊何等の據るべき地物なく爲に忽ち部下分隊中二名の死傷者を出すに至つた。氏は斯くなれる以上分隊は全滅するとも該地に在て奮戦し中隊の進出を援護せんと決心し部下を激勵して抗戦を続け夕刻に及んだ。然し氏は此時右背部に首貫銃剣を受けた。然かし剛膽なる氏は「分隊長の傷は浅いぞ中隊の到着する迄一步も此地を退くな」と部下を叱咤激勵して戦闘を続けありしが之より以前中隊は攻撃前進を開始し遂に左岸堤防を占領した。茲に於て氏は始めて小隊長の命により後方に收容せられたのである。氏は之迄數次戦闘に参加し幾多の武勳を樹てたが殊に郭莊附近の戦闘に斥候長としての勇敢適切なる行動は敵をして其全陣地を暴露せしめ中隊長の決心を適切容易ならしめたるのならず敵の注意と火力を我が方に引付け中隊の攻撃前進を容易にした其功績は偉大にして亦拔群である。

氏は負傷後韓家莊第四病院を経て天津病院に於て療養を受けたが經過良好ならず遂に十一月二十日惜しくも北支の華と散つた。

氏は出發前二日即ち八月五日の日に於て両親に面謁し父を一隅に手招き低聲語つて曰く「今回は分隊長として出征するから或は生きて還ることは出来ないかも知れぬ。万一の事ありとも覺悟を定めて決して驚き下さるな。母上にはそれと云ふに忍びざる故父上のみ云つて置きます」と斯くて父子一本のサイダーに依り盃を交はし別れを告げたとのことである。抑々戰場に臨むに當り郷を出づる時に家を忘れ境を出づる時に妻子を忘れ敵陣に臨んでは命を忘る。之れを是れ三忘と呼び我國古來武士たるものの覺悟として服膺し來りし所である。

氏や此の古武士の覺悟を以て征途に上る宜なるかな大敵たりとも恐れず一死鴻毛の輕きに見て赫々此の驍名を博するや。

忠勇義烈氏の如きを喪ふ誠に哀惜に堪へないが氏の靈魂は永久に生き護國の神として皇運を扶翼し奉り又遺族を守護す

るであらう。

氏は即日歩兵軍曹に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵軍曹勳七等功六級 百岳金松

氏は長崎縣西彼杵郡七釜村の人にして明治四十四年四月二十日生である。父を鹿太郎亡母をキタと云ひ妻キタとの間に一子征雄がある。資性濃厚の一面鐵石の如き強烈なる意思を有し母死亡前の如きは自ら看護炊事に當り又神佛に參詣して平癒を祈願する等其孝心の濃かなる人皆感激の涙を注いだ。されど氏は遂に母の死亡に際しては悲を外面に現はさず葬儀終りし翌日より平素の如く登校し専心學業を勵みし如きは其性格の一端を現はすものであつた。昭和二年三月戸畑市澤見小學校高等科を卒業したが在學中常に成績拔群にして級長又は副級長を命ぜられ校内の信望を集め又書畫及徒步競争に堪能にして屢々賞狀を附與せられ昭和四年四月志しを立て上京した。途中旅費を紛失し途方に暮れしが遂に秘して二日間食せず東京市深川區橋本商店に住込み滿一ヶ年にして歸郷初めて父に事情を語りしが如き亦意思鞏固にして獨立自主的なる證左と見るべきであらう。昭和七年一月現役兵として騎兵第十二聯隊に入營し在營間成績優秀にして伍長勤務上等兵を命ぜられ昭和八年十一月歸休除隊となり昭和十年の勤務演習に成績拔群にして騎兵伍長に任ぜられた。

昭和十二年九月支那事變のため召集を受け小池部隊に編入せられ十一月一日上海方面の征途に就き十二月四日より同月七日に亘る蕪湖附近の戦闘十二月八日より十四日に亘る蕪湖附近の戦闘には分隊長として克く部下を掌握勇戦し其の任務を完了した。次で十二月二十三日杭州附近の戦闘に於て留鎮の敵を攻撃する際氏は第三小隊最右翼の分隊長であつた。



最初斥隊長として午後四時出發敵陣地前數十米に近接敵情地形を詳細に偵察して歸還報告し完全に其任務を達成した。この時氏の屬せる小隊は敵と交戦中なりしも地形錯綜夜暗のため直に小隊に合すること困難なりしにより中隊長の命令にて一時中隊指揮班に合し同班長代理として奮勵中午後十一時中隊命令を第一線各小隊長に傳達すべき命令を受け敵前五十米を疾驅して第一小隊長に傳達を終るや否や不幸敵彈のため頭部貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

因に氏は應召以來常に潑刺たる意氣を以て分隊を指揮し模範分隊長として中隊團結に寄與する所多く上陸以來灣正鎮の戦闘に於て僅に三名の部下を指揮し敵トーチカを一舉に占領し驍名を馳せたるを手初めとして前後十數回の戦闘に参加し幾多忠勇武烈の勳功を樹て上下の信頼を一身に集めありしに聖戦の中道に玉碎せるは惜みても尙餘ある次第だが其勳功は江南戦史に異彩を放つべく其芳名は千古大和櫻と咲匂ふであらう。而して愛子は氏の出征後に生れたと云ふ事であるが氏の純忠報告の魂は必ずや愛子が胸に刻みつけられ氏の靈は愛子に生きるのみか其遺族に其先祖にも生くる事が出来るであらう。

氏は即日騎兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 瀬川 一郎

氏は兵庫縣飾磨郡糸引村兼田の人にして亡父を勝次母をりやうと云ひ大正五年四月十七日を以て生れ未だ獨身であつた。性着實熱心にして義務心篤く昭和六年三月糸引尋常高等小學校高等科を卒業し爾後糸引村役場に吏員として勤務して居たが昭和十年現役を志願し翌十一年一月姫路歩兵聯隊に入營十一月熊本陸軍教導學校に入校を命ぜられ十二月上等兵に進み翌十二年七月教導學校を卒業歸隊した。偶々事變突發せし爲間もなく北支方面の征途に上りやがて八月中旬所屬安永隊は上陸部隊掩護の爲運河に沿ひ西進趙連庄及三間房に據れる敵を撃退したのであるが此間氏は機關銃分隊長として克く部下を掌握奮戦した。又八月二十一日潮宗橋附近の戦闘に於ては第二機關銃中隊の第三分隊長として参加し尖兵中隊長の指揮に入り午前六時行動を起して馬廠河右岸地區泥濘狹隘なる道路を前進午後二時敵前八百米附近に於て射撃開始の命を受け直に陣地を占領敵機關銃に對し猛射を加へて之を制壓し更に陣地を轉換して遂に之を撃攘し續いて前進せしが第一線本間小隊は敵前三百米にある水濘の爲め且又部落南方より敵の側射を受け攻撃に一時頓挫を來せるを認めた瀬川分隊長は機を失せず敵陣を貫して該地附近に進出其火力を發揚し以て本間小隊の攻撃を容易にした。斯くて日は没し第一線部隊は現地に於て翌拂曉攻撃のため陣地を構築し夜を徹した。此の間氏は常に敵情に注意しつゝありしが晝夜間多大の損害を受けた敵は逐次退却しあるを看破して小隊長に意見を具申し果敢なる射撃を以て遂に本間小隊をして敵陣地を占領せしむるに至つた。

九月二日より六日に至る津浦沿線陳官屯附近への轉進に方りては道路泥濘而かも晝夜の強行軍に克く部下を激勵して中隊の行動を遺憾なからしめ續いて九月七日より十二日に亘る馬廠附近への追撃には氾濫地帯を、殊に青縣に向ふ追撃には

長途の間臂力を以て機關銃の運搬をなし克く其任務を遂行した。更に九月十三日より二十六日に至る滄州附近の戦闘に於ては興濟鎮に或は高官屯に或は捷地等に追撃を實施し率先勇敢に行動し小隊長を輔佐して機關銃本來の威力を遺憾なく發揮した。又九月二十七日より十月二日に亘り德州に向ふ追撃戦に於ては二十八日泊頭鎮附近の敵を攻撃するため午後零時半頃津浦線に沿ひ彈雨の中を前進敵前五百米に達したる時線路上に敵の重機關銃陣地あるを發見所屬第二小隊は直に陣地に進入射撃を開始したが間もなく敵彈のため小隊長負傷し之が爲め



瀬川分隊長は直に小隊長を代理して兩分隊を指揮した。當時敵の射撃は益々猛烈の度を加へ第一線の前進遲々として抄らず氏は小隊長代理として各分隊に交互匍匐前進を命じ自ら先頭に進みて敵の側防機關を猛射し友軍第一線の前進を促したるに敵の射撃は比較的正確にして其射彈近くに落下するもよく友軍との連絡を密にし一進一止敵前百米附近に達して猛射を加へたる爲敵は逐次動搖を來し第一線中隊の突撃を誘發且掩護し午後七時四十分第一線中隊をして敵陣地を占領せしむるに至つた。本戦闘に於て氏の剛膽機敏の行動は克く

小隊を確實に掌握して戦闘を有利に發展せしめ其功績は拔群である。次で十月二日迂庄附近の戦闘に際しては尖兵中隊に配屬せられ第三分隊長として敵砲彈下を勇敢機敏に行動し午後三時十分頃迂庄北方七百米附近に於て銃を卸下して直に前進せんとするや德州北方の敵砲兵は我が展開を妨害し其發射せし二弾は同時に我部隊直前に炸裂し不幸氏は其左胸部に砲彈創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏や資性着實熱心にして義務心篤く事に臨んし俊敏果敢善處を誤らず。分隊長として又小隊長代理として屢次の戦闘に當り克く模範的の行動に出で友軍の對勢を有利に導きたること一再に止らざりしが如き其器局の尋常にあらざるを察知するに足る。悼ましいかな有爲氏の如き士を中道にして喪ふとは。

然りと雖も氏が累次の赫々たる武勳は其壯烈なる最期と共に聖戦史上永く光輝を放つものにして洵に武人の範を垂れたるものと謂ふべし。

氏は即日特に二階級を進められ歩兵軍曹に任じ次で勳七等に叙し青色桐葉章及功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 井川 正 齊

氏は茨城県鹿島郡大谷村の人にして父を均母をとりと云ひ明治四十五年三月十日生れで未だ獨身であつた。大正十三年三月大谷小學校尋常科卒業昭和四年三月縣立盛岡中學校卒業昭和五年三月早稻田第二高等學院入學同七年四月同院退學昭和十一年三月東京外國語學校獨逸語部法律科を卒業し同年六月より大阪瓦斯株式會社研究部に奉職した。氏は性質温良にして文學に興味を有し中學時代には校友會雜誌部委員として豊かなる文才と其手腕を振つて居た。草に寝て空を仰げり白雲の流れもゆるきま雲なりけり」などは當時の作品であつた。又劍道に於ても年級試合に出場し其手腕を振つたものであつた。

昭和十二年一月水戸歩兵聯隊に入營同年七月幹部候補生試験に合格して上等兵に進級したが偶々北支の風雲急を告ぐるや濰井部隊獨立機關銃隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて九月初旬北支戰線へ到着戰場の砲聲を聞きつゝ連日泥濘

の難行軍を続け永定河々畔に向ひ前進した。九月十三日敵前約一里にある南四堡村に宿營之より所屬中隊は所屬大隊主力と分れ第〇〇團に分屬永定河右岸の敵陣地攻撃を準備した。翌十四日午後二時より友軍の野砲重砲は一齊に砲撃開始放々たる砲聲天地を震撼し敵亦應戰戰場轉た凄慘を極むる中を午後三時所屬中隊も攻撃前進に移り死傷續出したが氏は勇猛果敢に頭敵を求めて之を制壓し協力部隊の攻撃前進を容易ならしめ日没に至つた。翌十五日午前四時永定河を渡河し敵を



保定方向に急追した。翌十六日正午頃敵は我が〇團司令部を襲撃危殆に瀕すと聞き急遽救援に赴き激戰數刻將校にも犠牲者を出したれど遂に多大なる損害を與へ之を潰走せしめた。同月十九日所屬大隊主力と合せしが此日拂曉來激戰を展開し彼我の銃聲息む時もなかつた。時に我第一線が大清河附近に於て苦戰中なる情報に接し所屬中隊は之が救援を命ぜられ古泉中隊長は第三小隊を率ひ敵彈雨飛の中を駆けつけ所屬第六分隊は最前線の高地に銃を据えしが氏は正確機敏なる猛射を加ふる事約五十分敵に殲滅的打撃を與へて之を潰走せしめ捕虜三名と多數の兵器彈藥を鹵獲した。當時氏の豪膽不敵の行動は命知らずと迄嘆賞された。かくて暮色闇然たる頃大清河を渡河し附近の部落に宿營した。保定一帯の地方は二十年來曾て見ざる降雨にして河沼氾濫山林高梁畑共に一二尺の浸水となり彈藥糧食の搬送は名狀すべからざる大困難であつた。されど氏は凡ゆる困苦缺乏に耐えつつ保定へ猛進した。途中九月二十一日野砲隊觀測所が敵襲を受けありとの情報ありて之が救援を命ぜられ急遽應援激戰の後之を撃退した。此夜暗黒にして咫尺を辨せず徹宵銃砲聲を聞きつゝ水深臍に及ぶ河川

を軍装のまま飛込んで渡河した。愈々大冊河に近づいたのである。二十二日拂曉優勢なる敵の逆襲を受け熾烈なる猛火を浴び一時凹地に入りて敵弾を避けたがやがて他隊の援護射撃に依り凹地を出づるや氏は敢然猛射撃を行ひ激戦一時間餘にして敵を撃退し之を追撃して其夜保定北方約二千米の陣地に陣地露營した。

翌二十三日は歩兵第〇〇聯隊第七中隊に直接協力の任務を受け郭莊附近の戦闘に参加した。敵は拂曉より陣鐘を猛射し挑戦したが我軍は自重して應戦せず古泉中隊長は第三小隊のみを率ひ最前線に進出した。氏は其第六分隊射手として敵弾雨飛の中を勇敢に前進し敵前四百里に達し午前八時頃郭莊西側に射撃陣地を占領した。敵は保定の堅壘を待み極めて頑強に抵抗した。高十五米の城壁には蜂の巣の如く銃眼を設け壁前の圓形陣地は各方面に火力發揚の準備を完了し動けば必殺の構を以て熾烈なる火力を射注いで居た。敵の迫撃砲は就中猛活躍を續けて居たが氏の分隊は墓地を利用し敵情を偵察するに一本柳附近に敵兵あるを認め急襲射撃を開始し之に殲滅的打撃を與へ友軍歩兵第七中隊をして敵前百五十米に進出せしむるを得た。斯くして益々重機關銃の全威力を發揚中午後一時二十分敵の迫撃砲弾は氏の機關銃の前脚部に命中炸裂し其破片に依り氏は頭部爆創を受け銃を保持せる儘壯烈なる戦死を遂げた。古泉中隊長は大聲にて井川と叫び馳せ寄りしに出血多量の爲横臥せしめんと堅く銃把を握りし指を靜かに開かしむれば既に絶息して居つた。中隊長は其枕邊に端坐し熱き涙を注ぎ嘆聲を洩すのみであつた。

噫皇軍歩兵の精華聖戦の人柱氏の忠勇武烈の奮闘はやがて堅陣保定の壘上高く日章旗を翻へす素因となつたのだ。其勳功は皇軍戦史に牢記さるべく其芳名は千載に傳へられ英靈は永世に生き皇運を扶翼し奉るであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 伊澤 榮

氏は岡山縣和氣郡英保村の人にして明治三十五年一月二十六日生である。亡父は仁三郎母はヨシと稱し妻君子との間に一子良文を擧げた。大正二年三月郷里の小學校尋常科を卒業した。氏の生ひ立及入營前後の經歷に就ては調査資料を缺く

を以て記述を省略するも戦歴及戦友の來信に依り察すれば氏は誠實にして責任感念強く世人の愛敬を受けありし事を察するに難くない。



昭和十二年支那事變勃發するや沼田部隊に召集せられ勇躍江南戦線に赴いた。氏は片山中隊長の率ゆる迫撃砲隊の砲手にして九月八日飯田部隊に配屬を命ぜられ虬江碼頭に敵前上陸を敢行し直に軍工路方面の戦闘に参加した。當時敵彈雨飛身邊甚だ危険なりしも氏は克く沈着豪膽にして分隊長の指揮下に敏活機宜に適する陣地占領を完了し次で敵の據點たる軍工路第四トーチカの制壓を命ぜらるゝや

正確且敏速なる操作に依り克く制壓の目的を達し遂に飯田部隊をして敵陣地攻略に成功せしめ以て爾後の作戦を著しく容易ならしめた。

協力を命ぜらるゝや正確機敏に頭敵を猛射して之を制壓し以て同部隊の戦闘を有利に進展せしめた。同月十九日午後二時には王丸房附近の敵陣地要點に對し射撃を要求せられたが氏の分隊は王丸房より友軍を猛烈に側射しつゝある敵機關銃を發見し隣りに之を撲滅し次で同地附近に活動中なる敵チエツコ輕機關銃を制壓し以て協力部隊の王丸房附近の敵陣地奪取を容易ならしめたるのみならず協力部隊に隣接して交戦中なりし歩兵某聯隊の一軒家占領に多大なる便宜を與へた。此偉大なる効果は實に氏が一番砲手として優秀なる射撃技術を發揮せると沈着機敏なる行動の賜であつた。

九月二十二日午前十一時中隊は金家灣附近の敵陣地を射撃し以て同方面の攻撃部隊に協力する目的の爲め小家宅に陣地變換を行ふや氏は警戒兵となり最も勇敢積極的に行動して陣地變換を安全ならしめた。同夜午後十時三十五分中隊は俄然敵の集中射撃を受けた。氏は當時敵の夜襲に對し警戒勤務に服し立哨中であつたが不幸にして敵砲彈は咫尺の地に落下炸裂し其破片に依り重傷を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や豪膽沈着克く彈雨の中に毅然として自己の職分を全うし其精練熟達の射撃技術は敵に多大なる損害を與へ以て戦勝獲得の貴重なる素因を與へた。洵に是れ迫撃砲隊の重鎮であり又聖戦の尊き人柱として高き勳を語り傳へ護國の神と仰がるゝであらう。

氏は即日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵伍長勳七等功七級 石井文男

氏は岡山縣小田郡山田村の人にして父を継一母を千與乃と云ひ妻ツル子との間に一子萬壽巳がある。明治四十五年七月

十九日生れで資性温厚篤實幼より父母に仕へて孝養至らざるなく人に對して親切を盡し郷黨に於ては青年團消防組在郷軍人會等公共の事には業に率先奉仕し從て一般の信任厚く洵に教育勸諭の精神を如實に遂行した人格者であつた。大正十五年三成尋常高等小學校高等科を卒業後三成公民學校に入學昭和三年三月同校を卒業し續いて三成青年訓練所に入り同七年三月同所を卒業した。昭和七年十二月騎兵第十聯隊に入營翌八年二月滿洲に派遣せられ北滿の警備に任じ同十月一等兵に進み同十一月内地に歸還した。昭和九年十一月上等兵に進級し善行證書を附與せられて滿期除隊となり翌十年二月昭和六年乃至九年事實の功により勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變の勃發するや昭和十二年八月應召福榮部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途につき上陸以來精勵群を抜き上下の愛敬至らざる所がなかつた。

而して八月二十四日より九月十一日に亘る津浦沿線の戦闘間は主として中井支隊に配屬せられ子牙河河畔に行動し到る處浸水に遭遇し水深馬腹に達する道なき所を徒涉し或は道路泥濘幾度か蹄鐵を脱し或は高粱畑中より不意に敗殘兵の射撃を受け加之補給業務は斯る状況の爲頗る困難となり爲に糧秣の缺乏を來たし分隊が自ら物資を糶集飢渴を凌ぐ有様で具に困苦を嘗め危険を冒しながらも馬匹を愛護し斯くて九月三日浪窩の戦闘に際して赤井分隊長指揮の下に三間房の敵情地形の偵察に任ぜられたがよく積極的に分隊長を輔佐し以て斥候長をして任務達成に遺憾なからしめた。

